

神武、頑張ります！～
ちよつと歴史が違ふ世
界の艦これの艦娘にな
りました～

雪たまご

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

ここは太平洋戦争に日本が勝利した世界。終戦記念に造られた超弩級戦艦・神武に生まれ変わった、主人公がいろいろ頑張るお話。※tsタグ消しました。艦これに入るのは4話から。処女作なので御指導、御鞭撻、よろしゅうな!!一話一話はすごく短いです。

目次

神武型一番艦神武についてから裏設定+	1
Q & A。	1
建造から進水式。	8
朝鮮戦争から解体。	13
出会いから対立。	18
部屋を出てから自分の部屋まで。	24
戦闘からのお風呂。	30
速度から胸部装甲。	42
きな臭さから抜錨。	47
日韓戦争からおまけ。	52
神武改についてから裏設定2+Q & A。	52

冬の潜水艦狩りから大艦隊。	62
乱舞から提督の考察。	66
アイドルから休日。	73
キューバから迎撃。	83
砲雷撃戦から別れ。	89
神武についてから裏設定3+Q & A。	95
101	
加賀さんの優雅な午前。	106
パルパル大井つちの北上さん。	112
広島から呉。	122
かるが浜から選手紹介。	128
赤城さんの憂鬱。	133

無制限潜水艦作戦。	141
翔鶴さんこんにちわ。	150
怪しい薬はもはや定番。	156
暴走神武。	162
昔話。	168
襲撃。	175
小話。	184
霧。	193
建造。	200
瑞鶴さん。	205
召喚。	211
誘拐。	217
コラボ。	222

振り返り。	237
作戦概要。	244
ばわー。	251
突入。	258
演習。	265
えっちいのはよくないとおもいます。	278
ケツコンカツコカリ。	287
黒き稲妻。	292
解説？	300
大好評につき同人誌ネタ、再び。	307
護衛任務伊。	314

護衛任務・呂。

318

護衛任務・波

327

実は応神は戦艦なのにロリなんです。

334

護衛任務・仁

341

デート。

350

もしもの話。

360

護衛任務・保十。

369

伊19の中破を見て触りたくなるのは男

の性。

378

カウンセリング。

382

女の闘い。

388

遺言？

393

谷風が仲間になりたそうにこちらを見て

いる。

400

姉妹喧嘩。

408

神武型一番艦神武についてから裏設定＋Q&A。

神武型戦艦一番艦・神武

満載時排水量188709 t

全長425 m 最大幅62 m

巡航速度32 kn 最大速度52 kn

主砲50口径56 cm 三連装塔4基12門

副砲35・6 cm 連装砲6基12門

12・7 cm 連装高角砲36門

25 mm 三連装機銃152基456門

カタパルト2

七式艦戦10機

少しだけ歴史が違う世界の最大最強の超下級戦艦。

1942年6月ミッドウェー海戦において勝利した大日本帝国はアメリカ・連合国と

講和、国際復帰を果たした。神武はその記念に建造された。元々は超大和型が造られる予定だったが、予算の都合から神武型二隻のみが造られた。

主砲は最新鋭の56cm砲。射程40kmを越える大和型に対しアウトレンジが可能。出鱈目な射程かつ他国の戦艦・空母を当たりによつては一撃で沈めることが可能というこれまた出鱈目な威力がある。

神武型の特長として自他共に認識しているのは高威力・高速・堅固である。その大型タービンは50knというおかしな速度を叩き出す。もはや超高速戦艦である。最後の特長、堅固さであるが、まず大和型と同じく注水式のダメージコントロールシステムを採用している。だが、これは保険である。開発側の考えとして自国の主砲・魚雷を受けて耐えきれぬような装甲にしたいというものがあり、実現した結果キチガイ染みた装甲となっている。反面、かなり重くなっており、装甲が大和型並みならば70kn以上出たのでは？という噂もある。

1947年呉で竣工。1996年解体。二番艦は崇神。

以下無駄設定

- ・進水の際には武蔵以上の浸水被害を起こした。
- ・朝鮮戦争時、中国義勇軍の戦艦と空母をアウトレンジから沈めた。

・朝鮮戦争時、米との共同出撃の際、戦艦イリノイと衝突。神武にななめにぶつかったが、神武はほぼ無傷、イリノイは艦首が折れたという。

・二番艦崇神と同じ日に完成し、出撃の際も同じ艦隊、解体終了日も同じ・・・という不思議な運命を辿っている。

- ・昭和天皇や今上天皇（皇太子時代）も乗艦したことがある。
- ・連合艦隊の旗艦だった。

艦これステータス

無強化・非武装

- ・耐久780
- ・火力195
- ・装甲130
- ・雷装0
- ・回避60
- ・対空101
- ・搭載10
- ・対潜0

・速力高速

・索敵85

・射程超長

・運50

56cm三連装砲

・火力+41

・対空+11

・射程超長

七式艦上戦闘機

・対空+9

・1947年に正式採用された。正式名称は三菱七式艦上戦闘機。俗称は七閃。閃いたと思ったたら七機を落としていたという話からつけられた。当時最優秀のレシプロ戦闘機といわれており、初期のジェット機に巴戦を挑み撃墜している。残念ながら登場が遅かったため時代はジェット機になっており、生産されたのは初期の100機のみである。離陸には100m弱ほど必要なので航空戦艦には向いていないが、そこは神武。全体の四分の一を甲板が占めているので問題なかったようだ。

艦娘設定

- ・濡れ羽色のロングストレート
 - ・童顔
 - ・160cmぐらい
 - ・巨乳。
 - ・戦艦特有の改造巫女スタイル
 - ・提督LOVE勢・・・？
 - ・消費がひどい。1メモリ30
 - ・暴走した島風を追いかけて捕まえることができる。
 - ・艦装がでかい。
 - ・提督をおっさんと呼ぶのはおじさんだからではなく、名前が小沢だから。
- 何故ミッドウェー海戦後に米と講和できたのか？
- ・日本の技術力が史実より高かった。
 - ・米の志気が下がっていた。
 - ・戦争特需で景気がよくなった。
 - ・米的に下手に日本を弱体化させて赤くなられても困る
 - ・リメンパーパーハーハー？宣戦布告は間にあっています。
 - ・慢心なんてなかった。真珠湾攻撃？施設から石油タンクまで全部更地にしまし

たが。

何故朝鮮戦争がおきたの？

・ 1945年頃に独立させたたら分裂しました。

独立させた理由

・ 開発するだけ無駄。

・ 軍事費削減

・ ソ連への防波堤

満州は？

・ 日中講和会議で多額の賠償金を更に積むことで返還されました。

東南アジアは？

・ 同じく独立。ただし日本兵の略奪などがなかった（補給は大事！なの）ので悪感情はなく、むしろ植民地支配の終焉をもたららし開発支援などを行っているので好感をもっています。天 皇を国家元首としたり国旗に日の丸がある国も多数存在します。

大東亜共栄圏は？

・ 存在します。といってもせいぜい困った時にはお互い助け合いましょうねぐらいの感覚。

この裏設定意味あるの？

・艦これに入ったら意味ないです。

機動部隊の大事さを一番よく知ってるはずの日本が戦艦を何故作ったの？空母を増やそうとするんじゃないの？

・空母も増えていますし、航空機の改良やジェット化なども進んでいます。

・八八艦隊計画で予定されていたいわゆる超大和型などを建造しなかつたし、大和型四番艦のように空母として造られた艦もあります。

・世知辛い世の中だから。上層部に大艦巨砲主義者がいれば、ある程度意見を尊重せねばならんです。

・終戦記念。

・国内外に対する威圧。

建造から進水式。

俺こと神無月武は一般人だ。年は17、男。今日も今日とて、トラックにひかれそうだった子供を突き飛ばして満足気な顔で代わりにひかれそうな人を助け、上から花瓶が落ちてきた人を避けさせ、自殺しようとして飛び降りた人をキャッチからの精神的フオーロをしていた。

そんな俺は今。

戦艦、始めました。

#####

かーんかーんかーん!!

バチバチバチバチバチ!!

今日も少しずつ俺、いや私の身体が造られていく。気がついた時、私は巨大な鋼鉄の塊であることを悟った。そして気合いい？でなんやかんややってたら、どうやら精神体のような感じで人サイズの透明な身体ができたんだけど・・・なぜか女だった。濡れ羽色

の長髪にぼんつきゆつぽんつ（死語）な良い体型、スラツとした足。顔も整っているし完璧に美少女です、はい。

今私という艦が造られているここは呉。しかも年は1946年。私を造っている人達の話を盗み聞くと、この世界では太平洋戦争は日本が勝ち、その記念に造られているのだそう。そんな私は神武型一番艦〈神武〉。世界最大最強になるであろう船だ。

「どうした？神武。考え事か？」

艦首から作業の様子を見ていた私に声をかけるおっさんが一人。ふつうの人には私は見えないのだが、いわゆる靈感というものがある人には見えるらしい。

〈眺めてただけ。それより今日のは？〉

「ははは、まあ待て。今日はおはぎだ」

〈待ってました！〉

ふわつと浮き上がり、ゆつくりとおっさんの所へ降りていく。

「今日は白か。」

〈何がー？〉

「何でもない。それよりほら、おはぎ。」

おっさんに差し出されたおはぎを味わって食べる。もちろん精神体なので物理的に

は食べることはできないので、食べ物に宿っている「気」を食べるのだ。おっさん曰く、気がなくなつた食べ物はいしくないらしい。

〈ところでおっさん。〉

「おっさん……どこるか爺でもいい年齢だがね。なんだい？」

〈後どれくらいで私は完成するの？確か造り始めたのつて1942年だよね？〉

「八割方はできているからね。来年には完成すると思うよ。」

〈崇神も？〉

「そうだね。長崎の方も同じペースらしいよ。」

今出てきた崇神は神武型二番艦〈崇神〉。私の双子の妹だ。大和型の武蔵と違ってガングロではない。むしろ私とそっくりだ。

「おっと私はそろそろ行かねばならん。また来るよ、神武」

〈はーい。……じゃあね、提督。〉

#####

1947年8月15日終戦記念日

今日は私、神武と妹、崇神の進水式だ。沖合いには祝砲を撃つたりや警備などで、ホテル（大和）と旅館（武蔵）にロリコン（ながもん）など主力艦がいる。何でも我が大日本帝国の海軍を各国に見せつけるんだとか。

「君達には大和達の後に祝砲を撃ってもらおう。」

〈はーい〉

〈・・・わかった。〉

「それから神武、君には式典の際に私のカンペを読み上げて欲しい。」

〈おっさん・・・〉

〈提督・・・〉

@@@@

「次は小沢海軍総隊司令長官兼連合艦隊司令長官です。」

〈(全略) 以上で終わります。祝砲、撃てえ!!〉

「(全略) 以上で終わります。祝砲、撃てえ!!」

ドオオオオオオオオオオ!!!

遠く海上で祝砲の轟音が響く。

「よし、次は君達だ。」

〈いくよ崇神〉

〈いこう神武〉

〈せえの!!〉

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

他国の海軍関係者は16 inch (41 cm) 砲とは比べものにならない22 inch (56 cm) 砲の音に腰を抜かしたそうナ。

朝鮮戦争から解体。

#####

1950年

朝鮮戦争、勃発。

開戦初期、朝鮮民主主義人民共和国（以下北朝鮮）軍は大韓民国（以下韓国）軍を圧倒し、朝鮮半島南端まで押し込むが、日米を主体とした国連軍の協力により今度は北朝鮮が満州付近まで押し込められる。

このまま終わるかに見えたが・・・

1950年11月25日横須賀

その日私はいつものごとくおっさんとお話をしていた。すると血相を変えた伝令兵がやってきた。

「小沢司令長官!!伝令です!!中国義勇軍を名乗る者達が北朝鮮側として参戦!!数およそ180000人!!緊急の御前会議が開かれるので今すぐ来てくださいとのことです!!」
「何イ!!」

〈・・・え？〉

#####

日米連合艦隊・神武

〈初めまして。ワタシはイリノイ。ヨロシクお願いするワ。〉

〈こちらこそ宜しく。私が神武です。〉

〈ええ。それにしてもあなた大きいわよね。まるでワタシが駆逐艦みたいヨ。回避とかできるのかしら？〉

〈できるよ・・・たぶん。確か最大で50knぐらいでるよ。〉

〈・・・あなた本当に戦艦ですか？装甲が実は薄かったりしませんの？〉

〈56cm砲をはじけるよ？〉

〈・・・。〉

〈・・・あの、その、神武さんがおかしいだけですから・・・。わ、私とかほら、魚雷十何発とか大型爆弾十個ぐらいもらったら航行に支障をきたしますし!!〉

〈あなたもおかしいですよ!!〉

なぜか落ち込んだイリノイさんとそれをフォローする大和。大和に噛みつくエンタープライズさん。まあ仲良くやっているのでおっさんに話しかける。

〈おっさん、おっさん。まだー？〉

「おお、丁度いいところに。今震電から電文がきてな。北西に中国籍の戦艦4空母6駆逐12一等巡洋5だそうだ。なので転進!!敵部隊を撃破する!!」

#####

黄海・仁川沖

「こちらの震電改や米のセイバーが義勇軍の劣化ミグを次々撃ち落としていく。

〈大鳳頑張ってるねー〉

〈あら、ウチのエンタープライズもよくやっていますわよ?〉

「40km先に敵艦複数目視!!」

「よし、主砲発射用意!!」

ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ!!!

〈もう撃ちますの!?!〉

〈ああー。大和以上なら届くよ?〉

「撃てえ!!」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

「3、2、1、命中!!敵戦艦2、空母1、駆逐艦2、沈みます!!」

〈おおー!! やったね!!〉

〈・・・って何てものを造ってるんですの!?! 日本人バカですか、いいえバカでしょう!?!〉

この後、砲雷戦に入ったりイリノイがぶつかってきたりしたけど圧勝でした、ブイッ!! え? 敵の潜水艦? 駆動音でバレバレ。味方の駆逐艦と潜水艦が全部撃沈させたよ。

#####

1996年 呉・解体ドック

〈色々なことがあったね・・・。〉

〈やらかしたのは主に神武。〉

〈崇神もノリノリだったでしょ!?!〉

徐徐に私と崇神の身体が薄くなっていく・・・。財政難とか戦艦無駄説とかから今年、神武型の解体が決定しちゃった。私達が生まれてから約50年も経ったんだね。おっさん・・・小沢提督も1972年に死んじゃった。大和達も解体されて私達は最後の戦艦になってしまった。小さい娘・・・駆逐艦とかは今も造られてるけどね。1993年にはへいーじすしすてむっていうのを乗せたこんごうちゃんが生まれてるし。

〈ねえ、崇神。このまま消えたらおっさん・・・いや、皆に会えるのかな・・・。〉

へ・・・知らない。けど、私はずっと一緒。へ
へありがとう。へ

世界から戦艦は消えた。

出会いから対立。

「ここはタウイタウイ泊地のとある一室

．．．の前。

「私、大丈夫ですかね．．．？」

「大丈夫ヨ、私がついてるワ。それに提督はG i r lがV e r y L i k eネー!!特にオ
パーイが好きネー!!」

．．．すごい不安になってきたんですけど。

「怖がらなくても大丈夫ネ! 貴女のほうが強いネ。それに私はまだ触られてないヨ
!」

「今まだって言った! 絶対言った!」

「さあ、行くヨー!」

バーンツ!!

．．．金剛さんもう少し丁寧に扉を開きませんか?

「提督ウ!! N e w!! F a c e!! 登場したヨー!!」

「ご苦労様。A 1 1 7 0 0 0に開発資材1 0 0の娘か。(．．．ゴクリ)初めまして、私

は小沢治郎。君は？」

小沢・・・オザワ・・・。急速に意識が加速するような感覚がして。

「おっさん？」

「・・・へ？」

「おっさん！おっさんじゃん！おっさんも生まれ変わってたんだね？会いたかったよ！それにしても若くなつたね！でもかつこいいよ！！またおはぎ頂戴！！それからえーつとえつととりあえずギュー！！」

「ちよっ・・・待っ・・・やわからか・・・苦し・・・てか重い・・・。」

「A h・・・。やっぱりこうなつたネ・・・。ッ!? H e y!! S t o p!! S t o p!! 提督が死にかけてるネー!!」

「えっ？おっ、おっさん!?!...って、この手はいつたい...?」

「O h・・・。無意識で、しかも初対面の娘のオパையை揉み続けるなんてすごい執念ネ・・・。私はいつでも待つてるのに・・・。」

#####

「改めまして、小沢治郎、25歳。階級は大佐で独身。童帝です。」

「・・・神武型一番艦、神武です。49歳、非処女です。」

「Maiden Voyageのことを言ってるならVirginの娘なんていないネー。」

「私ってこう・・なんていうか・・感じたことがなくて・・。」

「神武は装甲が堅いからネー。」

「でもイクのは早いよ?」

「50knも出るからネ。」

閑話休題

「ところで神武、君はなにをすればいいか聞いてるかい?」

@@@@

あの日解体された後。私は気が付いたらドックのようなどころにいた。周囲には妖精さん?みたいなのがたくさんいるけれど、仲間はいない。

「ずっと一緒って言ったのに・・。」

何故、私はここにいるのだろう。不思議なことに精神体だった私の身体は質量を伴っていた。背中の艦装を重たく感じることがができる。本体はどこ?と探しかけてやめる。本能?的に私自身が本体なのだと悟った。

それにしても肩がこるなあ・・・

カチャ!

ドアが開く音がして反射的に主砲を構える。

「お目覚めですかーって、はわわわー!!神武さんの主砲は危ないのですよー!!」

「あれ?電ちゃん?ってことはやっぱりここはあの世なの?」

「私も神武さんも生まれ変わっただけなのですよ。」

入ってきたのは電ちゃんだった。電ちゃんは第六駆逐隊に所属の駆逐艦。私が朝鮮戦争に出張った時の対潜部隊が第六駆逐隊だったので仲良くなったのだ。それにしても生まれ変わったってどういうこと?

「詳しいことは司令官と金剛さんに聞いてくださいです。・・・あと司令官さんにあつてシヨックを受けないでくださいです。」

「・・・?」

@@@@

「という感じでここにきたんだけど。」

「わかった。三行で説明しよう。」

深海棲艦というやつらが

現れて襲撃してくるので

撃破してください。

頑張ってね。」

「はーい。」

「ところで神武。」

「何、ジロー。」

「提督か司令官と呼んでほしいんだけど。」

「やだ。私の提督は小沢治三郎ただ一人だけだから。あんたなんかただのジローで十分。」

「だ、だけど規律として・・・！」

「ジロー、私をあまり怒らせない方がいいよ？」

私を止められるのは崇神だけなんだから。

ジローの耳にそう囁いて、部屋を出ていく。一目見て名前聞いて、おっさんだと思っただ。私達も生まれ変わってるしおっさんも生まれ変わったんだなって。でも、ぜんぜん違った。指示には従うけど、あいつを私の提督と認めるもんか。私の提督はおっさんだ

けだ。

さて、小腹がすいてきたし、おはぎでも食べようかな。

「おっはぎ、おっはぎ、おいしいおっはぎ♪」

#####

「提督……。」

「ああ、わかっているよ。けどね、神武の世界は狭い。私と崇神しかいない。君たちを仲間とは認めているけどただそれだけだ。あの娘には周りを見てほしいんだ、だから……。」

「シリアス入っているとこ悪いんだけど電話よ、司令官。」

部屋を出てから自分の部屋まで。

艦娘達の部屋は様々だ。駆逐艦のような小さい娘達は大部屋につめこま・・・狭いながらも共同生活を送っている。巡洋艦は二等、一等とでかくなるにつれ一部屋あたりの人数は減る（もっとも艀装にスペースをとられるので狭いことに変わりはない）。潜水艦は中部屋だが床の一部が開閉式で直接海に潜ることができる。そして戦艦・航空母艦だが、基本は同型艦で一部屋だ。ただし加賀さんが赤城さんと同棲してるように違う部屋に行くことも可能だ。さて、私の部屋は。

「ここが神武さんの部屋です・・・ふう。」

「ありがとう。ってデカ!!」

まるで学校の教室のような広さだ。

「はじめは広くてもね、私物が増えたり、艀装の予備部品を置いてたりすると、狭くなるのよ?」

「でも私達の部屋よりかなり広いわ・・・不幸だわ・・・。」

山城・扶桑↑運10

神武↑運50

「「ふふふふ……」」

「えっと、その、案内ありがとね?じゃ!」

案内してもらっておいてなんだけれど、負のスパイラルに入り始めた扶桑姉妹の近くは怖い。慌てて自分の部屋に入る。

「さて、艤装の点検でもしますかね。」

@@@@

ジロー君を脅して部屋を退出した後、私は迷っていた。気がついたと思ったらドツクから連れ出され、そのままさっきの部屋につれてかれたのだ。道がわかるわけもない。迷っているときに一番大切なことは何か。それは迷っていることを自覚し、素直に誰かに道を聞くことである。

と、いうことでたまたますれ違った扶桑さんと山城さんを捕まえた。

「お久しぶりですー。」

「あら神武ちゃん。」

「貴女も迷子になったの?」

「え、?」

迷子が増えてしまった。

「三人寄れば文殊の知恵というし」

「山城は、はいしか言わないし」

「いっしょに迷子になりましょう?」

うわぁ・・・。

@@@@

一回目の分岐

「私は右だと思うわ・・・。」

「そうですよね、右ですよね!!」

「でも左のような気も・・・。」

「さっずがお姉さまやはり左ですよね!!」

「でも右かしら・・・。」

「ですよね!!」

「あ、私左で。」

「アアン? 神武、てめえ扶桑姉さまのいうことに逆らうってんのか? アアン? どうなん

だ、ゴラア!!!」

「じゃあ左にしましょうか。」

「そうですね、行きましょう。・・・ほら神武も早く。」

この姉妹がずつと迷子な理由がわかった・・・。というかそういう人達だったの思
出した・・・!!

ふと壁を見ると。

〈食堂↑ ↓第一浴場〉

「ま、いつか。」

@@@@

二回目の分岐

「ところで扶桑さんたちはどこに向かってるんですか?」

「食堂よ・・・?」

「目的地はいつしよですね。で、どの方向に行こうとしてるんですか?」

「前・・・かしら。」

〈食堂↑ →ブラジル ↓艦娘達の部屋〉

「食堂は左って書いてあるでしょ!? 何で前行くんですか!? というかブラジルって何!?」

「前に行くとか何かあるような気がしたの……。」

@@@@

三回目の分岐

「だからあ！何で違う道に行こうとするんですか!？」

扶桑姉妹を正座させてお説教を始める。

「ここに書いてあるでしょう!？」
〈第二浴場↑ ↓食堂〉 って!!」

「左の方がいい気がしたの……。」

「黙らっしやい!!」

何故か持ってたハリセンで扶桑さんをはたく。

「扶桑姉さまになんてことを!!」

「てめえは黙ってる、このイエスマン。」

56cmを向けて山城さんを黙らせる。お説教を再開すると後ろから足音が二つ。

「あれ？神武っち、お久しぶりー。って何やってんの?」

「三人で何かのプレイ?今度私も北上さんとやってみようかしら。」

救世主キターー!!!
!!!

@ @ @ @ @ @

部屋の中で艤装を点検しながら思う。よくこの部屋までたどり着けた……。あの後北上さんと大井さんに先導してもらって食堂までたどり着いた。おはぎウマー・タイムを堪能し、いざ自分の部屋に行こうとするとき!!あれ?私部屋知らないよね、どこなのか。必死で食堂内を見回すと丁度食べ終わった扶桑姉妹にまだまだ食べそうな一航戦の二人。あきらめて扶桑姉妹に助けを求めて。道がわからないので扶桑さんの感じるがままに進み、やっとたどり着いた。

あれ?どうやってたどり着いたんだろう?

戦闘からのお風呂。

進水・・・新しく建造した艦船を造船台から滑らせて水上に浮かばせること。(広辞苑第六版より)

かの大型戦艦・武蔵の進水の際には海面が上昇し、多数の浸水被害が報告されたという。大型の艦船を進水させるときには必ず周囲の環境を考慮しなければならない。

#####

神武型の部屋

「神武さん神武さん、お風呂に行きませんか？」

「お風呂？でも私どこも損傷してないよ？」

「大丈夫なのです。電に策あり、なのです。」

@@@@@@

「まさか傷がないなら付けにいいこうという策だとは思わなかった。」

「・・・その、なんだかすまないな。電は時々黒くなるんだ。」

私は第六駆逐隊の娘達と共に大海原にいる。

電ちゃんは私を誘いに来た後、暁・響・雷を連れてジローのところへ。

「司令官さん、親睦を兼ねて神武さんと実地訓練に行ってくるのです。」

二パーパー☆

電ちゃんの花笑みにジローはあっけなく轟沈。

「そして今にいたる、と。」

「そろそろ深海棲艦がよく出てくるところね。神武、索敵お願い。」

「あいわかった。艦載機の皆ーお仕事ですよー。」

@@@@

一戦目。

「えっと、10時の方向にヲ級2隻、タ級1隻、リ級1隻、ハ級2隻で、ヲ級が1隻
agship、それ以外は全部eliteだつて。」

「一人前のレディーな暁には丁度いいわ。コテンパテンにしてあげる。」

「近づいて雷撃だな。」

「程々に汚れるのですよ。」

そんなこんなで戦闘開始。

ヲ級が飛ばしてくる艦攻艦爆艦戦を私の七式艦戦が次々と撃墜させていく。その様子を横目にまずはタ級を狙う。戦艦の一撃は駆逐艦では即大破する可能性が高いが、駆

逐艦が戦艦を沈めようと思ったたら近づいて雷撃しかない。駆逐艦には小口径砲しかないし、戦艦の装甲は堅いのだ。しかし周りの小さいのが近寄せないし、なにより戦艦のレンジは広い。・・・なので。

「一撃必殺！主砲・・・撃てえ!!」

ドゴオオオオオオンツツツ!!!

相手のアウトレンジから攻撃して沈めることにした。

「ターツ!?!」

我ながら見事夕級に命中。一撃で沈めた。

「神武さんすごいのです。ではヲ級もお願いしますね?」

・・・え?

「まかせたわ。」

「まかせた。」

「まかせるわね。」

なんで皆そんないい笑顔でおいでいくの!?

「ヲツヲ（訳・どんまい。）」

「・・・あー。容赦しない。」

嘲笑するように私の肩を叩いてきたヲ級eliteを連装砲でぶん殴り押しつけて

零距离砲撃、沈む。そこから慌てて逃げようとしているヲ級flagshipに追いつき体当たり。とどめを刺そうとしたら

「あれ？もう沈み始めてる・・・。」

とりあえずこっちは終わった。さて向こうはどうなってるのかな、と。

「こっちなのです！」

「リツリ、リリ。」

「今です！」

「「ジェットストリームアターック!!!」」

「リーーーーッ!?!」

・・・見なかったことにしよう。

戦闘評価S

損害0

@ @ @ @ @ @ @ @ @ @

二戦目

「まったく、さっきの敵は腑甲斐なかったのです。今度はヨ級を探してみましょう。」

「今度は潜水艦か・・・でもどうやって？」

「ここに司令官さんがくれた水中ソナーがあるのです。」

「ジロー・・・」

「司令官・・・」

あの黒い笑みで脅されて電ちゃんに捧げたんだろうな・・・

デーデーデー、デーデデン、デーデデン。デーデーデー、デッデデーデデン。

「反応あり、なのです。大きさからするとヨ級2隻にカ級2隻なのです。」

「もしかしてあの二等巡洋・・・ト級とヘ級のあたり？」

「えっ・・・そうなのです。」

「んー・・・じゃああの2隻殺るから潜水艦はまかせた。」

まだこちらに気づいていないト級とヘ級に主砲を向ける。

「(神武、なんか怒ってない?)」

「(やはりさっきのアレが原因だろう。)」

「(ちよつとまづかつたわね・・・)」

「どうかしたの?」

「いえ!なんでもありません!」

「あー、私ってほら、装甲堅いから。」

カ級が潜っていく。さて……。釣竿を取り出して糸に鋼材をくくりつけて待つ。……。……。……きた。

「うりゃ！」

「カーツ!!??」

釣り上げたカ級は白旗をあげていたので捕まえてバケツの中へ。ふむ……

「カ級ってかわいくない？」

「うーん……」

「言われてみれば……」

「そんな気も……」

「する……?」

戦闘評価 A

損傷・神武：耐久120↓119

鹵獲・潜水カ級

@ @ @ @ @ @

三戦目。

「こうなったら鬼を見つけるしかないのですよ。」

「でもどうやって見つけるの？」

「電にまかせるのです!!」

「うわぁ……。」

「電エ……。」

「これはちよつと……。」

「さすがに……。」

「何か文句でもありませんか？」

「「「いいえ!ありません!!」」」

電ちゃんの策とは、先程鹵獲した力級の腰?にワイヤーをつけ力級に装甲空母鬼を探させるというもの。深海棲艦同士、なんらかのつながりがあると考えたようだ。うん、まあ理にはかなってるんだけどね……。

「いいですか?力級。あなたにはこれから装甲空母鬼を連れてきてもらいます。」

「力、カ力、カー!!」

「そんなことできない?できるできないではなくやるのです。もし連れてこなかった

ら・・・。神武さんとひたすら戦闘訓練をしてもらいます。大丈夫、沈み始めたら修理するのです。」

「カ、カカカ、カカー！」

「言うことをよく聞く子は好きなのです。さあ行くのです!!」

しばらくして。

「ウチのカ級をいびりまくったのはてめえらかー!!」

「動くな、です。この子がどうなっても知りませんよ?」

すっごいキレイな装甲空母鬼とカ級を人質にとった電ちゃんが対峙していた。

「ヲツヲツヲ、ヲヲ。」

「あ、わかる? 私達も苦勞してるのよ。」

「タタツタ、タ、タツタタ。」

「え? 峰打ちしてくれるって? ありがとう!!」

「ルルル、ル、ルルルルル。」

「いやこちらこそウチの電が迷惑かけてすまないな。」

「ルル、ルツルルル、ルルル。」

「お互い様だつて？ありがたいな、すばしーば。」

「イーッ、イイイーイ、イーッ。」

「私みたいに強くてかくなりたいって？じゃあおはぎを食べなさい。あれは至高の一品だから。」

戦闘評価D

損傷・暈改：30↓29

響改：30↓29

雷改：30↓29

電改：30↓16

@@@@

タウイタウイ泊地

「や、やっと帰ってこれた・・・。」

「さあ神武さん、お風呂に行くのです!!」

「でもジローに報告とかしなくてもいいの?」

「それは私がいつてくるわ。皆は先に行ってきて。」

「少し司令官に用があるから一緒に行くよ。」

「あ、ありがとう。先に入ってるわね。」

ジローのところには雷と響が行くことになったので、私、暁、電で行くことに。

「提督は今いないから私から伝えておくワ。報告ご苦労さまネー。」

「はい。私達もお風呂に行つてきますね。」

「お風呂・・・そういえば神武も入るの?」

「?そうですけど?」

「ちゃんと準備はしたノ?」

「準備?」

「Oh, Manualがそういえばなかったネ。いつもどおりの湯量だと排水量50000t以上だとあふれちゃうのネ。だから、大型艦が水に入るときは湯量を減らさないとけないネ。」

「神武はどれくらいなの?」

「えーつと確か190000t級だったはずだから、脱衣所まで湯があふれちゃうネ、H A H H A っつて私の仕事が増えるワ!!まだ間に合うかしら!!」

〈きやあああああ!!!〉

〈な、流されるううううう!!〉

〈えへへ、忘れてた、ごめんね。〉

〈あらー。天龍ちゃん、脱衣所から水があふれてるわ。〉

〈何が起きてんだ!? っつて暁、電大丈夫か!?!〉

〈ま、まるゆを誰か助けて〜〉

「あ、後で入ることにしよう。」

「私もそうするわ。」

ガシッ!!ガシッ!!

「二人も手伝うネー。」

「たはは・・・はい。」

速度から胸部装甲。

ノット・・・航海、航空、潮流、風速などに用いられる速さの単位。記号はk t またはk n。1ノットは1時間に1海里を進む速さで、時速約1.852kmである。ノットの語源は16世紀頃に測程索につけた結び目k n o tを数えて船の速さを決めたことに由来する。(ブリタニカ国際大百科事典より)

@ @ @ @ @ @

島風は大日本帝国の一等駆逐艦だ。初代、二代目共に最大速度は40knとても速いことで有名だ。二代目、まあいわゆるぜかましは1943年5月10日竣工。私の竣工は1947年8月6日なわけだけど・・・まあ数年間で何かがあつたらしく、排水量的には60倍以上の私が50knをたたき出すということがおきた。しかし技術改良の結果生まれたターピンを乗せられた艦艇は今のところこの泊地には私しかない。ということだ。

「神武、島風が逃げ出した。捕まえてきてくれ。」

「りよーかい。」

「神武さん、島風さんが私の魚雷を持って走っていったのです。捕まえてきてくれます

か？」

「イエス、マム!!」

「神武う：：ぜかましちゃんかへ那珂ちゃんてアイドル（笑）だよ。m9（ハハ）つていうんだよ!!酷いよね!!」

「いや、事実だから。」

そんなこんなで走り出したやめられない止まらない状態の島風を捕まえるのは私の仕事なのだ。

「だからさ、おとなしくしない？」

「え？やだ。」

#####

56cm三連装砲・・・大日本帝国海軍の作り出した世界最大の艦載砲である。射程は60km以上、砲弾はおよそ2.5tと小型の噴進弾レベルである。砲塔は一基あたり約5000t、二等巡洋艦と同じくらいの重さだ。砲身は28mという長砲身。1942年の日米講和会議後、政府は少しずつ情報開示を行ってきたのだが大和型戦艦に46cm砲（18inch砲）が積まれていることを知った欧米は驚愕。イエローモンキーの分際で・・・と歯をかみ締めていたが、47年の神武型の進水式、50年の朝鮮

戦争で神武型が戦艦（この戦艦は中国籍だったがソ連から購入していたものであった）を一撃で撃沈させた際にはイエローモンキーなどと侮ってはいたられないと思ひ知ったという。「最強の軍隊とは何かといわれれば、その国に喧嘩を売らせない軍隊だ」と考えれば56cm砲の存在によって日本に喧嘩を売る国がなくなっただと思えば、真にこの大砲は最強の存在だろう。

@@@@@

「神武さんのつてほんとにすごいですね!! 太くて硬くつて長いし。」

「砲身がね。」

「神武自身もすごいっぽい? でかくて硬い、けど早いっぽいし。」

「本体がね。」

「はっはっは!! 私も太くて硬くて長いぞ!!」

「25mmは黙つてろ。」

#####

おっぱい・・・幼児語。乳。また、乳房（広辞苑第六版より）

@@@@@

この世界では一般的に大きい艦艇になるほどオパァイが大きくなるのではないかと
いわれている。だがあくまでも一般的にであり、事実潮は大きいし、夕張はない。しか

し戦艦は皆大きいし、正規空母も大きい（大鳳？この泊地にはいませんよ？）。

「だからさ、夕張、気にすることないと思うよ。」

「そのたゆんたゆんしてるものをおもちの人に言われたくない!!」

「大きいと肩がこるのよ・・・?」

「戦闘にも邪魔だし・・・不幸だわ。」

「黙れ不幸型姉妹。私のほうが不幸よ！見てよこの真つ平らな胸!!まるで龍驤みたいじゃない!」

「飛び火した!」

「龍驤のは発着板なんだからしょうがないでしょ!」

「ちやうわ!!召喚式や!!」

「その・・・大きくても嫌なだけですよ？提督さんに〈駆逐艦のに巨乳・・・しかも服が破けたときだけ見えるとは・・・いい。〉とか言われるし!!」

「そんなこと言われて見たいわよ!!私なんて〈虚乳（笑）〉とか言われたのよ!!」

「m9（＾ ㇿ ㇿ）」

「死ねええええええええええ!!」

ドオオオオオンッッ!!

パヨーン。

きな臭さから抜錨

1956年、春。竹島付近を巡回中の巡視船が不審船を発見した。不審船は漁をして
いるわけでもなく特に怪しい様子もなかったので漂流船と判断。保護を目的に接近、船
員が話しかけたところ、突如隠し持っていた銃で発砲。船員が腹部に銃創を負ったた
め、慌てて不審船の船員を全員拘束した。

後に「竹島事件」と呼ばれるものである。

@ @ @ @ @ @

1955年冬・呉

「どうだい？神武。元気にやってるかね？改装が終了したと聞いたが。」
へあ、おっさん!!久しぶり！見て見て、かつこよくなつたでしょ!？」

今年の春から私は改装されていた。それに伴って精神体も少し変わった。100m
長あった後部甲板が40mほどになったことで背中から出ていた甲板も短くなったし、
噴進砲が載せられたので肩に筒が増えた。あと、おなかの部分に円を六等分して互い違
いに黒く塗った絵がついたよ!!

「改装前も後も君はかっこいいよ。それよりほら、お土産のおはぎだ。」

「やったーっ!! おっはぎ!! おっはぎ!!」

モグモグ、モツキュモツキュ。

「ごちそうさまでした。ところでおっさん、どうしてここにこれなの? 今忙しいんじゃない? なかったっけ?」

「ああ、実は少し韓国の方がきな臭くてね。広島市内で韓国の日本大使を含めて会議が開かれるんだ。」

「ふーん。私が出張するような事態にならなきゃいいけど。」

「そうあってほしいね。」

@@@@

1956年夏・呉

「やあ、また来たよ神武。」

「・・・久しぶり、神武。」

「おっさんに、崇神!? 今長崎じゃなかったの?」

「・・・私達は双子艦だからある程度離れていても大丈夫・・・みたい。」

「本題に入りたいんだけどいいかな?」

「あ、うん。ごめんね。」

〈・・・どうぞ。〉

「ついこの前に起きた竹島の事件のことは聞いているかな？」

〈一応。えーつと保護しようとしたら撃たれて、捕まえたんだっけ？〉

〈・・・私が知っているのもその程度。〉

「それだけ知っていれば十分だ。それで捕まえた人達が韓国人だったんだけど、今向こうはすごいことになっててね。」

おっさんはいったんそこで言葉を区切るとハンゲルで書かれた新聞を取り出す。

「何が書いてあるかわからないと思うから、簡単に訳そう。」

〈我が国の領土、独島付近で休養していた国民が大日本帝国に不当に拘束されている。

これは許されざることであり、我が国は日本政府に国民の解放と賠償金の支払いを要求する。〉

・・・とまあ、だいたいこんな内容が書いてあるんだ。あ、独島というのは竹島の韓

国名だ。」

〈・・・えっ・・・と・・・。〉

〈・・・。。。。。。バカ。〉

「今、向こうさんは朝鮮戦争の跡から我々の予想を上回る速さで急速復興しているんだが、国内があれいているらしくてね。」

「大日本帝国を敵として国内をまとめ上げよう……つてこと?」

「そうなるかな。」

「勝てると思ってるのかな?」

「さすがに勝てないことぐらいはわかってると思う。おそらく開戦してすぐに攻め込んでさっさと講和するつもり。」

「政府の見解も概ね崇神と同じだ。ということ君たちには対馬に私とともに向かうことになった。」

「威圧でもするの?」

「そういうことだ。外務省も頑張つてはいるが、最近日本海領海に侵入する武装船が増えてるし、向こうさんはやる気まんまんのようだからね。」

「本当に戦争になりそう……。それにしても韓国の国力はまだまだ回復できていないと思うんだけど……。背後にどこかいるのかね……。」

@@@@

1958年春・対馬・神武

「韓国、攻めて来ないんじゃない?」

「神武は甘い。まだ警戒が必要。それにそんなこと言つてると……。」

「早期警戒機から通信です!!……これは?!?識別パターンなしの空母3隻、軽空

母2隻、一等巡洋2隻、二等巡洋4隻、駆逐艦6隻が向かってきます!!」

〈神武・・・〉

〈な、なはは・・・〉

未確認艦隊が来るまでもう少し時間があるので念のために簡易点検を行う。

〈それにしてもどうやってあれだけの数をそろえたんだろうね?〉

「おそらく中国かソ連の型落ちだろう。あの国にあれだけの量を作る工業力はない。」

「簡易点検、終了しました!!」

「あいわかった!!神武、抜錨!!未確認艦隊に接触する!!」

〈よーし!れつつごー!!〉

日韓戦争からおまけ。

先日の対馬沖海戦については特に語るところはなかったので簡単流れだけ伝えようと思う。

未確認艦隊に領海に侵入してるからそれ以上くるなら撃つよというようなことを伝えると、向こうの空母から各種艦上機が飛び立ったので、武力行使を開始。翔鶴と瑞鶴から飛び立った艦戦が敵機を撃ち落とす。同時に私と崇神が砲撃を開始。数分後、敵艦の全滅をもって海戦は終了した。

@@@@@

「宣戦布告が今きた!?!」

「は、どうやら、我々と同じく宣戦布告と同時に対馬を占領するつもりだったようであります。」

「だが、失敗した、と・・・」

「さんざんだねー」

「・・・最初からわかっていたこと。」

〈私の前に現れたことが間違いだったのよ。〉

〈あ、妙齡型の足柄さん。〉

〈だれが妙齡よ!?!〉

〈・・・(男に) 飢えた狼(笑)〉

〈きーっ!!〉

〈あ、あの、ごめんなさい、姉さまが・・・。〉

〈羽黒ちゃんのせいじゃないよ。〉

〈なんで私は足柄『さん』で羽黒『ちゃん』なのよ!?!羽黒のほうが年上なんだからね!?!姉妹で一番私が若いんだからね!?!羽黒は猫かぶってるだけよ!?!〉

※本当です。

那智・・・28年11月竣工

羽黒・・・29年4月竣工

妙高・・・29年7月竣工

足柄・・・29年8月竣工

〈「え・・・!?!」〉

〈へ、提督まで・・・皆して酷いわ!!〉

@ @ @ @ @ @ @ @ @ @

「上からのお達しでな。韓国本土を攻めることになった。そこで連合艦隊を二つに分けることになった。まず第一艦隊、旗艦は神武だ。」

〈はーい。〉

「第二艦隊旗艦は崇神だ。」

〈・・・了解。〉

「両艦隊ともにやることは

・沿岸部の都市制圧

・陸軍輸送艦・空母の護衛だ。今回の作戦は陸海空の合同作戦だ。海軍が艦砲射撃で、空軍が爆撃で援護しながら陸軍が制圧していく。」

〈一気にけりをつけようってわけだね?〉

〈・・・効率的でいい作戦。〉

「第一艦隊は左回りで次々と制圧してくれ。最終目的地は仁川及びソウル。」

〈まっかせといて!!〉

「第二艦隊は右周りだ。最終目的地は江陵だ。」

〈・・・更地にしてあげる。〉

#####

〈あれ？今日は大和と武蔵もへり積んでるの？〉

〈ええ。どつさりと。〉

〈へりのほうが制圧しやすいといわれてな。〉

〈ま、私達はひたすら撃つだけだけどねー。〉

〈陸に向かって撃つだけとは・・・つまらんものだな。〉

バラバラバラバラバラバラ・・・

ヒューー・・・ダーンツ!!

ヒューー・・・ダーンツ!!

ヒューー……ダーンツ!!

ドゴオオオオオオオオンツツツ!!!!

ドゴオオオオオオオンツツ!!

ドゴオオオオオオオンツツ!!

ドゴオオオオオオオオンツツツ!!!!

ドゴオオオオオオオンツツ!!

ドゴオオオオオオオンツツ!!

大韓民国は文字通り火の海となった。空から爆弾が、海から砲弾が、ぞくぞくと攻め込んでいく日本兵が、都市を破壊、制圧していく。ソウル制圧後、大韓民国は降伏。大日本帝国の占領下になった。今後、大韓民国は変わっていくことになる……。

@@@@

おまけ

神武の好物はおはぎである。おはぎとはうるち米ともち米を混ぜて蒸し、あんでくるんだものである。それでは逆に、もちであんを包んだ大福はどうなのであろうか。我々調査班は神武に聞いてみた。

へうーん……いや、おいしいんだけどき。こう、なんか違うんだよね。〜

どうやら大福では餌付けすることはできないようだ。くっ、小沢提督め……おつといけない。ではほかのお菓子はどうか。給糧艦間宮によいお菓子はないか聞いてみた。

〈私のところで人気があるのは、主にアイス、最中、饅頭ですね。特にアイスは一番人気です。〉

ありがとう間宮、貴女のことは忘れないっ!!それでは早速テストだ。

饅頭の場合

〈まあおいしいよね。〉

最中の場合

〈うーん、あんまり好きじゃないな。食感があまり好きじゃないや。〉

アイスの場合

〈冷たくておいしいよねー♪〉

おっ?これは・・・!!

へさつきからいろいろ聞いてくるけどさ、全部私の中で作れるって知ってる?<

・・・え?

へ大和型より居住性、いいからね?<

なんてことだ!! 餌付けしようにも既に良いものをセルフで食べれる・・・だと!?! 何のために俺達は訓練をさぼったんだ!?

「おや?さぼったのかい?」

へあ、おっさん。<

・・・お、小沢司令官殿!?

「君たち、腹痛とかいって訓練抜け出したんだって？隊長が心配して探してたよ？」

.....

「早く行ったらどうだい？今なら間に合うかもね？」

あ、ありがとうございますっ!!ではっ!!

〈優しいね〉

「私もよく訓練を抜け出したからね。それよりも神武。」

〈なあに？〉

「おはぎが好きだからって知らない人についていてはだめだぞ？」

〈そんなことしないよ。〉

「そうか、ならいいさ。」

へだって私が好きなのは、・・・提督が持ってくるおはぎなんだから。▽

神武改についてから裏設定2+Q&A。

1955年の改装

排水量188709t↓189087t

動力源原子炉

全長425m

最大幅62m

巡航速度32kn↓35kn

最大速度52kn↓62kn

主砲50口径56cm三連装砲4基12門

副砲35・6cm連装砲6基12門

12・7cm連装高角砲18基36門

25mm三連装機銃152基456門

一二式噴進弾〈鳳仙〉専用噴進砲6門

カタパルト及び後部甲板↓ヘリコプタ用甲板

一零式戦闘ヘリコプタ〈天穿〉8機

改装後の特徴としては125mあった後部甲板が40mと短くなったこと、噴進砲が加えられたこと、そして何よりも動力源が原子炉に変わったことだろう。

30年代後半から行われていた原子エネルギーの研究を踏まえて、神武型には当初から原子炉を用いる予定だったが、1944年のアメリカ・ニューメキシコ州ロスアラモスで起きた試作原子爆弾の誤爆発、いわゆる「ロスアラモスの悲劇」によって安全性が問題視されたため中止となった。だが、研究が進み試製原子力エンジンの安全性が確認されたため改装により乗せられた。この原子炉は当時の帝国の技術の集大成であり解体された1996年においても安全基準を満たしていたという。現在取り出された原子炉はいくつかの改良を加えられながらも広島島の原子力発電所で稼動し続けている。

改装後の神武型は主に沿岸拠点の制圧に運用された。その運用例の一つに日韓戦争があげられるだろう。

艦これステータス

無強化・非武装

・耐久790

・火力195

・装甲190

- ・雷装 0
- ・回避 80
- ・対空 110
- ・搭載 6
- ・対潜 0
- ・速度 高速
- ・索敵 90
- ・射程 超長
- ・運 50

改装で変わった艦娘神武。

- ・背中から出ていた二つのカタパルトが短くなった。
- ・肩からロケットランチャーが。
- ・お腹のあたりに核マークが描いてある。
- ・燃費が良くなった。
- ・更に早くなった。

日韓戦争の原因。

- ・中ソから型落ちした軍艦を購入していた。
- ・現政権への批判が強くなってきたので。
- ・その他もろもろ

中ソが型落ちを販売した理由

- ・型落ちだから。
- ・諜報活動によって韓国が日本に喧嘩を売ろうとしているのを知っていたから。
- ・韓国が日本に喧嘩を売り負けてぼろぼろになったところを北朝鮮に攻めさせるつもりだった。

・まずありえないだろうけど、日本が疲弊してくれば。

韓国の敗因

- ・技術力不足
- ・そもそも国力が圧倒的に違う。
- ・使用武器の年代差
- ・宣戦布告が遅れたことによる奇襲扱いによって国際的な批判が大きくなったこと。
- ・沿岸部に首都機能があるため攻めやすかった。
- ・国内で内乱が起きた。

冬の潜水艦狩りから大艦隊。

「神武はどのくらいで改装できるようになるの？」

「神武・崇神共にLV50以上になったら。私だけ50LVでもだめだよ。」

「なん・・・だと・・・!？」

神武、ただいまLV12

@@@@

タウイタウイ泊地・神武の部屋。

「邪魔するぜー。」

「お邪魔します。あー広いわねー。」

「いらっしやい。どうしたの急に？」

部屋で艦装の点検・整備をしていると天龍・龍田姉妹がやってきた。私はこの姉妹とはあまり面識がない。私の意識がはつきりし始めたのは1946年頃なのだが、同じ年に彼女達は横須賀で解体されている。ただ、彼女達が云うには意識がはつきりしていな

いに語りかけたり、色々なことを教えてくれていたらしい。私がすぐに精神体になれたのも、無意識下に彼女達がやりかたを教えてくれたからなのかも。

「それで、だ。神武、お前を潜水艦狩りに誘いに来た。」

「潜水艦狩り?」

「ああ、春になると潜水艦が増えるんだ。だから今のうちに狩ってこいつてさ。参加者には間宮アイス券一枚だ。ただし、貰ったのは6枚で今のところ俺、龍田、北上、大井、矢矧だから、残り一枚だ。どうする?」

「私、対潜装備ないけど。」

「いや、お前には護衛をして欲しい。潜水艦の相手をしてる時にル級とか夕級に来られたらちよつと厳しいからな。」

「あくまで厳しい、なんだね。まあ・・・そういうことなら。」

「ちなみに提督の命令じゃないのよ? 天龍ちゃんがね、へ遠征中とかに駆逐艦が襲われないように潜水艦の間引きをやらせてくれ。〴〵って言つて、そういうことならつて提督が間宮券くれたのよ?」

「あつ、バカ、龍田! 言うんじゃねえ!!」

・・・なんだろう、すごい心がほんわかするんだけど。

#####

「よし、全員そろったな？じゃあ行くぜー!!」

今回の陣形は輪形陣で中央に私がいる。七式艦戦、俗称七閃で周囲の索敵をし、持たされた水中ソナーで潜水艦を発見次第、報告。一番近い人が撃破する。その間もレーダーで索敵を続け、リ級以降が現れたら私が撃破、という寸法だ。ただ私がでか過ぎてどう見ても輪形陣というよりは土屋って感じ。

ピコン・・・ピコン・・・ピコン・・・ピコン・・・ピーンツ!!

「きたよ!!えーっと、天龍のところにヨ級、矢矧のところにカ級だね。」

「わかった!!神武!周辺は任せた!!」

「任されたー、・・・・って敵はいないけどね。」

レーダーにも反応はない・・・けど、念のため周囲への警戒は怠らない。

「神武っち、調子はどう?」

「あれ?北上さんに大井さん?援護に行かなくてもいいの?」

「天龍さんのところは大丈夫よ。龍田さんがいるもの。」

言われてみると確かに、互いにフォローしあい踊るように攻撃を加えている。

「それにやはぎんも強いからねー。」

「砲雷撃戦、始めます!!」

「カーツ!?!」

一撃ですか。

@@@@

ピコン・・・ピコン・ビーツ!!ビーツ!!ビーツ!!ビーツ!!

「な、なにこれ!?!」

「どうした!?!」

「カ級とヨ級、あわせて24、囲まれてるよ!!」

いやな予感がし、先ほど戻ってきていた七閃をまた偵察にいかせる。

「あらー、大変ねえー。」

「・・・ひとまず退却するべきだな。」

「ちよおおおおと待ったああああ!!」

ババーンツ!!

クルクルクルツ、シュタツ!!

爆発とともに北上さんと大井さんが空中回転しながら現れ、見事に着地。

「こういう時こそ、無駄に魚雷を積まれまくったあたし達重雷装艦の出番でしょ!!」

「いや、待て。」

「本当は泊地をでた時から魚雷を撃ちたくて撃ちたくてうずうずしているの!!」

「だから待てと」

「ヒヤッハー!!もう我慢できねえ!!魚雷祭りだあ!!」

「待てつつつてんだろ話聞けよ!!って本当に撃ちやがった!」

合計80本の酸素魚雷が潜水艦達に向かつていく。無論、無航跡だから見えないんだけどね。

突然だけど、下手な鉄砲も数撃ちや当たる、という言葉がある。意味は、どんなに下手でもたくさん撃てばひとつぐらいまぐれ当たりがあるということ。なら上手い人が数撃てばどうなるのか。それは……

ズシンツッ!ズシンツッ!ズシンツッ!ズシンツッ!

……たくさん当たるのだ。海中で爆発が起き振動が伝わってくる。

1・2・3、4、5……8……11……16……21。

水中ソナーを見るとまったく表示がない。同時に索敵に出していた七閃が帰ってくる。……いやな予感が的中したみたい。

「ねえ、天龍。毎年この時期に潜水艦狩りするの?」

「ああ、そうだ。それがどうだつてんだ?」

「あのね、私たちまんまと罠にかかったみたいだよ?」

「つ! どういうことですか!?!」

「七閃を索敵に出してただけどね?」

北から装甲空母姫、鬼、鬼、夕級、リ級、ト級。

東からヲ級、ヲ級、ヲ級、又級、ル級、チ級。

南から夕級、夕級、ル級、又級、二級、二級。

全部 flagshipだつて。」

「はは・・・なんだそれ? 冗談だろ?・・・マジ!?!」

「あらー。まずいわねー。」

「速やかに撤退すりべきです!!」

「え・・・もしかしてあたし達のせい?」

「いや、北上さんと大井さんがやらかしてなかつたらさつきのに潜水艦が増えてた。それよりもここは私が引き受けるから皆は助けを求めてきて!」

「そんなことできるわけ・・・!」

「天龍ちゃん? 私たちは足手まといにしかならないわ。神武ちゃんは強いから大丈夫。」

早く帰って救援を要請するのが最善なのよ。」

敵艦隊の規模を考えると当然の策だ。私は爆弾や魚雷を数十発受けた程度では無問題けど、彼女達は一発でも沈む可能性がある。なのに、一緒に戦ってくれなんて言える訳ない。

「くそっ、わかったよ!!神武!すぐに戻ってくるからな!!」

「神武ー?待ってるのよー?」

「必ずや増援をつれてきます!」

「神武さん?あなたもわたしの思い人なのだかモゴモゴ」

「はい、大井つちは黙っててねー。じゃあ神武つち、後ろは任せるね。」

「うん、任された。」

皆を見送り振り返る。

おー……これはまた豪勢なこっつて。

「ごめんねー。ここから先は有料なんだ。君たちの命で支払ってもらおうよ。」

乱舞から提督の考察

敵航空機を七式艦上戦闘機：七閃に応戦させる。だが装甲空母3隻、空母3隻、軽空母3隻が出す機体は圧倒的に多く、あつという間に制空権を奪われてしまう。しようがないので敵艦爆・艦攻を対空兵器で撃ち落とすことで対応する。機銃の弾が敵とすれ違う、まさにその瞬間、爆発。敵機が落ちていく。近接信管のおかげだ。撃ち墜としたら4基の主砲をそれぞれヲ級3隻と又級に狙いを定め撃つ。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

又級轟沈。ヲ級轟沈。ヲ級大破。ヲ級大破。

ズズウーンツツ!!

横から衝撃を感じた。どうやらヲ級、ル級からの砲撃に、ヲ級、リ級、ト級、二級からの雷撃のようだ。副砲でヲ級、リ級、ト級、二級を吹き飛ばす。私の副砲は35.6cm連装砲。小型戦艦の主砲だ。故にしつかり当てれば小型艦を簡単に撃破できる。

ヲ級轟沈。リ級大破。ト級轟沈。二級轟沈。二級轟沈。

装甲空母の機体を迎撃しているとヲ級3隻が縦一列になってつつこんでくる。いつぞやの第六駆逐隊のジェットストリームアタックを思い出す。ヲ級達に向かって加速、

鬼轟沈。鬼轟沈。

「あり？避けられた。」

「・・・貴様、人が話している時に」

ドゴオオオオオンツツ!!

ドゴオオオオオオンツツツツ!!!

副砲で撃ち、避けられたところを主砲で撃つ。

「撃てといわれたねえ。」

「くっ、この外道が・・・!!」

「それが最期の言葉？じゃあね。」

装甲空母姫の身体を踏みつけ、頭部に副砲を撃つ。

「さてと、帰・・・れないね、これは。」

どうやらいつの間にか囲まれてしまったようだ。深海棲艦の大群？に。艦種はより

どりみどり。まさにイロハニホヘト、チリヌルヲ、ワカヨタって感じ。そして何より、

「でつか・・・。」

戦艦鬼、略して戦鬼とでも言えそうな深海棲艦がいた。

@@@@@@

「提督!!大変だ!!」

「どうした、天龍？早いな。何があつた？」

「ヤツらの大艦隊が現れた!!今神武が応戦してる!!早く増援を!!」

「何だ?!?・・・天龍は空母勢を集めろ!!龍田は戦艦、矢矧・北上は巡洋艦、大井は駆逐艦と潜水艦だ!!出撃準備をさせろよ!!」

「[[[了解!!]]]」

「耐えてくれよ、神武……。後すこしでこの娘も目覚めるんだ……。」

@@@@

「お前が最近現れたやたら強い戦」

ドゴオオオオオオオオンツツツツ!!!!

「ぐっ・・・!!」

主砲を向け撃つ、その時戦鬼も反応し、自身の主砲を撃ってきた。

・・・これは!?

「あなた(テメエ)も56cm(22inch)なの(だな)?」

ちっ、やつかいなやつが現れたなあ。私と同等の性能を持っていると考えると考えてもいいかも。いや、私のほうが上だ。戦鬼は小破だが、私ははかすり傷だ。

「何言つてやがる。テメエのそれは小破っていうんだよ!!俺のみたいなのかすり傷つて言うんだ!!」

「自身の損害もわからないとかバカなの？」

「バカはテメエだ、このバカ!! おいお前等! 困んでヤンぞ!!」

多数の深海棲艦が襲いかかってくる。

「テメエも仲間にしてやるよ!!」

「断らせてもらうね。」

@@@@@

気づけば敵は大分減っていた。だけど私自身もかなり疲弊している。副砲は弾切れ、主砲は残り3発。それに装甲も傷がたくさんついているし歪みが生じ初めている。いくら56cm砲弾や61cm酸素魚雷を弾けるからといって無敵ではないのだ。魚雷なら一回目で傷が付き、二、三回目で歪み、四回目にはかなりぼろぼろ。五回目には穴が開いてしまう。もつとも一層分のことであって私の装甲は三層式なのだけれど。爆弾に關しても同じ。既に感知できる範囲だと両舷併せて魚雷150発以上、大型爆弾50発以上を受けている。爆弾により対空火器もいくらか損傷している。あと少しダメージを受ければ、中破判定がでるだろう。それにまだ・・・戦鬼が残っている。こちらの主砲弾をかなり受けているからか、中破状態のようだが。それにしてもこんな危機的状況にいるのに

たのしくてたまらない。

「ねえ、私の名前は神武。あなたは？」

「名前なんかねえ。」

「戦艦棲鬼じゃないの？」

「あんなカスと比べんじゃねえ！」

「ふふ、ごめんなさい。じゃああなたに名前をあげる。……今からあなたは戦艦ド級だよ。」

「ド級ねえ……。まあ名前なんてどうでもいい。そうだろう、ジئمム？」

「そっか、そうだよね、あははははははははは!!」

「そうだぜ？ふははははははははは!!」

「さあ、殺し愛を始めようか!!」

どうやらド級も弾切れらしく殴りかかってきたので応戦する。主砲はまだ使わない。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラア!!」

「アタタタタタタタタタタタタタタタア!!」

@@@@@@

「……あんなに楽しそうな神武は初めてみたのネー。」

「……戦闘狂?」

「神武さんはまともな人だと思ってたのに……。」

「え!?!」

@@@@@@

私もド級も互いが互いの攻撃を避けるため、まったく勝負がつかない。だけど、

「こんなに!楽しいのは!初めてだよ!!」

「そうか!俺もだ!!」

「あっはっはっはっはへぶっ!?!」

ドゴオオオオオオオオオツツ!!

私とド級、二人同時に横から飛んできた砲弾にダメージを受ける。

「誰だア!!」

砲弾の飛んできた方向をみると。

。。。。。。。。。

「……崇神?」

「・・・神武。やつと会えた。」

我が愛しの妹、崇神がいた。

「何だア？ テメエの妹か？」

「そうだよ。」

「・・・あなたは何？ 神武はあげない。」

「・・・チツ。興が醒めた。また殺りあおうぜ、ジンム。」

「うん。またいつか。」

そうして私たちは再会の約束をし、別れ

「させると思うのですか？」

「やすやすと帰す訳がないでしょう。」

赤城さんと加賀さんが弓を構えている。蒼龍に飛龍、鳳翔、祥鳳、飛鷹、準鷹は艦載機を今にも出しそうだし、金剛四姉妹、扶桑姉妹、伊勢姉妹も主砲を構えている。巡洋艦、駆逐艦の娘達も魚雷を発射しそうだ。だけど・・・

「おいおい、おまえらバカだろ？ 実力差つてもんがわかんないのか？ この場で俺に傷をつけられるのはジンムとそこの妹ちゃんぐらいしかいないぜ？」

ぞくり

背筋が凍る。そんな顔を皆がしていた。感覚的なものなのでスペックなどに載ることはないが、艦娘には威圧感がある。どれだけ可愛らしい少女の姿をしていようと本質は軍艦なのだ。そして相手からの威圧に飲み込まれるということが指し示すことはただ一つ。

相手との間に圧倒的なまでの戦闘力の差がある。

あのド級が放つ威圧は、解体されるまで世界最強の艦艇として君臨し続けた私と崇神と同じ強さだ。皆には悪いが、きつとこう感じたのだろう。

こいつには勝てない、殺される、と。

皆が固まってる間にド級は悠々と帰っていった。ド級が見えなくなると同時に皆の緊張が解けた。

「・・・神武を迎えに来た。帰ろう？」

「うんっ！」

また巡り逢うその時にはまた殺し愛を・・・。

ド級のことを考える度に高鳴る胸を抑えながら泊地に帰った。

@ @ @ @ @ @ @ @

「そういえば何で私まで撃たれたの？」

「・・・楽しそうだったのがイラツときた。」

@ @ @ @ @ @ @ @

「提督、どうしたノ？」

「いや、ね。やっと神武の世界に入れる者が現れたと思つたら、深海棲艦だというね：運命とは皮肉なものだ。提督としては神武と互角に渡りあえる、そんな危険な存在は放っておけないが、一人の人間として、神武の父親のような存在としてはこのド級が現れてくれて嬉しい。願わくば、神武の世界を広げてくれればいいのだが。」

「そんなことできるのかしら？」

「このド級なら大丈夫だろう。神武の人見知りは恐怖から来ている。強すぎるが故に自分だけ傷つかずに皆が傷ついたりするのをみている。失うのを恐れているから自分と同じくらい強くないと心の中には入れない。その点、ド級は合格している。何より、君たちが目撃した、「今までにない笑顔」が一番の証拠だ。」

「司令官さん、中二病入ってて格好付けてるとこ悪いのですが、お電話なのです。」

アイドルから休日

ウオーシップ娘。とは・・・13人の艦娘からなるアイドルユニット。バトルシップのペア：神武・崇神、キャリアーのペア：赤城・加賀、ヘヴィークルーザーのペア：高雄・愛宕、ライトクルーザーのトリオ：川内・神通・那珂、デストロイヤーのカルテット：暁・響・雷・電が構成員。代表曲は「艦隊レヴオリュージョン・八八」。特徴としては各種の仲間同士が同じ動きをすることでところにより、見事なまでの動きのシンクロが魅力のひとつといわれている。また、曲がボーカルに合わせて作られるため、ボーカルの気持ちはうまくなっている。各種の代表曲は、以下のとおり。

バトルシップ

：「艦隊レヴオリュージョン・八八」

キャリアー

：「ゼロ・ファイターズ」

ヘヴィークルーザー：「紅蓮の砲弾」

ライトクルーザー：「Scarlet Nights」

デストロイヤー：「Oxygen Torpedo」

@@@@

タウイタウイ泊地

崇神もきてしばらくのこと。二人してジローから呼び出しがかかった。

「何だろうね？」

「・・・さあ？」

ジローの部屋に入ると赤城さんに加賀さん、カカオにばんぱか、夜戦バカ・神通ちやん・アイドル（笑）、第六ロリが来ていた。

「君たちで最後だね。では・・・」

この泊地の残存資材について話し合おうか。」

「[[「うぐっ!!??」]]」

私と崇神と赤城さんと加賀さん。私達四人が泊地に与えている影響について話し合うことになった。

@@@@@

「・・・ということ、これ以上食べる量を減らすとまともに運用できない。そうだな？」

「はい・・・。」

「・・・そうです。」

「なんとというか・・・。」

「すみません。」

「なら、君たちには働いてもらおう。歌を歌って踊るのだ!!」

「「「はっ!」」」

「その高雄、愛宕、川内、神通、那珂、暁、響、雷、電とユニットを組むのだ!!」

このときはまさか泊地の収入の一割を占めるまでになるとは誰も思っていなかったのです。

#####

休日・・・その組織体において、その日は全員が業務を休むように前もって定めた日。

「1出勤」(新明解国語辞典より)

ブラック鎮守府・・・艦これのシステムを最大限利用した、轟沈さえ厭わない効率最優先のレベリング・運用を艦娘たちに強いる容赦のないプレイングの事。略してブラチンと呼ぶことの方が多い。疲労も大破も顧みず艦娘を出撃させ続けるプレイスタイルを、社員を限界まで酷使して使い捨てる「ブラック企業」に準えて揶揄した用語。最初期には旗艦が沈まない仕様を利用して負けを承知で単艦進軍を繰り返すレベリングがそれであったが、勝率がイベント参加条件になると、疲労状態でも勝利しやすい3――

2—1などでの連続出撃なども含むようになった。その後旗艦が大破すると強制的に撤退させられるように仕様が変更され、元々の意味でのブラチンは封じられたが、同時に追加された随伴艦が旗艦をかばう行動を利用した「捨て艦戦法」など新たなブラツク戦術も生まれつつある。疲労状態での出撃は現在も制限されていないため3—2—1での高速レベリングが現在のブラチンの主流とみられる。また他にも五十鈴牧場などネガティブなイメージのプレイングに対しても用いられる。——実は、限られた人員でろくに休みもなく働いている運営鎮守府こそが真のブラチンだという説も。(艦隊これくしょん　艦これ　攻略&2chまとめwikiより)

@ @ @ @ @ @

タウイタウイ泊地はホワイト泊地である。たとえばその艦娘が主戦力であろうと週休二日はあるし、その他艦娘の中には週一回しか出撃しない艦娘もいる。私こと神武は大體週三で出撃している。提督的には毎日でも出撃してほしいけど資材が・・・という感じらしい。で、今日私は休日。同じく休日の金剛さんを誘ってお菓子を作っている。

「神武は本当におはぎが大好きね。何かあるの?」

「私が戦艦になる前は人間だったって話はしましたよね?」

「ええ、聞いたわ。」

「人間だった時によくおじいちゃんに作ってもらったのがおはぎなんです。」

「おじいちゃんに？おばあちゃんじゃなくて？」

「はい。おはぎだけはおじいちゃんのほうが上手だったので。おじいちゃんのおはぎが大好きだったんですけど、戦艦になったから食べられないじゃないですか。そのことを提督に話すとおはぎを作ってくれたんですけど、それがまたおじいちゃんの味にそっくりで。もちろんおいしいからっていうのもありますけど、おじいちゃんや提督がいつも心にいるような感じがするのが好きなんです。」

「そうだったんだ。」

「金剛さんは何でそんなに紅茶がすきなんですか？」

「私も大体同じ理由よ。私の設計者がよく淹れてくれたの。いまだにあのおいしさには追いつけないけどね。ただ、神武ほどすきなわけではないわ。今だって、煎茶を飲んでるし。」

.....ふう。

「こんなのにのんびりしていいんですかね？」

「私達がのんびりできるということは平和なことだからいいの。ただ他の提督のところでは、わざわざ深海棲艦を探してまで攻撃させるところもあるらしいわ。しかも休憩な

しで。」

「うわ、酷い。」

「むしろうちの提督はホワイト提督なんて呼ばれているわ。ここに生まれてよかったわね、私達にとつても、軍にとつても。」

「軍にとつても?」

「ええ。あなた・・・いえ、あなた達が暴れたりしたら、止められる娘はいないでしょ?」
「ふふ、そうですね。」

こうして休日はゆったりと時が流れていく・・・。

キューバから迎撃

1959年カストロらはバティスタ政権を革命によって倒し、1961年に社会主義宣言を行った。そしてアメリカの干渉を防ぐために共産諸国との連携を重視。ソ連製ミサイルの導入をはかった。1962年、ソ連のミサイル基地建設を確認したアメリカは同年10月22日、キューバを海上封鎖して対抗。これに対しソ連は同月28日、ミサイルを発射。迎撃されたものの、第三次世界大戦の発端となった。なおこの事件は「キューバ事件」と後に呼ばれるようになり、冷たい戦争が熱い戦争へと換わった切っ掛けとして広く認知されている。

#####

1962年10月28日・呉

「今回の改装は長いねえー。そんなに危ない状況なの?」

「ああ、下手すると第三次世界大戦が起きかねないほどだよ。」

「そこまでなの?」

「うん、今キューバで米ソがにらみ合っている。もはや武力衝突は避けられないほどに、

だ。もし米ソが開戦すればヨーロッパは米側とソ連側で二分されることになるだろう。中国もソ連側で参戦するだろうな。そうなれば文字通り世界を巻き込んだの大戦となるだろう。」

〈始まるまでに私の改装が終わってればいいんだけどね。〉

おっさんの秘書さんが入ってくる。というかおっさんはわざわざ秘書まで連れてここに何しに来たんだろう？

「司令長官、首相官邸よりお電話が入っております。」

「わかった、すぐに行こう。ではな、神武。」

へうん、またねー。

・・・そういえば新しい武器が導入されるって言ってたなあー。なんだろう？

@@@@@

1962年11月1日米ソ開戦。それにもない主に米側には、英吉利、仏蘭西、西班牙、葡萄牙が、ソ連側には中華人民共和国が参戦。当初、大日本帝国及び大東亜共栄圏諸国は中立を宣言。領空、領海に無断侵入するものは如何なる国籍のものであろうと迎撃・応戦するが、積極的自衛には出ない。その旨を発表するが・・・。

@@@@@@

1963年4月・呉

〈へっへーん!!もおつともつとかっこよくなったよ!!〉

私の改装がやつと終了した。まあ、かっこよくなった・・といつてもあまり変わつてはいないけどね。なんでも電磁波砲っていうのが導入されたらしくて、副砲があつたことに金属のレールみたいなのがついた。何でも発射速度が56cmと全然違うらしい。

「改装が終わったばかりで悪いが、神武には佐渡島に行つてもらふことになった。」

〈佐渡島?〉

「ああ。第三次世界大戦が始まっただろう? 帝国は中立を保つつもりだけど、いつ攻撃されるかわからないからね。ただアメリカから攻撃される可能性は少ないとみて佐渡島に移動することになった。」

〈ふーん。でもソ連相手ならなんで函館とかじゃないの?〉

「ああ、それはね、主に二つ理由があるんだけど、まず一つ目は中国が来る可能性を考えてだ。まあこれに関しては崇神を長崎に置いているがね。二つ目が一番大切な理由なんだが、ウラジオストクから東京をつなぐ直線の近くにあり、かつ住民がほとんどいな

いからだ。」

〈あー、迎撃のため、か〉

「うん、そうだ。帝国が米側で参戦すればソ連は戦線を東にも広げることになる。それを避けるために今のうちに帝国を潰そうとするかもしれない。核噴進弾を使つてでも、ね。そこで政府と軍で御前会議を開いた結果、ウラジオストクから東京を狙う可能性が高いと判断したんだ。」

〈・・・私に大日本帝国の未来と国民の命がかかつてる？〉

「そうだね。」

〈・・・おうふ。そんなことにならなきやいいけど。〉

艦対空噴進弾（追尾式）が積まれたのつてこういうことだったのか・・・。

@@@@@

1963年9月8日・日本海

「司令長官!! 島風より入電です!! 『我、噴進弾の発射ヲ確認セリ 又ソ連ノ大艦隊ヲ発見

ス』

「なにつ!? 『桜花』発射準備は?」

「できています!!」

「噴進弾、補足しました!!」

「よし、目標、上空を通過する噴進弾、発射了!!」

対空追尾噴進弾『桜花』がとんでいく。

「3, 2, 1, 命中します!!」

「空を見るなあ!!」

ピカッ
!!!!!!

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオンツツツ
!!!!!!!!!!!!

まるで太陽が落ちたかのような、そんな眩い光の後に巨大な音と衝撃、最後に波がやってくる。

「迎撃は成功だ!!それでソ連艦隊は!？」

「赤城より入電!! 空母4、軽空母2、巡洋艦6、駆逐艦9、これはっ!? 大和型サイズの戦艦3隻とのことですよ!!」
へソ連も本気だねー。〜

砲雷撃戦から別れ

「政府及び佐渡島基地に打電!!『我 迎撃ニ成功セリ ナレドモソ連艦隊現ユ 我 コ
レト交戦突入ス』他艦の状況はどうなっている?」

「全艦、抜錨完了!!いつでもいけます。」

「佐渡島基地より入電!!・・・っ!!基地より対地噴進弾『這炎』を発射するそうです!!そ
の後に電磁波砲の試射をしてほしいとのことですよ!!」

〈ああー、電磁波か。〉

噴進弾は基本CPU制御だ。つまり電磁波の影響を受ける。こちらが撃った後に、電
磁波砲で相手を駄目にしようってわけだね。

@@@@

『這炎』は空母に向かって飛んで行ったけれど、割って入った戦艦に直撃。しかも航行
可能のようだ。

「全艦に打電!!『我 コレヨリ電磁波砲ヲ撃ツ 各自目測ニテ砲撃サレタシ』電磁波砲は
!？」

「一番塔、充電率98・・・99・・・100%!いつでも撃てます!!」

「二番塔、撃てます!!」

「三番塔、撃てます!!」

「敵対艦噴進弾、きます!!」

「衝撃に備えよ!!」

ドオオオオオオンツツツ!!!

へいったーい!!

「被害状況を報告せよ!!」

「左舷区画ホに直撃!!装甲が一層歪んだそうです!!」

「電磁波砲は!?!」

「二問題ありません!!」

「よし、撃てえ!!!」

シュンツ!!

ダアアアアアアンツ
!!!!

空母に直撃。どうやら誘爆したらしく炎上している。となりの戦艦も発射しようとした対艦噴進弾が誤作動。噴進砲がやられたみたいだ。

@@@@@@

私が電磁波をばかすか撃つせいで、両艦隊ともに電子機器類が使用不可能な状況だった。おっさんは

「こうなったら帝国のほうが強い。」

そんなことを言っていたが、ソ連も強かった。

「暁・雷・電が轟沈、大鳳が中破、響が小破か・・・!!」

かなりの損害がでた。乗組員は各艦で救助。響はソ連兵も救助したらしく、後に聞いた話だと、救助を求めるボートが何故かソ連船ではなくこちらに向かってきたらしい。そのボートを沈めようとしたソ連の駆逐艦から庇って小破になったらしい。

@@@@@@

ソ連のミサイル発射、艦隊の侵攻を受けて大日本帝国は米側として参戦。大東亜共栄圏は参戦しなかったが、大日本帝国への全面的な支援を約束した。開戦初期、劣勢で

あつた資本主義国諸国は大日本帝国の参戦を受けて、「暗雲立ち込める空に一条の光が差した瞬間であつた。」とコメントしている。

大日本帝国の参戦を聞き、台湾に逃げていた国民政府は帝国に支援を要請し、帝国はこれを受諾。再び中国大陸で共産党と国民党の戦いが再燃し、中華人民共和国は大戦から脱落。第二次中華民国ができることになる。

@@@@

1964年3月2日・日本海

〈お久しぶりネ、ジンム。〉

〈あ、エンタープライズさん。イリノイは？〉

〈彼女は・・・退役して、今は商船をやつてるワ。〉

大日本帝国は米艦隊と協力し、ウラジオストクを襲撃、制圧することになった。また、陸軍・空軍は同時進行でペトロロバロフスクに侵攻してみたい。今回は米艦隊主体なので、崇神や大和型は待機。駆逐艦や巡洋艦がいつしよだ。

〈さあて、働きますかね。〉

戦線を広げすぎた上に、技術力の差などで負け続け、最後は革命によってソヴィエト社会主義共和国連邦は崩壊。ロシア連邦となる。ソ連の崩壊をもって第三次世界大戦は終結した。

@@@@

「……響……。行くの？」

「ああ、そうだ。大丈夫、心配することはない。ヨーゼフはいい男だ。」

「……虐められてるって聞いたら皆殺しにするから。」

「ははっ、怖いな。崇神、後は任せた。神武もな。」

響が助けたソ連兵達は革命をおこした。そのときのソ連兵は帝国政府に交渉し、響を買い取りたいと申し出た。第六駆逐隊が響一隻となっていたのもあり、帝国は売ることを決めた。ロシア籍での名前はВерный、日本語で信頼、という意味の艦艇になるらしい。今後、Верныйの保存会のようなものができ響に助けられたソ連兵とその家族が永久保存するのだとか。そして日露の友好の証、ロシア革命の象徴となるらし

い。

〈では、いつてくる。私の最後の名はВ е р н ы йだ。 Д о с в и д а н и я 〉

〈・・・響い。〉

〈さようなら。〉

ああ、つらい。泣けないことが、別れを惜しめないことがこんなにもつらいことだつたなんて。

神武についてから裏設定3+Q&A

1962～1963年の改装

排水量189065t

動力源原子炉

全長425m

最大幅62m

巡航速度35kn

最大速度62kn

主砲50口径56cm三連装砲4基12門

副砲41cm電磁波砲6門

12.7cm連装高角砲18基36門

25mm三連装机銃152基456門

一九式艦対地噴進弾〈曼珠沙華〉専用噴進砲4門

二二式艦対空噴進弾〈桜花〉専用噴進砲4門

ヘリコプタ用甲板

戦闘ヘリコプタ〈天雷〉8機

1959年の中ソ防衛協定、1960年のU2型機事件、1961年のベルリンの壁構築など、激化していく冷戦。それを受けて、さらなる改造を施されたのが神武改二である。二一式艦対空噴進弾〈桜花〉は主に迎撃用であり、ウラジオストクヤペトロハバロフスクなどから発射されたミサイルを迎撃するのに使われた。爆発の様子を桜の花に喩えて桜花という名前がついたが、実際迎撃する際には核ミサイルの威力が凄まじく、その様子はわからなかったという。

35.6cm連装砲の代わりには電磁波砲が搭載された。莫大な電力を要求されるが、そこは原子炉をもつ神武型、問題ない。電磁波障害に対する懸念などがあったが、ソフトフェライトを吸収体として遮蔽壁に使用するなど様々な工夫で艦員への安全を確保した。威力としては火薬式とは比べ物にならないほどに高く、「むしろこちらが主砲ではないか」という意見もあった。しかし、今回の搭載は実験的意味合いが強く、信頼性が少し足りないため56cm砲は載せられたままである。副次効果として、対電磁波障壁のない艦のCPUが誤作動を起こしたり、ミサイルが誤爆したりなどといったことがおきた。電子戦機に対し極めて有効。

艦これステータス

無強化・非武装

- ・耐久 800
- ・火力 220
- ・装甲 200
- ・雷装 0
- ・回避 80
- ・対空 125
- ・搭載 8
- ・対潜 0
- ・速力 高速
- ・索敵 90
- ・射程 超長
- ・運 50

改装で変わった艦娘神武。

- ・副砲があつた辺りに金属製のレールができた。
- ・肩の口ケツトランチャーてきなものが増えた。

以下裏設定

いわゆる「雪解け」はどうなったの？

・両陣営の首脳が違ったためずっと緊張しっぱなしでした。

中国人民党はどうなったの？

・満州のあたりに逃げ込みました。内乱は終わってますが、テロが頻発しています。

なぜ大日本帝国は中立の立場をとったの？

・政治形態が資本主義と社会主義のハイブリット型だったため。

いつまで過去編やるつもり？

・これで終わった・・・はず。ネタがなくなったらまたやるかも。

巡航速度速過ぎない？

・神武型以降の艦船はみんなこんなもの、ということ。

なぜソ連が大和型サイズの戦艦を持っていたの？

・第二次世界大戦頃にできたのを改装しました。

加賀さんの優雅な午前。

午前五時

私、一航戦・加賀の朝は隣で寝ている赤城さんを起こすところから始まります。

「赤城さん、朝ですよ？ほら起きてください？」

「ん．．．、えへへー．．．ボーキおかわりー．．．ぐう。」

カシャカシャカシャ!!!

@ @ @ @ @ @ @ @

午前六時

心を鬼にして赤城さんを起こした後、赤城さんを連れて食堂へ。

『すみませーん、この鋼鉄ステーキ三十人前にボーキのおひたし三人前、重油スープ六十人前と弾丸のきんぴら八十人前くださいーい。』

『・・・神武、私も同じのを。』

『あ、ごめん。・・・すみませーん、さっきの2セットくださーい。』

『ひえーひえー!?』

やたら量のおかしい注文と妖精の悲鳴が聞こえたが気にしない。テーブル席に座ってメニューを見て注文を決める。

「赤城さん、決まりました?」

「そうねえ、これとこれと・・・これにこれ、かしら。」

赤城さんが決まったので呼び鈴を鳴らし妖精を呼ぶ。

「うげっ!?!・・・注文はお決まりですか?」

「はい、重油と弾丸のリゾット十人前に、ボーキの素揚げ四十人前、ボーキのおひたし三十人前、それから烈風の姿揚げを十人前。これを2セット。」

「・・・。・・・しばらくお待ちください。・・・はあ。」

客の前でため息をつくなんて躰のなっていない妖精ね。

「加賀、私これも食べてみたくなったわ。」

「追加注文でこの彗星の唐揚げを六人前ください。」

「もう勘弁してー!!」

・・・・うるさい妖精ね。

@@@@@@

午前七時四十五分

赤城さんが朝風呂に入りに行ったので私はとある準備をする。

「あの一? 加賀さん? 何やってるんですか?」

「見てわからない? 偵察機の準備よ。」

「浴場の前で!」

「赤城さんが入っているのよ。」

「・・・ああ。赤城さん、ご愁傷様です。」

声をかけてきたのは二航戦の二人。相も変わらず洞察力が低いようだ。同じ航空母艦として少し不安になる。

「そんなに赤城さんが好きなら一緒に入れればいいじゃないですか。」

まったく・・・これだから二航戦は。

「いい？二人でいるときには見せてくれない顔も私はほしい。一人のときにしか見れない表情、それを一番よく見れるのは緊張が解けるお風呂のときなのよ・・・っ!!!」

「・・・加賀さん・・・。」

「ねえ、多聞丸？私どうすればいいのかな・・・？」

@ @ @ @ @ @ @ @

午前八時半

風呂上りの赤城さんは提督と散歩中。

「ふふ、ふふふ。私の好きな女と好きな男がいつしよに・・・ふふふふふふ・・・。」

「うわあ・・・ないわあ・・・。」

二航戦ズがうるさい。

@ @ @ @ @ @ @ @

午前十一時半

食堂へと向かう赤城さんにさりげなく近づくと。

「あら？加賀・・・と蒼龍に飛龍？珍しいわね。私も一緒にご飯いかしら？」
「ええ、ぜひ。」

チツ!!まだ、ついてきていたのか。

「な、なはは・・・」

『この弾丸の重油あんかけをお願いするのです!!』

『では私は重油のボルシチを。』

『私は鋼鉄の蒸し焼き弾丸添えに重油汁ね。』

『はーい、何人前ですかー?』

『『『・・・?一人前(なのです)(だ)(よ)』』』

『あ・・・そ、そうですよね。』

@@@@

午後二時二十分

「・・・加賀さん、赤城さんはいったい何を作ろうとしているんですか?」

「あれは・・・茹でて裏ごしした弾丸に、蒸した鋼鉄?」

「・・・?これはっ!?艦載機!!いきなさい!!」

「ちよっ!?!加賀さん!?!」

私の予想が正しければ赤城さんはまたあそこに行くつもりだわ・・・!!

パルパル大井つちの北上さん。

午前六時

私の朝は北上さんの美声と獣の鳴き声で始まります。

「大井つちー？朝だよー？」

「クマー!!」

「・・・ニャー。」

「キ、キソー!!」

まったくうるさい獣だわ。そのまま寝たふりをしてしていると北上さんが耳元にささやいてきます。

「早く起きないといたずらしちゃうよ?」

「喜んで!!」

「おきたね。じゃあご飯食べに行こうか。」

「・・・え?」

「クマー。」

「・・・ニャー。」

「キ、キソー。」

.....あーうるさい。

@@@@@@

午前六時半

食堂につくと既に人がたくさんいました。中でも目立つのは二つの席。

「たぶん山が大きいのが神武つちのところであ、小さい・・・?のが赤城さんとこだね。」

なんと皿の山で誰が食べているのかわからないです!!でも北上さんは優雅にその聡明な頭脳を以って、寛大にも愚かな私に教えてくれました!!

「クマはこの弾丸の甘露煮にするクマ。」

「タマは煮干重油ラーメンニヤア。」

「俺はおりこうさん魚雷の活け造りにするキソー。」

.....あの三匹黙らないかなー。

@@@@@@

午後一時

今日の出撃は私と北上さん、神武さんと崇神さんでした。先ほど帰還したので今からですが昼食をとります。

「わたしは・・・うーん、メニューのここからここまで三十人前ください。」

「・・・同じのを。」

「相変わらずよく食べるねー。じゃあ、あたしはこの重油イン鋼鉄ハンバーグで。」

「わ、私も同じなので。」

「はーい・・・わかったです・・・。」

妖精の目が死んでる気がするのは気のせいでしょう。

@@@@

食べ始めるのが遅かったからか、食堂には人があまりいません。神武さんと崇神さんは隣の机に食べた皿を積み重ねていきます。神武さんが今食べているのは、鋼鉄プリン重油ソースがけです。

「神武っち、それおいしいの?」

「ん? 食べる? あーん。」

パクリ。

・・・ええ?

「おいしいね、これ。私のも食べる? 神武っちこれ頼んでなかったよね? あーん。」
パクリ。

・・・ええ?

「・・・それはああして・・・」

@@@@

午後二時半

私と崇神さんは神武さんの部屋の前までやってきました。

『北上さん、私もう我慢できないよ・・・。』

ゴトツ、ドサリ。

艀装が置かれる音に

シユルシユルツ、ハラツ。

衣が落ちる音。

『神武っちつたらもうこんな固くしちやつて。』

『だ、だって・・・い、痛っ!!』

『痛かった? もう少し優しく揉んであげようか。』

『んあ、あ、ん、ああ、あ、あ、ひゃんっ!?!』

『大分火照ってきたね。それにしてもまあ、こんなに濡らしちやつて。』

『だって北上さんのが気持ちよすひゃわっ!?!』

トントントツ

『ふっふっふ、まだまだいくよー!!』

「え?これ中で何犯ってるの!?!」

「まさかあの三人がそんな・・・。」

はあ・・・まったく。

バタンツ!!

「赤城さんっ!!あんまなら私がやると言ったでしょう!?!」

「「あんま・・・?」」

部屋の中で行われてたのは北上によるあんま。大型艦船になるほど艤装は大きくなります。たとえば私や赤城さんなどの航空母艦は艦載機を積んでいます。零式艦上戦闘機・・・零戦は約2.7t。一機一機は軽いですがそれが100機近くになるとかなりの重量になります。艦爆や艦攻は爆弾や魚雷を積むのでさらに重くなります。神武さんにいたっては、主砲塔一基だけでおよそ5000tあります。これだけの重量を支えていると艦の構造に歪みが生じます。今でこそ、艦娘となりヒトの身体を得たことで緩和されていますが、始終重い艤装をつけていることには変わりはないので、大型艦船

の艦娘は一ヶ月に一度必ず整体士に診てもらおうことを義務付けられています。しかし一ヶ月でも我慢できない者はこうして仲間内であんましあうのです。

「わ、私は最初からあんまだと」

「顔真つ赤だったくせにー」

「そういう飛龍だつて真つ赤じゃないの!?!」

「こ、これは、そう!!イ級をまるかじりしただけ!!」

「私も北上さんにあんましてほしい……」

「……神武を揉みしだきたい………特定部位を。」

何を勘違いしていたのか知りませんが大井と崇神のドス黒いオーラは消えました。ですが……

「赤城さん、あんまは私に任せてくださいと言ったでしょう?」

「だって北上さんのほうが上手だし……それに加賀のは触り方がいやらしいわ。」

……え?……あ……あ、え?……

「ああー、崇神もやらしいんだよねー。赤城さん、おはぎ貰うね?」

「はい、どうぞ。北上さんも疲れたでしょう？どうぞ召し上がれ。」
「ありがたく頂くねー。」

@ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @

「いやらしい……いやらしい……いやらしい……いやらしい……」
「加賀さん……」

@ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @

おまけ：その頃の山城。

『どうだ？扶桑？』

『少し……痛いけど……気持ちいいです……。もっと早くても大丈夫です……。』

『そうか。』

「提督殺す提督殺す提督殺す……。ああ、でも無理矢理される姉さまもなかなか……いや、やっぱりなしだわ。提督絶対殺す。」

「HEY、山城。殺すのはNOですよ。憲兵を呼びなサーイ!!」

広島から呉

拝啓 神武様

本日はお日柄もよく、なのです!! . . . めんどくせえな。何だヲ級? ちゃんと書け? 知るか. . . さて、恐らくお前も知ってると思うが今度呉でイベントがあるだろ? いくから来い。案内しろ。@月#

日朝十時に海田市駅な。

敬具

「.」

朝起きたら隣に神武がいなかった。探してみたけれど泊地にはおらず。手掛かりがないかと部屋の中を漁ると、ド級からのものらしき手紙が。イベント. . . 案内. . . 駅で待ち合わせ. . . .

「. あはっ☆」

神武に近づく悪い虫は潰さなきや・・・。

@ @ @ @ @ @ @ @

広島：七時

ド級からの手紙を受け取った私はタウイタウイ泊地から広島までやってきた。ジローに、呉に三日ほど行く旨を伝えたら快く許可を出してくれた。

・・・脅迫？何のことやら。私のさらしを嗅いでたことを知ってるなんて伝えてないよ。

丁度よく、輸送船が来ていたので乗せてもらった。自分で航行しろ？単艦で航行とか無謀すぎるよ。改になってないし、燃料の心配があるんだから。道中で深海棲艦が現れたけど、大きくてもり級やヌ級だったので時間をかけずに撃破できた。

そんなこんなで広島についた。JRで広島海田市間はかなり短い。およそ十分？ほどかな。

「うーん、九時四十六分糸崎行き・・・いや、一応三十九分の広行きにしとこ。」

今いるのは草津港。新井口から路面電車に乗って・・・西広島からは歩こうかな。

@@@@@@

広電西広島駅で降車する。電車賃は今までの出撃分が貯まつてるから問題ない。え？食費？食堂は無料ですよ。新己斐橋を渡り、平和大通りをゆったり歩く。・・・なんか見られてるような気がする。艤装はかばんにしまったから問題ないはず。

まだ朝だけど、車はかなり走っている。丁度通勤時間なのかな？

西観音で路面電車が曲がる。道がわからなくなると路面電車の道を通れば広島駅に行くことはできるけど、道のりは遠くなる。今日はこのまま平和大通りを進み、平和公園で magari 本通りに入る。・・・この世界は一度目とも二度目とも違う世界だ。二度目の世界では平和公園なんてなかったし、一度目では艦娘や深海棲艦なんていなかった。ほんとに違う存在になったなあと思う。人間だったときの三倍は戦艦として生きたので、もはや戦艦としての意識のほうが圧倒的に強い。その戦艦としての意識は、いや本能は、中国を、韓国にロシア、そして・・・アメリカ力を叩きのめせと叫んでいる。人間としての意識がなければ、私は暴走してたかもね。

パルコの前でまがり相生通りに出る。しばらく歩き陸橋を渡って左側へ。また歩いていると路地に私とコンビになってくれるコンビニを見つけたので、よつてみる。

「いらつしやいませー。」

適当におにぎりなどを見繕う。

「スパイスチキンください。」

「ありがとうございます。」

「ありがとうございます。」

多少行儀が悪いけど歩きながら食べる。

歩き続けると広島駅が見えてくる。．．．九時かあ。ホームで待と。広行きは大体三番か七番に止まるので三番で待つ。

@ @ @ @ @ @ @ @

十時少し前に海田市についた。さて、ド級は．．．

「はあ？ ジュートーホー？ 何だそれ？」

「いいから署に同行してもらおう。」

「待ち合わせしてんだよ!! 離せっ！」

「……………はあ。ド級が警察官に声をかけられていた。うん、まあ怪しいよね。しょうがないなあ。」

「あのーすいません、その娘私の待ち人なんですけど……………」

「お前も仲間か!? 二人とも事情聴取だ!!」

@@@@

「なんであんなことになってたのさ……………」

「艦載機を飛ばそうとしたらジュートーホー違反だーとか言われたんだよー！」

あの警察官にはタウイタウイ泊地所属艦娘証を見せてお引取り願った。

「で、イベントって何？ 手紙にあったけど、私何にも知らないよ？ 案内だって呉は詳しくないし。」

「知らないのか？ これ。」

そう言ったド級に渡されたチラシ。そこには

『ドキツ☆艦娘と深海棲艦の大運動会!!ポロリ（物理）もあるよ!』
とあった。

「これ飛び入り参加ができるんだぜ？条件が艦娘と深海棲艦が組んでいるペアであることだからすぐに参加できるはずだ!・・・そーいやお前、艦装はどうした?」

「ん?かばんに入ってるよ。それで一緒に組んで参加しようって?」

「そういうことだ。」

かるが浜から選手紹介

「とりあえずイベントの具体的な場所はどこなの？」

「かるが浜」と書いてあるぜ。えっと……なにに？ 提督のポケットマネーは艦娘による器物破損の修理代や食費に消えているため、ここかるが浜になりました。ほぼ貸し切り状態となってますが万が一のことがあるので無闇やたらに発砲しないで下さい。……だつてさ。」

「呉鎮の提督は苦勞してるんだね……言葉の端から哀愁感が漂ってくるよ……。」

@ @ @ @ @ @

海田市駅からかるが浜駅はそんなにかからない。ただ単線だから時々駅で止まるけど。呉線は海沿いを走っていることもあつて海がよく見える。特に晴れた日の昼が一番綺麗だと思つてる。キラキラと太陽の光を反射して輝く青い海。ああ、どの世界でも海だけには変わらないんだね……。朝鮮戦争、日韓戦争、第三次世界大戦。敵艦をたくさん沈めたし味方もたくさん沈んでる。艦が沈むといふことは乗っている兵士も沈むといふこと。日本海は太平洋よりかなり小さいけれど、それでも容易に泳いで岸にたどり着く距離じゃない。ある者は溺れ、ある者は鱻に食われた。助けようとした瞬間鱻に

食われた者もいた。遠くでは火の手が上がり、硝煙が香り漂っていた。けれど、それでも海は残酷なまでに綺麗だった。硝煙が匂っていても潮の匂いは必ずしていた。負傷兵が落ちたり、鱧に襲われたりして一時的に赤く染まってもすぐに蒼く戻った。沈む艦から漏れる重油は広大な海を汚しきることはできなかった。

．．．ああ、最期は

海で迎えたかったのにな。

「おい、ジンム。ついたぞ。」

「よし、じゃあ降りようか。」

かるが浜は無人駅だから駅員はいない。ポツンと改札があるだけだ。改札を出て浜のほうへ向かうと、人．．．いや、艦娘と深海棲艦が集まっている。列ができてるところがあるけど、あそこが受付なのかな。並んでいる人に聞いてみる。って榛名じゃん。

「あの、すみません。ここ受付ですか？」

「あ、はい。そうですよ。私は呉鎮の榛名です。あなた．．．とそちらのかたは？」

「私はタウイタウイ泊地の神武だよ。」

「深海棲艦ド級だ。」

「タウイタウイって、あの日本が勝った世界からの転移組みですか？」

「そうだよ。」

「そう……ですか。呉は負けた組ですよ。」

榛名さん(呉)に聞いたところこのイベントは初めての試みなのとか。ヲ級やル級、タ級、それに鬼・姫系が喋れる……？ことから、資材を餌に会話を試みたところ友好的な個体との接触に成功。上層部に報告したところ、他の基地でも似たようなことが起きていたので今回のイベントの開催となったらしい。呉鎮負担で。

「うちの泊地はそんなことやってないなあ……」

「でもそちらのド級さんは深海棲艦ですよね？」

「そうだけ。」

「うん、ド級とは殺しあって仲良くなったんだよ。」

「え？殺しあい？」

「そうだな。ジئمムってよー、こつちが話してる最中に撃ってくるんだぜ？」

「ド級も即座に反応したじゃん!?!……こほん、実力が互角だからさ、こう、なんていうか、ライバル？」

「大丈夫なのかな・・・この二人。」

@@@@@

『えー、これより呉鎮守府主催、艦娘・深海棲艦親善競技会くポロリ（物理）もあるよくをはじめます!!司会は私、青葉!!そしてゲストには、』

『艦隊のアイドル、那珂ちゃんだよー!!皆よろしくう!!』

『ありがとうございます!では早速選手紹介・・・と言いたいところですが、呉鎮の提督さんからお電話を頂いております。提督く?』

『へあーもしもし、聞こえておるかね。私だ。今日は様々な基地からよくぞ集まった。自由によつてくれて構わないがくれぐれも怪我人は出さないように。以上だ。』

『ありがとうございます。相変わらず話が短いですねー。それでは選手紹介です!!まずは横須賀鎮守府からやつてきた金剛さんと装甲空母姫さんです!!』

『横須賀からやつてきた、金剛デース!!よろしくお願いシマース!!』

『・・・装甲空母、姫。ヨロシク。』

『エントリーNo2!呉鎮守府の榛名さんとル級elite!!』

『よろしくお願いしますね?』

「ル、ルルル、ルツルルル。」

『エントリーN03！舞鶴鎮守府の北上様とヲ級flagship!!』

「やっほー、よろしくね？」

「ヲツ。」

『エントリーN04！佐世保鎮守府の紀伊さんとタ級flagship!!』

「こんにちわ、よろしく。」

「はーい、タ級よ．．あ．．．タタタタ、タタ、タターツタ。」

『タ級さん喋れたんですねー。ル級さんとヲ級さんも喋れるんですか？』

「ル!？」

「そんなことな．．ヲツヲヲツツ。」

『後ほど喋ってもらいましょう。では最後！わざわざ遠いタウイタウイ泊地からやって

きた、神武さんとド級さんです!!ド級さんは新型の深海棲艦だそうです!』

「うーん、と。まあよろしく。」

「おう、ド級だ。」

『それでは競技会を始めましょう!!』

赤城さんの憂鬱。

『最初の種目は借り物・障害物競走・・・なのですが、準備に時間がかかっております！なので他基地にはいらつしやらない紀伊さんと神武さんにお話を伺ってみようと思えます！なお、賭博の申し込みは終わりました。ご了承ください。それでは・・・那珂ちゃーん？』

『はーい。那珂チャンダヨー。こちら紀伊さんのところへきています。』

『紀伊です。』

『何か自慢できることとありますか？』

『自慢・・・ですか？そうですねえ・・・大きいことかしら。排水量7万t級なんですよ？後は・・・主砲が51cm連装砲なの。装甲は大和より薄いわ。』

『おおつと!?こちら青葉です！抗議の電話が殺到しております!!申し込みは終わっておりますので変更はできません!!・・・では那珂ちゃん、次は神武さんのほうへ。』

『わかりましたー。紀伊さん、ありがとうございます！』

『えーと、神武さんお話しいいですか？』

『いいよー。』

『では遠慮なく。神武さんの自慢は?』

『自慢・・・かあ。うーん・・・』

『那珂ちやーん、もつと色々具体的に聞いてみてください。』

『はーい。ではでは。艦種は・・・戦艦?』

『そうだよ。まあ、戦艦は戦艦でも航空戦艦だけだね。』

『背中の突き出てるのがカタパルトと甲板ですか?』

『そうだよ。』

『では次の質問。んーと、大きさとか主砲とか耐久とか教えてもらえますか?』

『えーと、全長は425mで排水量は19万t級、主砲は56cm三連装砲で耐久は：

うーん・・・。とりあえず魚雷150発に大型爆弾50発、56cm砲弾十数発に各種

砲弾をいくらか貰ってやつと中破判定が出たよ。』

『・・・。すつ、すごいですね!でもそんなにごつかったら遅くなったりしないんで

すか?』

『最大速度は50knだよ。』

『こちら青葉!収まっていた電話が先ほど以上に鳴り響いております!!・・・おや?準備

のほうができたようですね。それでは選手の皆さん、並んでください。』

@@@@@@@

選手部屋に集められた私達は誘導されて浜辺に並ばされた。

『それでは最初の競技のルール説明です！皆さん、沖合い1kmほどに小岩が見えますね？・・・そう加賀さんがいるところです。艦娘の皆さんにはあそこを周って帰ってきてもらいます。道中に障害物があるので気をつけてくださいね？さて・・・深海棲艦の皆さんですが・・・そこにいる那珂ちゃんが持つている箱からクジを引いてください。』

「クジってなんだ？」

「運試し・・・みたいなもんかな。たぶん今回は何をするかをくじで決めるんだと思うんだけど・・・。」

『神武選手、鋭いですねー！クジにはこの場にいる誰かの持ち物が書いてあります。それを借りてきて小岩を周ってきた相方に装備させてください。装備が終わったら小岩のところへ向かって加賀さんのところにたどり着いたらゴールです!!準備はいいですかー?』

「いつでもいいネー!」「・・・可」

「大丈夫だよー。」「・・・ヲツ。」

「いけます。」「ルー。」

「いけるよ。」「俺もだ。」

「いけますよ。」「ター。」

『それでは那珂ちゃん！開始の合図を！』

『はい！それでは・・・3，2，1，どうぞ！』

ドォーン!!

那珂ちゃんの空砲を合図に皆いつせいに動き出す。真つ先に飛び出すのは北上さん、その後を金剛さん、榛名さん、紀伊さん、私と続く。・・・最初の障害物は・・・鋼の壁!?

『第一の障害は鋼鉄の壁!!高さは3m、横はレーン幅ぎりぎり、厚さは300mmです！皆さんどうするのでしょうか！』

周りを見ると皆速度をさらに上げていた。跳び越えるつもりだね？なら私は・・・!

ドゴオオオオオオオオオオオンッッッ!!!

『おーつと神武選手!!主砲で壁を破壊したあ!!』

残骸を通り抜けると金剛さんに並んだ。速度は上げない。今上げると小岩を大きく回るし、次の障害はアレだ。

『第二の障害は資材の壁!!各資材300ずつ積まれています!!すべて消費するまで通れ

ません!!今のところ1位の北上さんですが重雷装艦の彼女にはきついのではないでしようか!!那珂ちゃん、どう思いますか?』

『いやそれよりもボーキサイトは消費できないと思うんだけど。』

『ご安心ください!!各選手の後を追って有志の空母が追ってきています。彼女達が消費してくれませす!!』

もぐもぐ、もぐもぐ。もつきゆもつきゆ、もつきゆもつきゆ。

『金剛選手のところには赤城(横須賀)さんが、榛名選手のところには赤城(呉)さんが、北上選手のところには赤城(舞鶴)さんが、紀伊選手のところには赤城(佐世保)さんが、神武選手のところには赤城(大湊)さんが向かっています。おっと各々の赤城さん壁が乗り越えられません!!爆撃をしています、いつ壊れるのか・・・。壁を壊した神武選手のところの赤城(大湊)さんはもうすぐ神武選手にたどり着きます!!』

燃料・弾丸・鋼材をほとんど食べ終え、少しづつボーキを消費していると赤城さんがきた。

「おまかせください!一航戦の誇りにかけて全ボーキサイトを消費してみせます!!」

『なお今回消費された資材は各々の基地へと請求させていただきます。』

どこかで叫び声が聞こえたような気がする・・・。

@@@@

赤城（大湊）さんがボーキを食べ終えたので出ようとしたら、放送から待ったがかかった。

『選手に連絡です!!今回ボーキを消費した赤城さんが通行証代わりです!赤城さんがいないと加賀さんは通行許可を出してくれません!!』

『そういうわけでよろしくお願いしますね。・・・はあこの加賀もアレなのかしら・・・。』
「えーつと・・・ご愁傷様です。」

赤城さんを連れて走る・・・のだが、遅い。

「ごめんなさい赤城さん、抱えますね?」

「え?きやあ!」

赤城さんの背中と足の腕を回し抱え上げ、走る。

『おっとお!!神武選手が赤城（大湊）さんをお姫様抱っこして走り始めたあ!!速い速い!とても正規空母一隻抱え上げているとは思えない速さです!!』

特に障害はないので一着で小岩についた。そこには目に光がない加賀さんが。

「あ、あのー、加賀（呉）さん?」

「ああ赤城さん 赤城さん まじ赤城さん 私の嫁に 来てくださいいな」

五・七・五・七・七口調でおかしなことを言い始めた加賀（呉）さん。どこにいつて

も加賀さんは加賀さんなのか・・・!!どうしよう、と反応しない加賀（呉）さんを前に悩んでいると、赤城（大湊）さんが加賀（呉）さんを引つ叩いた。

「正気に戻りなさい、この雌豚!!」

パパパパパパパーン!!

往復ビンタを赤城（大湊）さんが繰り返す。・・・まるで夢でも見ているかのような、そんな状況を見ていた。

「まともに仕事もできないの!?!この（放送禁止）!!そんなんだから（放送禁止）で（放送禁止）なんでしよう!?!私に（放送禁止）しようと計画を立てる暇があるなら仕事をしなさい!!」

「は、はひひひひひ!!」

・・・あれ?加賀（呉）さんが幸せそうな顔してる・・・。

「はい、神武さん。これが通航証です。頑張ってくださいね?」
「は、はこ。」

四つん這いの加賀（呉）さんに座った赤城（大湊）さんに通航証を渡してくれる。・・・さあ、早く行かないと後ろが追いついてしまう。行かないや!

@ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @

その頃のド級

「これ、どうしろと?」

ド級がひいた紙には〈駆逐艦娘の水兵服〉と書かれていた。

「・・・剥ぎ取ればいいんだな!」

今ここに鬼畜変態が現れた。

無制限潜水艦作戦。

『さて中盤戦です!!今現在、1位神武選手、2位金剛選手、3位紀伊選手、4位榛名選手、5位北上選手です!』

『さっきの大食いで北上選手が止まったね!』

『まだまだ結果はわかりませんよ?さて最後の障害に神武選手がたどり着きそうです。』

なに・・・これ!?

『最後の障害は・・・潜水艦娘による魚雷祭りだよ!!』

『伊19（横須賀・佐世保・大湊）さん、伊58（横須賀・呉・佐世保・大湊・トラック）さん、まるゆ（横須賀・呉・佐世保・大湊・トラック・リング・ラバウル）さんに出張してもらいました!』

潜水艦娘が積める魚雷数は限られているから、全部は私に撃てない。だから、耐え切

れるはず！

『ちなみに潜水艦娘の周辺に補給艦が待機していますので、いくらでも撃てますよ!!』

「なにそれ、怖い。」

・・・こうなったら。

「あー潜水艦娘の皆さん？今から全速力で航行するから。19万t級が50knでぶつかつたら一発で轟沈するだろうなー危ないなー。というわけで、そこ、どいてね？」

言い終えると同時に加速、すぐに全速力に到達する。前方にいる潜水艦娘が蜘蛛の子が散るように慌てて逃げる。それでも横から撃ってくる娘もいた。

「いたた・・・。魚雷十五発命中か・・・。」

『神武選手、魚雷十五発を受けてなお小破判定すら出ていません！この耐久力、まさに不沈艦です!!・・・えー、他の選手はご安心ください。中破判定が出ると潜水艦娘は攻撃をやめます!』

@ @ @ @ @ @ @ @

浜につくとド級が潮の服を脱がせようとしていた。

「いやあ!?やめてください!」

「はあ、はあ、もう逃げられないぜ?」

「何がもう逃げられないぜ、よ!!」

ばきつ!!

ド級をぶん殴る。

「いつてえ!!いきなり何すんだ!?!」

「いや駆逐艦娘を襲う変態さんに言われたくないんだけど……」

「ちげーし!これを見ろ!」

そういつてド級を見せてきた紙には

〈駆逐艦娘の水兵服〉

と書いてあった。

「あー……、しょうがないね。」

「そうだろう?」

「さあ、脱ぎ脱ぎしましょうねー?」

「え?!い、いやあああああああ!!!」

@@@@

「うーん・・・ぱつつんぱつつんだねえ。」

「エロいな。」

「うう・・・ぐすつ。」

『おっーと神武選手とても扇情的な格好ですねー。あ、今潮ちゃんに近づこうとした人？ 憲兵呼びますよ。』

ド級が潮〈舞鶴〉ちゃんを選んだのは胸が大きく私でも着れるだろうと配慮した結果らしい。ただまあそれでもへそが出るしスカートも短いんだけどね。

「さあ、いこうー！」

「ああ。」

・・・え？ 潮ちゃんは私のミニスカ巫女服をきてますよ？

@ @ @ @ @ @ @ @

『さて、この競技も残りわずか、小岩に皆進んでいます！』

現在1位は神武・ド級ペア！ 潮〈舞鶴〉ちゃんから水兵服を剥ぎ取りました！

2位は紀伊・タ級ペア！ 島風〈横須賀〉のうさミミをつけています！

3位は北上・ヲ級ペア！ 天龍〈横須賀〉の刀を持っています！

4位は榛名・ル級ペア！ 能代〈呉〉さんから15.2cm砲を剥ぎ取りました！

5位は金剛・姫ペア！ 夕張〈佐世保〉さんにミニスカメイド服を借りたようです！』

『金剛選手苦しそうだねー。』

『夕張さんの服ですから。服が・・・胸がきついんでしょう。』

『確かにないよねー。もうなんていうか、ポツチのついたただの壁というか、龍驤？』
もうやめたげてよお!!

後ろから続いているようだがド級の性能は私とほぼ同じ。わたしの速度についてこれる。40knもあれば小岩まで大体50秒でつくはず。後続の娘には負けなと思
うから1位は貰っ

「仕方ありません。VOBを使います。夕級さん、つかまつて！」
「わかったわ」

キイイイイイイン・・・

「行きます！」

「え？待つ、きやあああああああ!!??」

何？今の!?

@@@@

『えー・・・。最後にどんでん返しがありました。結果発表です。』

1位、紀伊・夕級ペア！まさかのVOBでぶつちぎりました！

2位、神武・ド級ペア！惜しくも2位ですが大戦艦級の性能を見せてもらいました！

3位、北上・ヲ級ペア！潜水艦娘を見事に言いくるめました！

回想開始

「一番最初に撃ってきた奴に酸素魚雷20発撃ち込むから。」

「どうぞいってくださいでち！」

「ま、まるゆをたすけ・・・ガポガポガポ・・・」

回想終了

4位、金剛・姫ペア！姉の意地を見せました！

5位、榛名・ル級ペア！残念ながら最下位ですが安定した性能を見せてくれました！

さて、次の競技に・・・アレ？島風ちゃんどうしました？・・・え!?し、しばらくお

待ちください！』

「なにか緊急事態が起きたのかな。」

「案外お前の妹がやってきた、とかかもな。」

「それはないって。泊地からここまで二日はかかるよ？それに私の出撃予定とか崇神に

任せるってジローに言ったしこれないでしょ。」

「それをあいつにはいったのか？」

「うーん・・・まあ言っていないけど大丈夫」

『正体不明の艦影が現れました！見た目は神武選手そっくりですが雰囲気は深海棲艦そのもののようだ、とのことですよ！皆さん、戦闘態勢で待機してください！提督！提督！』

.....

「最近はそんな深海棲艦が」

「いや、どう考えてもお前の妹だろ。」

「現実逃避ぐらいさせてよ！」

「そんなわけにいくかぶっ!？」

どこからともなく飛んできた砲弾にド級が倒れる。突然の出来事に悲鳴が上がり、周囲の艦娘が蜘蛛の子散らす様に逃げていく。

「ド級?!」

海の方を見ればいつの間にか浜にあがってきているナニカ。

「ウウ・・・アア・・・」

「ド級！起きてよ、ねえ!!あんなの私一人に相手させるつもり!？」

ド級を抱えあげる。ド級の目が開いた。

「なあジーンム・・・俺お前と出会えてよかったよ・・・。」

・ ・ ・ ガクッ。

「ド級ウウウウウウウウウウウ!!!」

ド級を抱きしめっていると側で立ち止まるナニカ。

「・ ・ ・ ジンム、ムカエニキタヨ？」

@ @ @ @ @ @ @ @

タウイタウイ泊地・神武型の部屋

「・ ・ ・ つていう夢を見たんだけど。」

「・ ・ ・ 夢は夢。気にしないほうがいい。」

「そうだよね。それにしてもずいぶん寝てたんだねー私。五日近く寝たままなんて。」

「クスッ・ ・ ・ お寝坊さん。」

「もう！崇神つたら！」

「．．．そう．．．
．．．そのままだと思っていて．．．
．．．大丈夫、悪い虫は駆
除したから。」

翔鶴さんこんにちわ。

翔鶴・・・1941年8月横須賀で竣工。基準排水量25675t 速力34.2kn。
海軍軍縮条約失効後初めての正規空母。同型艦は瑞鶴。かわいい。

@@@@

タウイタウイ泊地

やっとウチの泊地にも翔鶴がきたよ。

「翔鶴型航空母艦一番艦、翔鶴です。一航戦二航戦の先輩方に少しでも近づけるように、瑞鶴と一緒に頑張ります」

「ちっ。とうとう五航戦がきたか・・・いえ、赤城さん、なんでもありませんよ。」

「あの・・・瑞鶴はまだこちらには？」

「いないよ。」

「何故か、空母レシピを回すんだが毎回加賀が出てきてな。」

@@@@@

ダブリ・・・二重になること。重複すること。(by 広辞苑第六版)

@ @ @ @ @ @ @ @

「そういえばさあ、建造するときにはダブったりしないの?」

「ん? ああ、ダブったら先に基地にいるほうに吸収されるみたいだよ。今加賀や金剛がよく吸収してるから聞いてみたら?」

「それなんてドツペルライナーシステム!?!」

@ @ @ @ @ @ @ @

シャッフル同盟拳・・・艦隊の雷撃力全てを集約し撃ち放つ最強クラスの必殺技……ではなく、雷撃戦で全艦娘が同じ敵に集中雷撃を浴びせる事。主に敵の残存戦力が一隻の時に発生するが、稀に複数隻の敵が残っているながら魚雷が集中してしまうことも。こちらの編成と標的の艦種によっては10回沈めてなお余りある程にもなるオーバークィル以外の何物でもない大事故で、敵を討ち漏らした提督の悲鳴が今日もどこかにこだまする。

旗艦が生き残っていたり「これだけ削れば大丈夫だろう」と安心しきっている時ほどよく起こり、夜戦突入で余計な資材消費を増やす羽目になったりする。(艦隊これくしょん く艦これく 攻略&2chまとめwikiより抜粋)

@ @ @ @ @ @ @ @

赤城さんと加賀さんの艦載機が敵を殲滅していく。あ、3隻残った。だけどまだこちらには……

「重雷装艦の力を見せてあげるよ！」

「あはははははははははは！」

「イク、いくのね!!」

「「「シヤツフル同盟拳!!」」」

「おい、やめろ馬鹿あ!!!」

ドオオオオオオオオン
!!!!!!

敵艦残り2隻。

「しょうがない!撃ちます!!」

ドゴオオオオオオオオオン!!!

敵艦ト級ののみ。けどト級から魚雷が発射され伊19に命中!!

「イク、大破なのね!!」

「黙ってる!!」

@ @ @ @ @ @ @ @

羅針盤 真の敵。らしんばんまわすよー(回すな)。方位磁針のことであり、繰り返すようだが本来回すものではない。(by艦隊これくしょん) 艦これ 攻略&2c

hまとめwiki)

@@@@@

タウイタウイ泊地・司令官室

『して、小沢司令官。いつになったらカスガダマ海域を制圧できるのかね?』

「戦力的には十分なのですが・・・しかしどうにもできないことがあります。」

『何かね?こちらで解決できることであればどうかしよう。』

「は!ありがとうございます!実はですね・・・羅針盤が荒ぶるのですよ。」

『すまん、小沢司令官。どうにもできない。頑張ってくれ、いい報告を待っている。ではな』

「あ、ちよ、ちよつと待ってください!」

@@@@@

憲兵・・・軍人の秩序維持を主任務とする軍事警察的組織。日本軍では陸軍管轄なのだが、いかがわしい発言・行動をする提督の捕縛によく呼ばれる。

@@@@@

タウイタウイ泊地・演習場

私達は憲兵と書いてある腕章をつけている軍人に演習場に集められた。

「えー君達にはあの箱付近を砲撃してもらおう。」

憲兵さんが指差した先には鋼鉄の箱。

「あの中には提督が入っている。最近如何わしい事をする提督が増えていてな、裁判などをやっている暇がない。なので被害者による私刑を憲兵の監視のもとおこなうことになった。さて、潮君、君は確か・・・体中を触られたのだったかな？撃つていいぞ。」

「えっと、あの、ごめんなさーい!!!」

「次、神通・・・は下穿きを盗まれたとか？」

「はい・・・。えっと、盗らないでつていったのにー!!」

「次、那珂は・・・アイドル（笑）と侮辱された？うーん、次！」

「ちよつとまってよ!？」

「これに関しては提督の言い分に正当性を感じるので無罪だ。さて、次は神武、君は？」
「私もよく知らないんですけど・・・。」

そう、私は特に何かされた記憶がない。さらしを嗅いだことはもう許しているし。

「・・・それに関しては目撃者の私が。」

「君は・・・妹の崇神かね？それでこの提督は何を？」

「神武のさらしを顔にまいた後、神武の下穿きを被つて全裸で（放送禁止）とか（放送禁止）とかしてた。」

「・・・・・・・・。」

「撃つてよし。・・・・ああ、主砲はやめてくれるか？」

「了解。弾尽きるまで撃ちます。」

怪しい薬はもはや定番。

「神武・崇神。呼び出された理由はわかってる？」

「改造するんでしょ？」

「・・・二人とも。」

「なら今すぐ改装しよう。」

「ちよつと待って。崇神、見積もりだして。」

「・・・これくらいかな。弾薬が5000に鋼材が6000いる。二人だとその倍。」

「え。」

@ @ @ @ @ @ @ @

姉妹艦を愛する会・・・山城、比叡、大井、崇神、龍田を中枢とする会。実態を知る者達からは変態の巣窟と恐れられている。

各種薬・・・開発で失敗すると出てくるプリニーを煮詰めるとできる。

@ @ @ @ @ @ @ @

「よし、神武。終わったぞ。昼飯に行かないか？」

「うん、いくー。あー、やっと終わったー！」

私と崇神は改装をドックでしていた。いやー、艦娘状態だと一時間ほどで終わるんだね。戦艦のときは大体一年ぐらい経ったのに。さて、ジローと共に食堂に向かう道中、小さな鍋を持った比叡と山城が来た。

「げっ!?!提督……に神武。」

「げっ!?!とはなんだ、げっとは。」

……怪しい。山城……はたぶん駄目だから比叡にジト目で聞く。

「なあに?それ。」

「媚や……身体があつたまる薬ですよ!」

「はい、没収ー。今媚薬って言ったでしょ?」

「何で駄目なの!?!私もお姉さまも一緒に気持ちよくなれる薬ですよ!?!」

「待つんだ比叡、その言い方は色々危ない。」

「とにかくそれは没収!!」

「いやーだっ!!」

「不幸だわ……ここまできてみつかるとは……。」

没収しようとしてかんだ鍋を比叡が放さないので引つ張り合いになる。

「……神武。」

「なに? つてうわ!?!」

ガスツ

ボトボトボトツ!!

後ろから現れた崇神に呼ばれ反射的に振り向こうとしたら砲身が比叡に直撃。比叡が気を失って引つ張り合いの均衡は崩れ鍋の中身が宙を待った。そしてその中身は私とジローに降り注いだ。!!.. . なにこれ? すごい臭いしねばねばする. . .

「ぐあああああああ!!!」

「ジロー!?!」

!!!

一緒に被ったジローが悶えはじめた。つとりあえず治療室へ!!

@@@@

小沢 冶三郎

そう名づけられた私は、1886年10月2日宮崎で生まれた。様々な縁あつて海軍兵学校・海軍大学校を卒業し、最終的には連合艦隊の司令長官までなつていた。私が司令長官として初めて乗った艦が神武であつた。彼女が作られたのは終戦直後。前任が引退し私が司令長官に抜擢されたのと同じくして建造が決定された艦。まさに私のために造られる、そう考えたこともあつた。ならば、できるだけ神武と仲良くしよう。

そう接して数十年。

確かに私は神武と仲良くなった、私は。建造中の意識があやふやなときから接していたからだろうか、彼女はすっかり私に依存してしまっていた。それでも、まだほかの艦達と積極的に触れ合っていたし、心を閉ざしているわけではなかった。

第三次世界大戦。

この戦いで海軍は多くの艦を失うこととなった。人にとっては船を一隻失っただけだが、彼女・・・いや彼女らにとつては昨日まで笑いあっていた仲間が死んだのと同義であり。親しくしていた艦が多く沈み段々と取り残されていく彼女は心を閉ざしてしまった。もう少し彼女が弱ければ。彼女が傷つくことができたのならば、まだまだあったのだろう。しかし、彼女に損傷といえるほどの傷をつけることのできる艦は存在しなかった。

私が死ぬとき。ああ、死ぬんだなというまるで他人が死ぬかのような感覚だったが、死に際に側にいた神武の顔を見て不安になった。この娘は大丈夫なのだろうか。後を追ってしまったりしないだろうか。そうおもって。

「神武・・・死ぬ・・・な。生き・・・続け・・・る・・・の・・・だ。」

@@@@@@

治療室に運ぶ途中に、ジローがうなされながらたぶん無意識に喋ったのはおっさん・・・私の提督の遺した言葉。

「どういうこと？」

本人は初対面だと言っていたし、なによりおっさんはあんな変態じゃなかった・・・、あれ?・・・おっさんも変態だったなあ。とりあえず、

起きたらきりきり喋ってもらいましょうかね。

・・・あ、こいつら絞るほうが先かな?

@@@@@@

治療室で妖精にジローを渡した後再び食堂へ行き、ご飯を食べ、またジローのところにいく。

「ジロー、起きたー?」

「え?じ、神武!?!ちよつと待て!!」

「ばーん！・・・誰？」

そこにはジローを小さくしたような子供がいた。

暴走神武。

「おおー、ばふばふー。」

「あらー、気持ちいですか？」

愛宕のおっぱいに包まれてパフパフされているジロー（シヨタ）。

「客観的に見たら、シヨタとシヨタコンにしか見えないこの不思議。」

「神武もやります?」

「僕、神武に。パフパフされたい!!」

「ジロー「黙れこの塵芥7・7 m提督神武のおっぱいは私のものだ」ー…、崇神…。」

@@@@

「さて、比叡、山城。何か申し開きは?」

「「反省はしている、後悔はしていない!!」」

「「この砲塔を乗せてあげようか?」

「「ごめんなさい!!」」

提督を膝の上に乗せ椅子に座り、比叡と山城を石畳に正座させ私の艦装を少し乗せている。

「おっさん？そんな年ではな」

「誤魔化さなくて良いよ。私、聞いたもの。あなたがおっさんの遺言をつぶやいたの。」
「……、……。はあ、ばれたか。」

二人きりになったので追求を始めるとあっさり認め、おっさん。かつてのような覇気が立ち上がる。

「なんで、隠してたのさ？」

「いろいろあるが……こういうときはなんとこのだろうか……ああ、そうか。神武、お前のコミュ障をどうにかしようと思つてな。」

「……みゆしよう？」

「こみゆしようって何？」

「人と情報交換などをするのが苦手な人のことだ。神武、お前友達いるか？」

「……？」

「何で友達なんているの？」

「なんでつてなあ……。一人は寂しくないか？」

「わたしにはすじんとおっさんがいるもの。」

「そんなこと言われてもなあ……。崇神はともかく、私はいつ死ぬかわからない。前もそうだったろう？」

「おっさんはしないよ？わたしがまもるから。」

「うー・・・あー、とにかく私と崇神以外にも好きな子を見つけなさい。そうだな・・・金剛とかと仲良かっただろ？」

・・・なんで？

「なんでおっさんそんなこというの？わたしはおっさんとすじんだけいれればいいよ？それともおっさんはわたしのときらいになったの？なにかいやなことした？なんでもいって、すぐになおすから！」

「いや、神武のことは嫌いになつたわけではないが・・・」

「きらいじゃない？すきつてことだよ。よかった、おっさんもわたしのことすきなんだね。わたしもおっさんがだいすきだよ。」

「あー、そうだな、私は神武が好きだからこそ神武には幸せになつてもらいたい。だからな、友達を」

「なんで？さつきもいつたでしょ？わたしはおっさんとすじんだけいれればいいの。こんなわるいことをいうくちはこうだ、えい！」

むちゅー

「っ!？」

じゅるじゅる

「ぶはっ」

「な、なにを!？」

あれ?よろこぶとおもったのに。

「おっさんやりたいつていつてたでしょ?さつきいつてたばふばふもやらせてあげるよ?こつちにきて?」

「な!?!ちよつと待て!つてこの身体力がでない!?!」

むぎぢゅー

「むぐぐ!?!」

「すじんもきたしおっさんもいるしもうしあわせ。ずっとずっといつしよだよ。だいじょうぶこんどもおっさんはわたしといっしよにいればしなないよ。だからね」

いっしよにいてね。

ガンツ!!!

@@@@

「ふう・・・助かった。ありがとな、崇神。」

「・・・なんでぼらしたの？せつかくうまくいったのに。」

「少しあってな。私だとばれる決定的なことを言ってしまったらしい。私の不注意だ、すまん。」

「・・・そう。でもその状態のときでよかった。」

「なぜ？」

「・・・神武は媚薬の効果で本能に忠実になっていた。辛うじて理性が少し残ってたけど、提督が大人状態だったら搾り取られてた可能性がある。」

「っ！・・・それは・・・いや、ありかも。」

「・・・もしそうなら私も参加するから呼んで。」

「ははは、冗談だよ。それに」

そうなる機会はまだまだ先き・・・。このコミュ障をなんとかしないとな。

・・・大丈夫。皆協力してくれるから。

昔話。

太平洋戦争・・・主に大日本帝国・アメリカ合衆国間の戦争。日本時間1941年1月8日午前7時、大日本帝国はアメリカ合衆国に宣戦布告。終始大日本帝国が有利なまま、1942年12月9日日米講和が成立した。一年戦争、大東亜戦争とも呼ばれる。

@@@@

一般的にはミッドウエー海戦における勝利が日米講和につながったと言われているが、それはある意味正しくそして間違っている。確かにこの戦いの後から大日本帝国はアメリカ合衆国に講和を持ちかけていたが、当時のアメリカ海軍には余力があつたし、講和をするつもりはあまりなかった。

では、何がきっかけとなつたのであろうか。

それはガダルカナル島の戦いと第二次真珠湾攻撃だろう。ガダルカナル島とはソロモン諸島の島の一つ。別名：餓島。

ミッドウエー海戦を終え、講和準備に入っていた大日本帝国は次第に軍を撤退させて

いた。アメリカ軍はそこをつき、ガダルカナル島に強攻上陸。ガダルカナル以東との分断を謀った。ガダルカナル島での戦いの際、帝国海軍はひたすらに空母と補給艦を狙い、補給線を分断し航空機による爆撃などを防いだ。又、水雷戦隊にひたすら潜水艦の搜索・撃破を繰り返した。その結果、上陸したアメリカ軍兵士に支援物資が行き届かずその多くが餓死した。餓島という名はここからきている。この戦いにより、アメリカ軍の太平洋側の空母は壊滅、竣工間近の4隻しか残らなかった。そして第二次真珠湾攻撃だが・・・

@ @ @ @ @ @ @ @

1942年10月15日大和

太平洋上を大和・武蔵・比叡・榛名・伊勢・日向の戦艦6隻、赤城・加賀・蒼龍・飛龍・翔鶴・瑞鶴・信濃の空母7隻、その他一等巡洋艦3隻、二等巡洋艦3隻、駆逐艦12隻、潜水艦5隻、補給艦多数とそうそうたる面子が航海していた。

『それにしてもオザワ。君はここにいて良いのか?』

『そういえば海軍大学の学長でしたよね?』

「ん?ああ、司令官になりたければ実戦を経験したまえ。といわれてな、連れてこられたんだ。」

『ほう、君が私達の司令官となる日も近いということか。嬉しくもあり、寂しくもあるな。』

大和のとある一室で会話しているのは連合艦隊旗艦の大和と大和の同型二番艦武蔵、それから後に連合艦隊の司令官まで昇り詰めることなる小沢治三郎だ。そこに、第五航空戦隊の翔鶴がスウツと現れる。

『小沢さん、作戦の再確認に参りました。』

「わかった。それにしても君が来るのか……てつきり赤城あたりがくるものかと思っていたが。」

『一航戦・二航戦の方々は作戦前の最終確認中です。私が一番最初に確認が終わったので……あの、おいやですか?』

「いや、そういうわけではないのだが。さあ、作戦の確認するんだろう?」

『はい。大和さんと武蔵さんもいいですか?』

『はい。』

『ああ。』

『それでは。昨年の真珠湾攻撃で四回の空襲を行い基地機能を壊滅させたわけですが、着々と復興が進んでおり、後数ヶ月もすれば再び元のように基地として本格的に動き始めるだろうとのこと。現に確認された中では空母が4隻、戦艦3隻、巡洋艦・駆逐

艦多数が停泊しているようです。』

「それで早めに潰して、真珠湾を足掛かりにして本土空襲をちらつかせ、講和を進めようというものだったな？ 作戦開始は今日午前7時。」

『はい、そのとおりです。』

『私達は空母の護衛だったな？』

『武蔵、陸への艦砲射撃を忘れてるわよ。』

『おお、そんなものもあつたな。』

「作戦確認はもういいか？」

『あ、はい。大丈夫です。』

@@@@

真珠湾午前7時

「・・・オツホン!! Z旗を掲げよ!! 第二次真珠湾攻撃を開始する!」

「なに?! もぬけの殻だと!?!」

「は! 戦艦3隻に巡洋艦他多数のみで事前に報告されていた空母4隻がない、このこ

とですー！」

『逃げられた・・・か?』

『そのようですね。』

空襲をしに真珠湾に飛んだ航空機隊は報告より少ない艦数に不信感を覚え、打電したが司令官の指示は・・・

「この作戦は空母を狙っていたわけではない!!真珠湾基地を制圧することが目的である。心置きなく爆弾を落として来い!!」

真珠湾がまた炎上した。

@@@@

アメリカの空母・護衛艦がどこにいたかというところ、丁度サンフランシスコと真珠湾の間で演習を行っていた。真珠湾への帰還途中に真珠湾基地からの通信を受け、背後から奇襲するために南回りに真珠湾へ戻ってきていた。

「司令官!! 偵察機から入電! 真珠湾沖から空母4隻! 見つからなかった艦です!」
「空母の艦載機は!？」

「帰還途中です! 出撃できるのは艦戦複数のみです!!」

「ちい! 艦戦は出撃、戦艦の援護をせよ! 全艦回頭! 目標、敵空母群!」

艦戦が飛び立ち、大和・武蔵の45口径51cm連装砲が火を噴くのを皮切りに、戦闘が始まった。艦爆や艦攻は今回ないので、必然的に砲雷戦にて敵艦を沈めねばならない。

「大丈夫なのか・・・?」

「ふっ、安心しろオザワ。私に乗っている限り沈むことなどありえん。」

@@@@@

『それでどうなったの?』

「こちらは特に被害なし・・・いや飛行機乗りが亡くなっているが無事に帰ってこれたさ。」

後はもう知られているとおり、講和を結んだ。その後に君が造られたんだ。」

『へえー。』

「敵に背後を取られたときには、死ぬかとさえ思ったが、武蔵の言葉には救われたな。」
『ふうん。・・・安心しておっさん。私に乗っていけば沈むことなんてないんだから。』
「・・・、・・・ははは。そうだな、私をまもってくれ」

うん、傷一つ付けさせはしないから、だから安心して？

1946年10月15日呉での会話。

襲撃。

ある日の朝。私達艦娘全員に緊急召集がかかった。呼ばれて向かった部屋には厳しい顔をしたおっさん。この事態・・・敵だ。

「現在、他の基地に多くの深海棲艦が侵攻しているとの報告が来ている。その侵攻を受けている基地から救援要請がきた。そこで君たちの中から派遣しようと思う。まずはラバウル方面、崇神！君が旗艦だ。皆をまかせる。」

「・・・了解。」

「次に大井！」

「わかりました。」

「愛宕！」

「は〜い。」

「矢矧！」

「承りました！」

「伊19！」

「は〜い、なの。」

「榛名！」

「はい！」

「以上だ。ラバウルには飛行場があるから終始空からの援護があるだろう。では行つてこい！アイスを用意して待つてゐるからな！」

「「「絶対に戻ってきます！」」」」

「次はトラック・・・」

@@@@

「以上だ！残りはこのタウイタウイ泊地の防衛に努めてもらう。いつ何時大軍がここに来るかわからないゆえにつらいだろう。しかしそれでも我々の、そして応援に行つた艦娘達の居場所を守らねばならぬ！各員一層奮起せよ！」

私は居残りか。艦娘がすっかり減つた泊地内は閑古鳥が鳴いている。泊地内に残っている戦艦は私と金剛さんと山城。空母は翔鶴と蒼龍、飛龍。巡洋艦・駆逐艦勢は愛宕、衣笠に第六駆逐隊の娘、島風、吹雪、北上・大井コンビ。攻め込まれたら壊滅してしまうかもしれない。

「まあ、基地が壊れても私がいる限りおっさんだけは大丈夫だけどね。」

「ん？何か言つたか神武？」

「ううん、なにも。」

#####

演習場

私達待機組みは演習場で軽く身体を動かすことにしたんだけど……

「私一人対皆つておかしいと思う……!」

「勝つたら提督の *Virginity* をあげるネー!」

「それならもうおいしく頂きました。」

「え?」

あれ? 頂かれましたっていうほうが正しいのかな? まあ詳しくはWEBで!

「……コホン。演習が終わったらおはぎがあるヨ。……提督の手作りネ。」

「早くやろう今すぐ殺ろうさあさあさあハリーハリーハリーハリーハリーハリーハリー!!!」

「落ち着くのです。」

ガストツ!

電ちゃん、の錨が痛い……。

@@@@

結果から言うのと負けました。実戦ならともかく演習なので被弾したら終わりなのだ。むしろ勝つたら彼女達に問題があるよねって負け惜しむ。それにしても……

「さすが年の功……。」

「何が年の功よ!?!あなただつて49歳のおばあちゃんでしょうが!!」

「金剛、金剛。素が出る。」

演習のルールとしては

・ペイント弾を使う。

・56cm砲は一発死亡判定。

・35・6cm砲は巡洋艦は一発、空母は二発、戦艦は三発で死亡判定。

・ヘリコプタと噴進砲はなし。

・全員分(十五発)を受けたら負け。

……というもので、攪乱されながら絶え間なく攻撃されたためすぐに負けてしまった。ただ動き回るだけなら当てられるんだけど金剛さんがうまく指示を出していたためなかなか当たらなかったんだよね。

「神武ー!おはぎできたぞー!」

「殺し合い？違うね、今から始まるのは・・・一方的な殺戮だよ。」

ああ・・・おっさんの、ていとくのてきはすべテナクサナキャ・・・

@@@@

こんにちは、翔鶴です。演習が終わり食堂に向かってしていると爆発音が聞こえてきました。他の方々と共に急ぐと、倒れている提督と間宮さん、それを介抱する駆逐艦娘。そして・・・

赤く光るD級を一方的に鬪る神武。

寄らば斬る寄らねば撃つ、というような威圧を放つ神武はまるであの頃の・・・そう第三次世界大戦終盤頃のように。あの当時に隣にいた私ですら、『逃げろ、さもなければ殺される。』と叫ぶ本能をどうにか理性で抑えている・・・そんな重圧。皆も顔が青ざめ膝が笑っています。ですがそれは敵の雑魚たちも同じ。ならば・・・

「皆さんしっかりしてください!! D級は神武が何とかしてくれそうです! 私たちは周囲の敵を掃討しましょう!!」

一番最初に持ち直したのはやはり金剛さん。

「Oh・・・そうネ、私たちの戦いを始めるヨ!!」

次いで山城さん、北上さん、大井さんと持ち直していく。・・・さて。

「全員抜錨！目標：敵侵攻艦隊！行くわよ、全機、突撃！！」

私と蒼龍さんと飛龍さんの烈風、彗星一二型甲、流星が敵を襲撃する。

ドゴオオオオオオオオオオオン!!!

ドゴオオオオオオオオオオオン!!!

ドゴオオオオオオオオオオオン!!!

次々と敵艦が消えていく。けれど口級flagshipなどの小回りが利き移動が速い個体や、ル級flagship、夕級flagshipなどの堅い連中はまだまだ健在です。ル級がこちらに砲塔を向けた瞬間、

ドゴオオオオオオオオオオオン!!!

ル級が水しぶきを上げて沈んでいきました。そう北上さんと大井さんが積んでいる特殊潜航艇・甲標的。真珠湾攻撃の際にはあまり役に立っていなかったように思っていたのですが、中に妖精さんが乗ることによって命中率が格段に上がり意味を成すようになりました。この甲標的によりどんどん沈んでいきますがまだまだしぶとく生き残っているのが何隻か。

「後は任せるネー！」

「衣笠さんにお任せ！」

「でも・・・。」

「なら次はしっかりと守ってくれ。それでいい。」

「おっさん・・・！うん、近づいたら全部沈める！」

そう言い放つ神武の笑顔は普段とは全然違う、思わず襲ってしまいたくなるような笑顔だった。・・・言ってることは物騒だが。

@@@@

「それでどうだったの・・・って聞くまでもないわね。」

「ああ。一方的にやられちゃった。すまねえな。」

「いいのよ。それにしてもあなたが生きてるってことはまだ改二にはなっていないのね。」

「・・・まだあれに上があるのかよ。」

「次は flagship にしてあげる。まあ、それでもお姉さま達には勝てないと思うけど。改二にはなっていないければ互角に持ち込めるかもしれないわ。」

「沈めて仲間にしてくるさ。待ってるよ、戦艦神姫。」

「やあねえ。私は*****って名前があるわ。」

小話。

チュンチュン、チュンチュン。

小沢治郎大佐の朝は日の出と共に始まる。

「……んあくあ。ふう。……神武、崇神、起きなさい、朝だ。」

ベッドの中の二人を起こす。

「……ふみゆう……くう。」

「……おはよう。」

神武は寝たままだが、崇神はおきた。神武も崇神も寝るときは襦袢だ（パジャマや全裸の娘もいるらしい。ぜひ見てみたいものだ）。崇神はきつちりと着ているが、神武はゆつたりと着ておりところどころ肌蹴ていてエロい。谷間とか見えているし。

「……提督。」

「何だい？」

「……私より神武のほうがおっぱい大きいって知ってた？」

「知ってるさ、当たり前だろう。いつも見てるんだから。」

「HEY、提督ウ！おはようゴザイマース!!憲兵呼んでもいいですカー!？」

#####

三式爆雷投射機・・・対潜装備。名前からわかるとおり1943年正式採用。某提督はぜかまして46cm砲レシピを投入した際偶然出現。ただし今のところ必然性を感じていないため、どの娘にも搭載されていない模様。

@@@@@@

食堂

「駆逐艦？あー、うざい。」

「でも北上様って駆逐艦娘に好かれてるよね。」

「・・・ツンデレ。」

「そんなじゃないしく。」

「でも北上様、もつとうざいの忘れてない？」

「え？」

「・・・何？」

「潜水艦だよ、せ・ん・す・い・か・ん!!」

「ああ〜。」

@@@@@@

「うざいなんてものじゃないデース!!」（横須賀所属Kさん・シーライオンに沈められた）

「ふふ、怖いっ！」（横須賀所属Tさん・アルバコアに沈められた）

「私なんかワンパンですよ、ワンパン」（横須賀所属Tさん・アルバコアに沈められた）
「竣工して一日経ってないのに沈められた・・・。」（横須賀所属Sさん・アーチャファイツ
シュに沈められた）

@@@@@@

「私何回相手したけどなかなか当たらないんだよね。」

「神武っち、体当たりで潜水艦沈めたの神武っちしかいないから。」

「崇神もやってなかったっけ？」

「・・・私はせいぜい高角砲で魚雷を迎撃したぐらい。」

#####

イリノイ・・・アメリカ海軍アイオワ級戦艦五番艦。1945年1月15日フィラデル
フィア海軍工廠で起工。1947年竣工。1951年黄海・仁川沖にて大日本帝国海
軍戦艦神武と衝突、艦首が折れ、長崎で修理を受ける。1963年戦時中ながらも老朽
化を理由に退役。商船に改装された。

@@@@@

「Hello, Zinmu! How are you?」

「あ、イリノイじゃん！私は元氣。貴女は？」

「とつても元氣ヨー！私今ハワイ基地にいるノ！」

「結構近いね。」

「そうヨ、だからジئمも気軽にこれるヨ。」

タウイタウイ泊地にイリノイが来た。イリノイは私の同い年の友人。心置きなく話せる仲だ。

「スジンはどうしたノ？」

「崇神なら・・・あそこ。」

『崇神、止めるなデース！』

『・・・落ち着いて金剛、今あなたはおかしい。』

『私のIdentityの危機なのデース!!』

『静まるです』

ガスッ！

ズルズルズル・・・

『神武さんはそのままお話しててくださいです。』

「だつてさ。」

「あの娘、駆逐艦なのにすごいワ。」

「よつぽど変なことしなければ怒らないから。少なくとも私は怒られたことあまりないし。」

「ジムムがあまり怒られないなんて・・・あの娘はとても寛容なのですネ。」

「なにそれ、ひつどーい。」

@ @ @ @ @ @ @ @ @ @

「そういえばイリノイはハワイでうまくやつてる?」

「ジムムのおかげで大丈夫ヨ。」

「?」

「StatesではジムムはMonsterと呼ばれてるワ。そのジムムと仲良しだからって私も怖がられてるのヨ。えーっと、Japanではこういうのを・・・そう虎の威を借る狸!!」

「狐ね。そういえばどうしてここに来たの?私に会いに?」

「それも目的の一つネ。こちらの提督が『オザワに会いたい』って言い出したから手紙を届けにきたノヨ。」

「へー。じゃあこちらから手紙を送るときは私が行くね。」

「It、s very nice! Partyの準備して待つてるネ!!」

#####

運・・・めぐってくる吉凶の現象。幸・不幸、世の中の動きなどを支配する、人知・人力の及ばないなりゆき。まわりあわせ。「ーが悪い」（広辞苑第六版より抜粋）

@@@@@

『して小沢大佐。西方海域を制圧したとの報告を受けたが北方海域はどうなっておるかね?』

「ただいまアルフォンシーノ方面まで制圧できておりますゆえ、すぐに全面制圧できそうです。」

『そうか、わかった。こちらでも支援は惜しまない。困ったことがあつたらすぐに言ってくれ。』

「ありがとうございます!!ではr」

『おつと言い忘れていたが羅針盤以外のことだからな。』

「・・・神武。」

「何?おつさん。つか今電話中じゃん。」

「横須賀にある資材、全部食べていいってさ。」

「「本当ですか!?!」」

「翔鶴に加賀に赤城?よしお前らも行つて来い。」

『おい、やめろ、そいつらをここによこすなああああああ!!!』

#####

鉄底海峡 Iron Bottom Sound・・・ガダルカナル島北面の海峡のア

メリカ側での俗称。ガダルカナル島侵攻作戦の際に多くのアメリカ艦が沈んだため、こ
う呼ばれている。

@@@@@

ガダルカナル島にある戦没者慰霊碑。そこに私はおっさんといっしょにいた。

「神武は知らないだろう。まだ生まれていなかったからな。ここで多くの人が亡くなつた。私達の世界ではアメリカ兵が、この世界では日本兵がたくさん死んだ。しかも敵と合間見えることなく飢えて、だ。私自身は戦闘に参加していないのだが、部下によると最も悲惨な戦いだった、そう言っている。銃を向けさせるよりも、敵に食料を差し出させることの方が多かったそうだ。」

「でも補給線を断絶したのは日本軍でしょ?」

「ああ、そうだな。戦略的に間違っていると思わんし、後悔もしていない。この世界のアメリカ軍も同じことをしている。それにいかにこちらの被害・消耗を少なくして敵を殺

すかが戦争だ。だがな．．．せめて飢えではなく闘いの中で死なせてやりたかった。そう負い目を感じているよ。そんなことをすれば味方にも被害が出るというのにな。」

「．．．。私はなにもいえないよ。けどね、死んだ人を忘れずにここに来て死者を想う。それだけでもいいんじゃないかな。」

「神武．．．。」

「それにね．．．。」

海に立つ一人の艦娘。笑顔でこちらに手を振りながら向かってきている。．．ミズーリだ。その隣にはイリノイ。

「第二次真珠湾攻撃だっけ？おっさんが一部とはいえ指揮して沈めた娘ですらおっさんを許してるんだよ？おっさんのことすら知らない人がおっさんを怨めるわけないし、おっさんも無駄とは言わないけどそこまで気にしなくていい、そう思うけどね。つていうかおっさんが作戦の指示を出したわけじゃないでしょ。」

「．．．。．．．ああ、そうだな。」

「何シテルノー!?!早く早く!!」

「早く向かわないと遊ぶ時間が減るヨ!!」

「はいはい、今いくから!．．．ほら、おっさん。早く乗って。」

「．．．おう。さて、ハワイに行くぞ!準備はいいか?」

「:::」

霧。

神武EXTRA

排水量：乙女の秘密♪

動力源：主・次元波動エンジン

副・熱核融合炉

全長：425m

最大幅：62m

最大速度：82000kn（およそ151864km/h）

武装・主砲：56cm三連装ビーム砲4基12門

・副砲：41cm連装プラズマ収束ビーム砲

・41cm電磁波砲6門

・30cm重粒子加速連装砲18基36門

・30mm三連装機銃152基456門

・星間噴進弾（旭日）専用噴進砲8門

- ・人型機動装甲8機

- ・加電粒子砲10門

他

- ・次元跳躍装置

- ・強制波動装甲

- ・クラインフィールド

- ・言語解析・翻訳装置

- ・小沢サーチャー

- ・メンタルモデル

解説：説明しよう！神武EXTRAとは広大な宇宙空間、そして未知の世界を探検するための戦艦なのだ!!

- ・次元跳躍装置・・・ワープ装置。

- ・重粒子加速砲・・・そのまんま。物体をすり抜けるため、中の有機生命体だけ

を殺すことができる。

- ・最大速度82000kn・・・公転速度を利用せずに太陽系を脱出できるぞ!

- ・強制波動装甲・・・物理エネルギーを分散・吸収して再利用したり、捨てたり。

- ・クラインフィールド・・・外部からのエネルギーのベクトルを任意の方向に捻

じ曲げられるぞ!

・言語解析・翻訳装置・・・異星人とも会話を行える。要時間。

・小沢サーチャー・・・記すことさえ憚れる。

・メンタルモデル・・・病んでる。これ以上は記すことさえ憚れる。

@@@@@

要塞港・横須賀

沖合いから霧の大戦艦ハルナ・キリクマが現れ、要塞港からイ401と白鯨が出ようとしていたその時。それは唐突にきた。

「なんだ・・・!?あれは!?!」

「空が割れてる・・・?!」

『キリク・・・シマ。何が起きている?』

「わからない!空間が捻れて・・・何かが出てきている!?!」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

突如横須賀の上空に現れたヒビのような空間の捻れから、それは姿を現した。

「ふ・・・ね・・・?」

「・・・浮いてるよ?」

徐々に身を出し、完全になったそれは・・・そう戦艦。ただしそれは、

「でかい・・・」

「・・・コンゴウ。空を飛ぶでかい戦艦が現れた。大きさは・・・425m。推定排水量20万t以上。」

『馬鹿な・・・。ヤマト以上だと?』

そして音が、いや声が響く。

『こんにちは、この世界の皆さん。私達は地球から・・・つておっさん?解析データによると地球と98%ぐらい一致してるんだけど。』

『いやとりあえずマイクをきってくれ。』

@@@@

「いいね!あれも人間が作ったものか?」

「たぶんそう。でも・・・私達と同じ匂いを感じる。」

『ハルナ。あれは我々とは違うものだ。構わん、撃ち落せ。』

「了解!」

ハルナ・キリクマからビーム、ミサイルが次々と放たれる。それは空中に浮かぶ戦艦

へと次々に当たる。爆音が弾け、視界が不良になる。

「まだ残ってる。」

「ふ、人類も進歩しているというこ．．．何?! 無傷だと?!」

煙が吹き飛び、再び現れた戦艦は無傷だった。

『攻撃されたし、撃っていいよね?』

『どちらか一隻なら構わん。』

『りよーかい。波動砲、出力百万分の一! 撃てええ!!』

キイイイイイイイイン

シュバツ!!

ドゴオオオオオオオオンツツ!!

回頭した空中の戦艦の艦首にある巨大な穴。恐ろしいほどのエネルギーが一瞬で貯まり、放たれたエネルギーはキリクマを襲う。

「ぐあああああああ!!!」

「『キリシマー!』」

キリクマのクラインフィールドはなす術もなく、彼女の強制波動装甲は一瞬にして臨界値の限界近くまで達した。

『おっさーん。あの船耐え切ったんだけどー。ていうか今更だけど船の見た目は霧島だよ?』

『耐え切ったのか!?!。おもしろい。あの船に接触してくれ。』

『はい。お? 私みたいなメンタルモデルがいるみたいだよ?』

一瞬意識を失いながらもキリシマは立ち上がった。この間にも強制波動装甲からエネルギーは発散されており、それは光となって現れていた。そしてその光はハルナのデコを照らす。・・・立ち上がったキリシマの前に落ちて来る影が一つ。その姿は麗しき少女。濡れ羽色の長髪、出るとこは出て締まるとこは締まっている身体、巫女服と呼ばれるものを改造したであろう白と赤の服、整った顔立ち。キリシマは感じていた。こいつは私達と同じ様な存在。そしてこいつには・・・

「こんばんは。私はジੰム。よろしくね? それにしても百万分の一とはいえ波動砲をしのぐなんて・・・夫兼ご主人様が興味を持ってたよ? 殺していい?」

『まだ殺すな。』

逆らったら殺される、と。

@@@@

「つていうのを書いてみたネー！」

「キリクマってなんですかキリクマって!？」

「(よかった・・・私は普通だ・・・)」

「お姉さま!?!私はいないの!?!」

「OH・・・Sorry、比叡。忘れてたネー！」

「ひどい!!」

@@@@

宇宙戦艦ジੰム、近日公開予定!!

「見にこないと撃っちゃうぞ☆」

建造。

給糧艦：…艦隊や前進基地などに食糧を輸送し、供給することを目的とした軍艦。間宮や伊良湖などがこれに当たる。

@@@@

建造の際に必要な存在として資材の量と比率が知られているが、実は秘書艦も関係することを知らぬものは少ない。建造する妖精が秘書艦娘の思考を感じ取るのだろうか、秘書艦娘と縁のある艦娘を造るのだ。姉妹艦だったり、同じ部隊だった艦などというように。決して仲がよかった艦ができるわけではなく縁がある艦ができるために、できた途端に喧嘩することもある。前に北上を秘書艦にした際、阿武隈が建造されたのだが、完成して意識が覚醒した瞬間に互いに頭突きをして、阿武隈は大破、北上は中破となった。神武は電が秘書艦になったときに建造された。24分・…ではなく24時間という数字、秘書艦が電というところから小沢司令官は神武だとわかったらしい。崇神は時雨のときだ。意外と戦艦と駆逐艦は仲が良く、ロリコンな提督程、艦が充実しているのはこういう理由だったりする。

それでは神武を秘書艦にすると誰が造られるのだろうか。一回目は翔鶴が建造され

た。彼女はよく神武と組まされていたので当然だろう。ちなみに翔鶴に秘書艦と建造の關係性を教えると喜んでいた。彼女にとつて妹のような存在の神武に覚えてもらっていたのが嬉しかったのだろう。そして今日、二回目の建造が始まる。

@ @ @ @ @ @ @ @

タウイタウイ泊地・工廠

「さて今日は二回目の建造となるわけだが。」

「わくわくするねー。」

秘書艦をやつてる神武だよ。建造をしに工廠に来ています。私とおっさんが協力して新たに艦が生まれる。

「そう、まさに愛の巣！」

「何を言つておるのだ。」

「何つて・・・ナニ？」

「・・・こほん。配分を決めようと思うのだが。」

「そうは言つてもね・・・弾薬とボーキ、ほとんどないよ。油と鉄を突つ込むしかないと思うけど。」

「では、それで。」

「軽ッ!？」

『投入しましたです。しばらくお待ちください。出来上がり予定は二時間五分後です。』

間延びした妖精の声が聞こえてくる。

「軽空母かな？」

「しかし、同じ部隊にはなったことないはずだ。」

「そうなんだよねー。ま、待つしかないよね。愛を育みながら待とうよ！」

「職務中だ。」

「いけず。」

〈時間経過〉

現れたのは割烹着を着た140cmくらいの娘。栗色の長髪は後ろで一括りにされている。割烹着の上からでもわかるふくらみ、やや吊り目で勝気そうながらもすべてを受け入れてくれそうなその雰囲気、それらは彼女から母性を感じさせる。

「どうも始めまして。給糧艦『伊良湖』です。イナゴじゃないよ、イラゴだからね！・・・ってあんたは!?!」

「げっ、イナゴ！」

「イナゴじゃない!・・・ここであったが百年目!今度こそあんたに認めさせる!」

「できないことを言うものじゃないよ。」

艦の殺気を浴びたのもこの二人で、後にどんなものにも恐れを抱くことがなくなつたという。

しかしこの二人の関係は第三次世界大戦中に終わりを告げた。ソ連の原潜が日本の水雷戦隊との交戦中に放つた魚雷が、数km先の輸送部隊に向かい伊良湖に直撃、大破した。その後持ち直したものの、基地への帰還中に中国の水上打撃隊との交戦に入り、沈められてしまったのである。神武の人見知りが加速した瞬間でもあった。

@@@@

そして今。再び二人のおはぎをめぐる熱き戦いが始まるッ!!!

「今度こそ!!」

「馬鹿め、と言つてあげるよ。」

『今台詞を盗られたような……。』

『気のせいじゃないかしら。』

瑞鶴さーん。

珊瑚諸島沖・・・メタい話をすると5―2。ゲージあり。残存時は装甲空母姫・鬼が、破壊時は南方戦棲姫が出現する。しかし、支援艦隊を出したりできるので、西方海域や北方海域より楽だったりする。

@@@@

「翔鶴型航空母艦2番艦、妹の瑞鶴です。幸運の空母ですって？そうじゃないの、一生懸命やってるだけ・・・よ。艦載機がある限り、負けないわ！」

「秋雲着任く提督よろしくねえー」

珊瑚諸島沖に出撃していた北上さんが瑞鶴と秋雲を拾ってきた。何でも深海棲艦を倒したら中からパカッと現れたらしい。

「あ、小沢うちじゃん。爆撃していい？」

「させると思う？」

「何よ神武。ただの冗談じゃないの。そんなこともわからないの？」

「冗談でも本当でもおっさんに手を出す（物理）ならお前を壊す。」

「はーいはい。出しませんよー（物理）。まったく、相変わらずなんだから。そういえ

ば崇神は？」

「・・・翔鶴を呼びに行っていた。」

「瑞鶴!!」

「翔鶴姉!!」

ガシツ!!

「秋雲さんなんか空気・・・」

「ふふふ・・・私とお友達に・・・。」

「主人公（ ）と・・・？もつと存在感が・・・。」

#####

フラグ・・・①イランのモンゴル王朝、イル・ハン国の創始者。チンギス・ハンの孫。
(ブリタニカ国際大百科事典より抜粋。)

②ある条件が成立したかどうかを判断するために使われるプログラム
上の変数。成立しているときは1、成立していないときは0、などのような使い方をす
る。(日経パソコン用語事典2011より抜粋。)

@@@@@@

『提督ー！なんか瑞鶴、ちよつと退屈なんだけど…不貞腐れるぞお！』

「よっしやあ！フラグ立ってるぞ！」

「・・・おっさん、何やってんの？」

おっさんがパソコンで何かのゲームをしている。今の声は・・・瑞鶴？

「ん？ああ神武か。これだよ、これ。」

そういつておっさんが見せてきたのは、青っぽい箱。ええつと・・・『艦隊コレクション

ン〜タウイタウイ泊地編〜R18指定』？

「この前横須賀に行ったときに台本喋らされただろ？あれ、ゲームの台詞なんだよ。」

「へえー。」

じりっ

「登場人物はお前に北上、赤城、加賀、飛龍、蒼龍、響、電、矢矧、愛宕、高雄、まるゆ、金剛、ヲ級、その他多数だ。」

「ふうーん。」

じわっ

「最後までいける恋愛ゲームなんだが戦闘パートがなかなか辛くてな。」

「・・・。」

ピタッ

「それでな・・・」

「おっさん。」

小沢司令官は執務室から音がなくなったのを感じた。同時に冷や汗が流れ始める。

「だからかまってくれなかったの？」

「いや、その・・・」

「まずい。非常にまずい。」

「ずっとへやにひきこもってるし、あそんでくれないし、おはぎもつくってくれないし、はなしかけてもうわのそらだし。わたしよりもそれがいいの？」

1：「ああ、これはとてもいいものだ。」

2：「神武もいつしよにやるか？」

3：「横須賀の提督にやれっつていわれてだな・・・」

1はない、絶対ない。泊地がなくなってしまう。3は一見良さそうだが、明日の朝刊で横須賀の提督が死んだことが報道されてしまう。2は・・・といふかなんでこんな選択肢しかないんだ!!

4：抱きしめる。

これだ！選択肢に従い神武を強く抱きしめる。

「ゲームよりお前のほうが大事に決まっているだろう。」

神武の手が私の背中に回る。よし、なんとかなつたみたいだ……。

「おっさん……」

「神武……」

「ならこれはいらないよね？」

ちゅどむ

え？

#####

遍在……広くあちらこちらにゆきわたつてあること。「石仏は全国に―する」（広辞苑第六版より）

@@@@

まるゆは陸軍の潜水艦である。正式名称は三式潜航輸送艇。輸送艇なので武装は38mm砲一門のみだったが、この世界では海軍の管轄となつたからであろうか、魚雷が撃てるようになった。木曾（大井説もあり）に不審船扱いされた上に「お前潜れんのか？」と聞かれたり、日本郵船の船に体当たりされて致命傷を受けるわとなかなか不憫な娘であるが馬鹿にしてはいけない。魚雷という攻撃手段を得た彼女は这个世界では

強い？のだ。

「イーッ!!」

「まるゆがひきつけるので他のまるゆさんはありったけの魚雷を叩き込んでください!!」

彼女は同時に38体に分裂できる。一人一人は弱いものの、集団になれば強くなれるのだ。

召喚。

形態・・・①ありさま。かたちに現れた姿。形式。「政治」

②〔心〕ゲシュタルトに同じ。(広辞苑第六版より)

@@@@

艦娘には二つの形態がある。一つは通常状態の人間形態だ。そしてもう一つは——
——本体の召喚だ。

普段の任務において彼女達が本体を召喚することはまずありえない。何故なら敵……深海棲艦もまた人型、もしくは人間程の大きさで出現するからだ。本体で攻撃してもまづ当たらないし(もつとも周辺に砲弾が行けば怯ませることはできるし、仮に当たれば駆逐艦でも戦艦を沈めることも可能である)、深海棲艦からの攻撃を一方的に受けることになるからだ(大してダメージ受けるわけではないがそれでもだ)。

ではどのような場合に召喚するのであろうか。まずは移動や輸送任務の時である。忘れてはならないが、艦娘は兵器で軍艦なのだ。他国の領海に入る時、もしくは領海周辺を通過する場合には本体を召喚・国旗を掲げることが国際法で義務付けられている。また輸送任務については明らかだろう。人型と本体では運べる量に明らかかな差がある

『ふむ、それでは神武、まずは湾外に出ろ。そこでやるぞ。』

「はい！抜錨！神武行きます！」

「あ、ちよつ、ちよつと待ってまだまるゆが、きやあ！．．．また水被った．．．」

航行波によってまるゆが濡れていたが、まあ彼女は潜水艦だし問題ないよねつ。

@ @ @ @ @ @ @ @

本体召還が躊躇われる理由はまだある。ダメージが大きくなるのだ。例を挙げると、艦娘状態では神武と金剛がぶつかったところで痛いだけで済むが、本体がぶつかった場合、どこぞのアイオワ級5番艦の如く金剛の艦首が折れてしまうこともありえるのだ。

さらに、本体が受けたダメージは艦娘に反映される。艦娘がダメージを受けたところで本体には何の影響もなく、風呂に入つて一定期間休養をとれば快復し前線にすぐさま復帰できる。しかし本体が損傷していると該当部位が修理されるまで艦娘も動きが悪くなる。多少の傷・へこみ程度なら痣で済むが、機関部が損傷となると動くことが困難になる。しかも本体で感じる感覚は艦娘の大きさ分の本体の大きさ倍される。特に痛覚など人間が受ければ一瞬でショック死するだろう。．．．余談だがとある提督の調査によると性的感覚も増幅されるとか。憲兵さんこつちです。

ちなみに、であるが。沈んだ船の深海棲艦への変化のしやすさは生前の意識と本体の損傷度で決まるとされていて、意識が濃く本体に傷が少ないほどなりやすい、と考えら

れている。また希有な例だが、建造途中に何らかの事態で建造中止になった船も深海棲艦化していたことが横須賀で一件報告されているため、建造に携わった人の思念も影響するとの説もある。

@ @ @ @ @ @ @ @

外洋（といっても湾には近いけど）に出た私と一緒に本体を出して訓練するのは、陽炎・不知火・黒潮・雪風・秋雲の陽炎型駆逐艦。私がミスしても避けられるだろうという考えで選んだらしい。

『さて、これは彼女達陽炎型にも伝えてあるのだが。神武、お前は私の指示に従うだけでいい。』

「ふえ？・何で？・」

それは果たして訓練とっていいの？

『お前は図体が出たいからな。お前が合わせるより、お前に合わせるほうが遥かに安全かつ効率的だ。お前がやることはこれからどう動くかを私から聞き、それを細かく伝えることだ。』

「・・・うん、わかった！」

『なら早速やってみろ。直進、速度15kn、輪形陣！』

「皆ー！直進、15kn、輪形陣だつて！」

『そのまんま……. だけどまあいいか。』

@@@@@@

艦娘のダメージが本体に影響しないのに、なぜ彼女達は沈むのか。また、同じく人型の深海棲艦をどう倒しているのか。どちらも同じ謎のようだがそれは違う。

まず艦娘が沈む理由だが、これは簡単だ。本体への影響はなくても身体の損傷・疲労が激しすぎで、つまり溺れるのだ。溺れながら怨み辛み・生前のことを思っていたら深海棲艦になつていたらと、深海棲艦から艦娘に変化した者が言っていた。

さて、深海棲艦をどうやって倒しているのか。実は、倒せていないのだ。艦娘と同じく身体に損傷を負って溺れていく。この際に艦娘になるものもいる。溺れて行き海底に着床すると、ひたすら眠るのだ。そして例え頭が潰れていても再生する。稀に海溝に沈んで水圧で、もしくは海底火山口に落ちて死ぬものもいるらしい。つまり、我々は瀬戸際で対処しているに過ぎないのだ……。

誘拐。

『よし、そろそろいいだろう。』

「やっと終わったー！」

あっちへ行かされこっちへ行かされを繰り返してやっと終わった。

「それにしてもこの旋回性能、どうにかならないかな。」

「仕方ないんちゃう？ 大きいからしょうがないやろ。」

この425mという巨大さのせい、旋回性能は本当に悪い。当時はおっさんの指示が出てから回頭するまで分単位で時間がかかった。それは私が操るようになって多
少早くなつたものの、やっぱり遅い。だからこそ振り切るための馬鹿みたいな速度と、
突破したせいで単艦状態になつても耐えられるようなアホみtainな装甲をつけられたん
だけだね。他の国で56cm砲を載せようと思つたらもつとでかくなつてた上に鈍
足つて予測もあつたし、日本に生まれてよかつたー。

「司令官、同人誌の新作できたけどいる？ 今回はイリノイ×神武と北上×大井×神武
に翔鶴×神武の二本だよ。」

『全て神武が受けか……。珍しいな。』

「なかなか考えにくいからねー。ふとんの中ではどうなの？」

『最初は神武から迫ってくるんだがな、途中で失速して羞恥心がすごいことになっててな。．．．まあそこを責めるわけだが。』

「ほうほう、興味深い話ですな。ところで司令官。」

『なんだ？』

「たすけて」

『無理だ。』

「ひとをかってにどうじんしにするのはあなた？」

「わ、私は何も悪くない！」

「そうだよな。かってにかいちゃうこのてがわるいんだよね。ならきりおと

さなかと。」

「ぎゃーー！！???」

『秋雲用に風呂開けとくか．．．。』

「こんやはねかさなないよ？しぼりとってあげる。」

『ははっ．．．精力剤まだあったかな．．．？』

@ @ @ @ @ @ @ @ @ @

演習からしばらく経った日のこと。それは来た。

キュイアアアアアアアアアア!!!

耳に突き刺さるような空間が裂ける音。そう、本体があらわれる時の音。小沢司令官は誰にも召喚許可を出してないので、これを深海棲艦によるものだと判断。全艦娘に状況に応じて召喚する許可を出した。

そして空間の裂け目から現れたのは・・・

「何・・・だと・・・!?そんな馬鹿な!?」

現れたのは全長400m越えの巨大な艦だった。そしてそこから一人の少女が来る。その姿は・・・神武をそっくりそのままアルビノにしたような、そんな姿。

「ごきげんよう、皆さん。初めまして。戦艦神姫と申します。」

「戦艦・・・神姫・・・だと!?そんな報告は受けてないぞ!」

「ええ。あなた方の識別に従って勝手に名乗っているだけです。ですがこの名前、好きではありませんのよ?だから私の本来の受け取る筈だった名前を名乗りますわ。神武型三番艦応神です。お姉様を迎えに来ましたわ。あら?神武姉様しかいらっしやらないのですね。とりあえず今は神武姉様だけ頂いていきますわ。」

そしてタウイタウイ泊地から神武が消えた。

@ @ @ @ @ @ @

昭和19年12月7日午後13時35分、推定マグニチュード7.9の自身が東海地域を襲った。いわゆる東南海地震である。この地震による被害は多大で、横須賀も例外ではなく。震度自体は4とそれほど高くはなかったが発生した火災により必死の消火作業も虚しく工廠が全焼。横須賀で建造されていた神武型三番艦、予定名称『応神』は建造中止となったのである。もともと神武型の建造自体が無理を通して予算を獲得したものであったから、これ以上金額が嵩むわけにはいかなかった為の中止と言われている。

彼女、応神にとっての不幸とは地震が発生する前から意識が覚醒していたことだろう。また、この火災によって艦長になるはずであった将校や、建造中の多くの作業員がなくなっており、それらを祭るための社が復興後の横須賀工廠に建てられている。靈感のある人曰く絶対に遊んではならない場所として恐れられているようだ。

@ @ @ @ @ @ @

タウイタウイ泊地

「北上、工廠に行つて妖精に改造の準備をさせろ。使用資材は弾薬5000鋼材6000だ。島風、パラオに行つて崇神を連れ戻してくれ。護衛には金剛あたりの足の速い奴

を出す。帰りは崇神に載せてもらえ、本体の召喚許可書だ。」

「提督、慌てないでくださいなのです。」

「電、喋り方が変になってる。」

タウイタウイ泊地内はお通夜状態だった。どうやって神武が連れ去られたのかはわかっていない。彼女の部屋の中の一酸化炭素濃度が何故か高くなっており、恐らく深海棲艦の仕業によるこれで神武は気絶し、連れて行かれたのだろうという判断だ。

「神武たちって深海棲艦になりやすそうだよね。」

「北上さん!!」

「そんなこと言わないで!」

「何いってるのさ。深海棲艦になって現れたら、倒したらまた神武たち戻ってくるかもしれないじゃんか。．．．倒せるのかっていう大問題があるけど。」

「．．．問題ない。」

「崇神さん!改二になったのね?」

工廠から現れた崇神の姿は入る前と変わっていた。

「．．．それより北上、大井。あなた達も手伝って?神武を助けに行かなきゃ．．．。」

コラボ。

シヨートランド泊地という基地がある。ソロモン諸島の北西端にある、シヨートランド諸島の基地だ。この世界の太平洋戦争でも、日本軍の基地として使われていた土地であり、今また対深海棲艦のための基地として使われている。

このシヨートランド泊地、実は最近で来た泊地で現段階では実質四人しかない。なので度々タウイタウイ泊地から支援を送っている。

ん？何故タウイタウイ泊地なのかって？

確かにもつと近い基地は二、三あるし、タウイタウイ泊地でなければならぬ理由はない。しかし、必ずここへの応援はタウイタウイへと回されてくる。その理由は提督にある。といつても提督が決して極悪非道な輩というわけではないが、強いて言えばその存在ゆえに艦娘から拒否されるのだ。

その提督の名はアルバコアSS—218。ガトー級77姉妹の7番目。横須賀史、いや他の基地の歴史でも艦娘達にトラウマを作った・・・そう、潜水艦なのだ。

さて、何故アルバコアが提督をしているのか。

実は彼女は臨時提督で正式な提督ではない。提督が謎の失踪を遂げたとの報告があり、なぜかショートランド泊地で倒れていたアルバコアが提督をやると言い放ったそうだ。海軍本部はこの事実を面白いと黙認している。

今現在ショートランド泊地にいるのはアルバコア、電、天龍、任務娘。この先どうなるのであろうか。

@ @ @ @ @ @ @ @

タウイタウイ泊地・神武の部屋

明日から一週間、ショートランド泊地に貸し出されることになった神武です。共に行くのは大潮、漣、天龍の三人。なんでも、アルバコアちゃんが提督をやっているらしい。アルバコアちゃんとは・・・どこであったんだっけ？ 忘れたけど、補給のために寄港したところに私もいて少しばかりお話をしたんだよね。黒い頭部のないダイバースー

ツミたいなのを着た娘で可愛かったなあ。ショートランドのアルバコアちゃんはどうな感じなんだろう……。

「……神武？準備はできたの？」

「できてるよー。」

「……私が入るトランクがないんだけど。」

「崇神はお留守番です。」

「なん……だと……!?!」

@@@@

ショートランド泊地

「提督さん提督さん、今日はタウイタウイから応援が来るのです。お迎えに行きましよう。」

「そうだな。ええつと……天龍、漣、大潮!?!やばい!殺される……!」

天龍、漣、大潮。アルバコアの沈めた艦だ。天龍のときにあの騒ぎだったんだ……三人来たら……

妄想開始

『天龍だ。』

『漣です。』

『大潮です!』

『あの・・・その・・・アルバコア、です。』

『『ああくアルバコアねアルバコアってアイエエエエエエエエエエ!』』

『『ナンデ!?アルバコアナンデ!?』』

『ギャー!!!』

ピチュン

妄想終了

あかん・・・これはあかん・・・ん・・・?この『神武』って誰だ・・・?

「ねえ電ちゃん。この神武って誰?こんな艦聞いた記憶ないんだけど。」

「あれ?提督は知らなかったのです?基地ごとに出身世界が違うのですよ?」

く電、説明中く

「というわけで、神武さんはタウイタウイ泊地だけの艦なのです。」

なるほど・・・艦これにこんな設定あつたかな・・・?

「どんな艦か知ってる?たとえば性格だとか・・・あとは潜水艦にトラウマがあつたり

だとか。」

「会ったことはないのですが、穏やかな方だそうですね?性能とかは送

「られてきていないのですか？」

「・・・あ、書いてあ・・・るけど詳しいことは書いてないね。ん？向こうの提督からの伝言もあつた。」

増援部隊編成

神武型一番艦神武

艦種：戦艦

天龍型一番艦天龍

艦種；軽巡洋艦

朝潮型二番艦大潮

艦種：駆逐艦

綾波型九番艦漣

艦種：駆逐艦

シヨートランド泊地司令官へ

タウイタウイ泊地司令官、小沢治郎だ。ささやかながら増援を送らせてもらおう。そちらの状況を鑑みるにもう少し送りたいのだが、何分こちらも敵が多くてな。だが、四人とも練度は高いから安心してほしい。さて、貴殿がガトー級潜水艦SS-218アルバコアだと知っているが、この四人はこちらの世界でアルバコアと特に仲が良かった者

達だ。貴殿も気にせずに話し合っただけ。司令官という立場を弁えて、だが。

最後に一つだけ注意事項がある。そちらは神武について知らないだろうと思うのでここに書くが、彼女はこちらの世界の最大最強の戦艦だ。・・・大和型を遙かに越えて、な。ゆえに緊急時以外に出撃させることをおすすぬめない。彼女も出ようとするだろうが止めてくれ。もちろん、資材が尽きてもいいというのなら別だが。

タウイタウイ泊地より

ポクポクポク、チーン。

「いい人だ・・・。」

他にも色々あるけど今はとりあえずこれしか思い浮かばない。

「そろそろ来るのです!」

「天龍を呼んできてくれる?」

「はいなのです!」

@ @ @ @ @ @ @ @

よつこらよつこらソロモン諸島までやってきた私達を出迎えてくれたのは、ショートランドの電ちゃん、天龍、任務娘、それから黒タイツ・・・じゃなくて黒いダイバーズツの艦娘。

「タウイタウイよりショートランド支援部隊到着しました！本日より一週間ここに着任しますー！」

「ほんとっ！ありがっとう……!!!」

出会いがしらにすっごい感謝されたんだけど。

「提督、とりあえず自己紹介を。」

「あ、そうだな。ショートランドの提督やってます、……ア、アルバコアです。」

あ、相変わらずかわいい……！

「……おい、神武、次お前だろ。」

「あ……えーつと神武です。よろしく。」

「天龍だ。」

「漣です。」

「大潮です!!」

「三人合わせて!!ガトー級ラヴァーズです!!」「」

ぽかーん。

……向こうさん、あっけに取られてんだけど。

@ @ @ @ @ @ @ @

普通、潜水艦と水上艦は仲が悪い。事実、他の泊地では潜水艦娘は肩身が狭いらしい。

だけどタウイタウイは別。特に漣と大潮、天龍は過剰と言つていいほどに駆逐艦娘が好きだ。なぜかはわからないけど、可愛いと思うらしい。・・・劣情を抱くほどに。

「ねえ、神武。そろそろいいんじゃないの?」

「・・・。うん、大丈夫。」

というわけでアルバコアちゃんを抱えて逃走中。本日のお仕事は終わらせてるから大丈夫らしい。

「ねえ。タウイタウイ泊地の歴史、教えてくれる?」

「いいよー。・・・といっても1946年よりも前のことは知らないけど。」

「1946年だつて!? 戦争終わらなかったのか!?!」

「ううん、太平洋戦争は1942年に終わったよ。大日本帝国の勝利で。私はその終戦記念、という建前で建造されたんだ。」

「・・・どういふことだ? 此処は艦これの世界じゃなかったのか? いやでも・・・」

「艦これ?」

「あ、いえ、何でもないですよ!?!」

・・・ふむ。

「君、誰?」

@@@@@@

「なあ、神武さん。ちよつと聞いてもらえろ?」

「なに?」

「すごく真剣な顔をしたアルバコアちゃん(偽)が問いかけてきた。」

「実は元男子高校生で気が付いたらこの世界でアルバコアになってたっていつて信じてくれる?」

「うん。」

「そうだよな、信じてもらえないよな。つて信じてくれるの!」

「だって私もそうだし。・・・といつても軍艦になった後にこうなったけど。」

まさかのお仲間だったんだ・・・。まあ、正体判明したしいつか。

「・・・というわけで提督やつてます。」

「うん、頑張れ?」

「しどい!」

おっさんに報告すること増えたな・・・。

@@@@

ショートランドは日本の遥か彼方の基地だ。同時にアメリカからも遠い。それが意味するところは・・・。

「コア、コア！大量だ！後で神武に捌いてもらおうぜ！」

「「「「イーツ?!?!」」」」

「食べないよ!?!」

・ ・ ・ 深海棲艦がたくさんいるということだ。

@ @ @ @ @ @ @ @

タウイタウイ泊地から増援が来て四日目。彼女達といろいろ話をした。いろいろされた。そう、いろいろされたのだ。・ ・ ・ ああ、男（元）としての尊厳が。・ ・ ・

「な、なあ提督。・ ・ ・ その、頑張れよ？」

天龍（ショートランド）に心配されるほどに落ち込んでいたみたいだ。・ ・ ・ よしっ

！

「天龍！彼女達を誘って出撃するぞ!!」

「な、なんだ!?!いきなり。・ ・ ・ まあ、いいけどよ？あいつら大丈夫なのか。・ ・ ・ ?」

「向こうの提督曰く練度は高いらしいから、大丈夫だと。・ ・ ・ 。

何か大事なことを忘れてるような。・ ・ ・ 。ま、いつか。

@ @ @ @ @ @ @ @

「というわけでやってきました！」

「鎮守府正面海域！」

「イン！」

「シヨートランド！」

「「「「いえーい!!」」」」

「なんでこんなにテンション高いの……。」

「なんとかしろよ……。一応お前預かりだろう？」

シヨートランド組がテンション低いな……。

「コア、元気出せよ！」

「コア、どこか痛い？」

「元気出すです!!」

アルバコアちゃんを励まそうと詰め寄る三人。触られてあわあわしているアルバコアちゃん。

「大変だね、そつちも。」

「主にお前達のせいだな。」

「この天龍、からい。」

@ @ @ @ @ @ @ @

「アルバコアちゃん、妖精が荒ぶったんだよ。」

「どう荒ぶったらサブ島沖まで流されるんですかねえ!!!」

サブ島沖・・・作戦名：第一次サーモン沖海戦の舞台。メタると5―3。

「どうやって帰ろう・・・。」

「それ以前に生きて帰れる気がしない・・・。」

私が思うに、アルバコアちゃんは大丈夫なんだよね。駆逐艦と軽巡だけなんとかすれば、向こうに対潜能力あるやつはいないから。海の底からくるくせに水中装備がないっていうのはおかしな話だけど。問題は天龍（ショートランド）だ。彼女は最近こちらに来たばかりで、このなかで一番沈む可能性が高い。さらに言えばうち水雷つ娘もフラタ相手とかになると厳しい・・・しようがない、奥の手だけど。

「皆、私に乗ってく？」

@@@@

「はっはー!!快速快速ウ!!」

というわけで本体を召喚し、ショートランドへ帰っています。

「これ、今どのくらいでてるの?」

「60knぐらいかな。」

「はあ!?!」

「甲板に出るとたぶん危ないよ。」

時々深海棲艦を沈めながら、基地に戻るとそこには……。

「ヲツ!」

「提督、ボーキサイトがなくなったのです!」

……。

「アルバコアちゃん、いやショートランド泊地臨時司令官、どういうことか説明してもらえる?」

「な、なはは……。」

@ @ @ @ @ @ @ @

「一週間ありがとうございました!」

今日はタウイタウイに帰る日。え?ヲ級?報告書を書くように言っておいたから大丈夫じゃないかな?なんでも私達がここに来る前から飼ってたらしく、危険性はほぼないと判断できるので海軍本部からも許可が下りるだろう。そもそも提督が潜水艦だし。

お見送りにはこの泊地の5人が来てくれた。アルバコア、電、天龍、任務娘、そしてヲ級。

「またいつか困ったらうちの提督に言ってみて。たぶん、なんとかしてくれると思うから。」

「はい！支援のお手紙くれたときには惚れちやいそうでした！」

「てはだしたらだめだよ？しりあいをわたしはうしないたくないからね？」

「はいいいいいい！！！！」

そんな感じでショートランド滞在は終わったのである。

@ @ @ @ @ @ @ @

「提督、報告書なのです。」

「ん。．．．、これは!？」

燃料1200

弾丸0

鋼材1230
ボーキサイト0

振り返り。

一話

・神無月武・・・覚えてますか？主人公の名前です。

・「今日は白か」・・・黒の紐・・・もとい、黒の日もあつたり。

・進水式で祝砲・・・感想でもツツコミ頂きました。諸外国への威嚇目的の式典ですから。進水、竣工はすでに終わっています。

三話

・Maiden Voyage・・・処女航海のこと

・「神武さんの祝砲は危ない」・・・副砲でも危ない。

四話

・山城・扶桑↑運10・・・改装前は5

五話

・「あれ？もう沈み始めてる・・・。」・・・体重考えらうわなにをやるやめ（ry

・神武さんとひたすら戦闘訓練・・・残機∞、即死確定という無理ゲー。

六話

・「25mmは黙ってる。」・・・おっさんのもっと太いよby神武

・正規空母も大きい・・・瑞・・・鶴? 「全機爆走!」

・「PADでも着けたら?」・・・最重要区画へバイタルパートです、わかります。

七話

・円を六等分して互い違いに黒く塗ったマーク・・・核マーク

八話

・敵艦の全滅をもって・・・完全勝利とかバルチック艦隊の日以来。

九話

・持たされたソナー・・・神武さん、自前の使おうよ。

・「全部fallagshipだつて」・・・どこの5-3ですか!?

十話

・「おいお前等! 困んでやんぞ!」・・・どこのチンピラ。しかし何をするつもりだったのか、気になる。ナニでしょうかね。

・両舷併せて魚雷150発以上、大型爆弾50発以上・・・神武一隻沈めるので国家経済が傾きそうだ。そしてそれが二隻。

・「神武さんはまともな人だと思つてたのに・・・」・・・まともです。

・私と崇神と同じ強さだ。・・・威圧だけはね。ド級さん、神武に一对圧倒的多で挑

んで損傷同じっていう。

十一話

・私と崇神と赤城さんと加賀さん。私達四人が泊地に与えている影響について話し合うことになった。・・・この頃はまだ翔鶴・瑞鶴はいませんでした。

十二話

・大和型サイズの戦艦3隻・・・ソビエツキー・ソユーズ級。大和より実は長い。四番艦？お留守番です。

十三話

・「左舷区画ホに直撃!!装甲が一層歪んだそうです!!」「電磁波砲は!」「問題ありません!!」・・・SSM直撃貫ってそれだけって・・・。

・「暗雲立ち込める空に一条の光が差した瞬間であった。」・・・社会主義国陣営は地面が崩れていくようだと言コメントしました。

十四話

・「ねえ、多聞丸？私どうすればいいのかな・・・?」・・・うどんなでも食べたなら?

十五話

・「クマー!!」「・・・ニャー。」「キ、キソー!!」・・・フィルターを外すと「早く起きるクマー」「早く起きるニャー」「早く起きろよ」

十六話

・本日はお日柄もよく、なのです!!
・電っぽいけど暁のセリフ
・単艦で航行とか無謀すぎるよ。
・お前なら大丈夫です。
・私とコンビになってくれるコンビニ
・某電子の歌姫や艦これとコラボしてるお店ですよ?

十七話

・ポツンと改札があるだけだ。
・改札の内側に自動精算機がないんです。外側に入金する機械があるだけ。

十八話

・「排水量7万t級なんですよう?後は...主砲が51cm連装砲なの。」
・神武がいなければこの人がトリでした。

・『金剛選手のところには赤城(横須賀)さんが、榛名選手のところには赤城(呉)さんが、北上選手のところには赤城(舞鶴)さんが、紀伊選手のところには赤城(佐世保)さんが、神武選手のところには赤城(大湊)さんが向かっています。おつと各々の赤城さん壁が乗り越えられませんが!!爆撃をしています。壁を壊した神武選手のところの赤城(大湊)さんはもうすぐ神武選手にたどり着きます!!』
有志の空母Ⅱ赤城

神武

二十二話

・「この砲塔を乗せてあげようか?」・・・五個で大体比叡と同じ重さ。
・そうなる機会はまだまだ先さ・・・このコミュ障をなんとかしないとな・・・な
んとかする前に食べられてますがな。

二十三話

・戦艦3隻・・・アイオワ級戦艦。アイオワ、ニュージャージー、ミズーリの3隻。史
実より早く建造されたがために沈むことに。妹のイリノイとケンタッキーは日本と仲
良し。ウイスコンシン?どっかで沈んでるんじゃないかな?

二十四話

・「何が年の功よ!?!あなただって49歳のおばあちゃんでしょうが!!」・・・さらに前
世分で17程足されます。

二十五話

・「StatesではジンはMonsterと呼ばれてるワ」・・・ロシアや中国、
韓国でジンはという年配の方がびくつとします。

二十六話

・神武EXTRA・・・気が向いたらまた出すかも。

・『キリク・・・シマ。何が起きている?』・・・コンゴウよ。一瞬間違えただろ。
二十七話

・「どうも始めまして。給糧艦『伊良湖』です。イナゴじゃないよ、イラゴだからね!
!・・・ってあんたは!?!」・・・給糧艦を建造できるとか・・・うらやま(r y

・超々々々々弩級戦艦の殺気を浴びたのもこの二人で、後にどんなものにも恐れを抱くことがなくなったという。・・・この二人、結婚しました。

二十八話

・「冗談でも本当でもおっさんに手を出す(物理)ならお前を壊す。」・・・性的なら許す。by神武

・『艦隊コレクション〜タウイタウイ泊地編〜R18指定』・・・ほしい。神武ルートはデレるまでは大変だがその後はかなり楽。・・・偶に致命的な選択肢があるけれど。

二十九話

・そして高波が発生した。・・・あらかじめ高波の予測をしておこうというものでした。

作戦概要。

．．．暗い．．．

．．．．．あれ？．．．

．．．．．ここは．．．．．どこ？．．．

．．．．．どんどん．．．．．しずんでいく．．．．．

．．．．．なんで？．．．．．なにが．．．

．．．．．おっさん．．．

@@@@

最初に沈んだのは電ちゃんだった。電磁波砲や56cm砲を撃ちながらの砲雷戦中、艦橋にボロボロになった電ちゃんが現れたのだ。

「後は．．．」

「電ちゃん、大丈夫!？」

電ちゃんの衣服は破れ、艀装も歪み、その顔は苦悶に満ちていた。

「神武さん・・電は・・・」

「沈むのか。」

「司令官さん・・はい。今左舷に32・・33度ぐらい、傾斜していつ!?!?・・るのです・。」

その時艦内通信が入る。

「司令長官!電より乗務員の退避を確認、全員収容しました!」

「電、沈んでいきます!」

外を見れば傾き、徐々に水中へと没していく電の姿。それと同時に電ちゃんが足から光の粒子となって消えていく。

「待つて!まだ曳航すれば!」

「無理なのですよ、神武さん。それよりも皆をつ!?!?・・よろし・・くお願い・・するの・・です。」

もう肩までしかない電ちゃんをつかむ。けれどつかんだ先から消えていく。

「今度生まれるときは、もっと平和な世界がいいな・・・」

「電――――!!!!」

ついに電ちゃんの全てが光となって四散していった。そして今度は暁と雷が現れる。

「私達も沈むわ。」

「響のことを頼むわね？あの娘、本当はさびしやがりだから・・・。」

「暁、雷!!ダメ、いけないで!!」

「司令長官!!暁、雷、沈みます!」

「暁と雷の一部乗務員、収容完了!!」

「こんな所で沈むの、いやだよお・・・」

「司令官・・・どこ・・・?もう声が聞こえないわ・・・」

「暁!?雷!?そんなっ!」

私は初めて死を知った。

@@@@

タウイタウイ泊地・司令官室

司令官室にはこの基地選りすぐりの艦娘達が集められていた。

「さて、君達に集まってもらった理由だが・・・大淀。」

「先日出現した戦艦神姫の居場所が明らかになりました。」

引き締まった空気の中、普段任務娘と呼ばれている大淀が説明を始める。大きな机の上に広げられた地図にはタウイタウイ泊地周辺が書いてある。大淀はその地図の一点を指差す。

「ここ、サンギへ諸島のシアウ島です。ここに深海棲艦による泊地が造られていると、報告が入っております。その中に戦艦神姫と名乗ったあの艦がいたとのことですよ。」

「君たちにはここを制圧してもらおうことになる。旗艦は崇神、お前だ。」

「・・・任せて。」

「本来こういうことはやってはならないのだが・・・戦艦神姫に会ったら崇神以外は逃げる。」

艦娘の纏う空気が不満げなものへと変わる。

「・・・提督は私達には勝てない、そう考えているのね?」

「ああ。かつて乗っていたからこそわかる。神武型を沈めることができるのは神武型しかない。あの戦艦神姫が応神と同一だったならば、君たちでは無理だ。それに、他の深海棲艦もいるんだぞ。」

司令官室が暗い雰囲気へと変わる。今ここにいるのは崇神、北上、大井、金剛、比叡、山城、扶桑、赤城、加賀、蒼龍、飛龍、翔鶴、愛宕、高雄、矢矧、伊19、島風、電、暁、雷、響の22隻。普段ならば一つ基地を攻略可能な戦力だが、相手には戦艦神姫がいる

ので崇神はその対応をしなければならぬ。そしてもし神武が深海棲艦化していた場合（今回は望まれているが）、変化したであろう戦艦神姫を倒さねばならないのだ。そう、下手すれば一隻でこちらを壊滅させかねない敵を。

「他の艦娘は君たちをシアウまで送る護衛任務につく。そして君達は崇神を戦艦神姫に送り、かつ周辺の敵を近寄せないようしなければならぬ。そして崇神、君は戦艦神姫を倒せ。神武と思われるほうだけでいい。」

「・・・倒しても深海棲艦のままだったら？」

「連れて帰れ。それが無理ならば撤退せよ。これで作戦の概要説明は終了だ。何か質問は？・・・ないようだな。では詳しい説明に入る・・・」

@@@@

国外において神武型程有名な日本戦艦はそういない。その大きさ、堅さ、速さ、そして攻撃力。全てでギネス記録に乗ったこともある（速さ以外は未だ破られていない）。ドレッドノート級にはもはやおさまらない、とZ（ジーンムの頭文字）級が新たに作られたほどである。かつて敵対した国はこの艦・名前がトラウマとなっており、また現友好国もこのを敵艦として想定して戦力を整えていたりする。

この艦の最も有名で恐れられていたのは、その不沈性だろう。どれだけ火力があろうと沈めてしまえば関係ない。この艦の建造当初、いやしばらく諸外国はそう考えてい

た。しかし第三次世界大戦時にその恐るべき耐久性があらわとなる。そもそも当たらなかつたのだが、魚雷数十発を受けても傾斜すらせず、爆弾も対空火器に多少の損害を与えるだけ、SSMは電磁波砲の影響で当たる前に爆発、当たっても目立った損害なし。これこそが本当のドレッドノート。

当時の英国の新聞にもそう記述されている。しかし、旗艦がそれだけの攻撃を受けるということは護衛艦も同量以上の攻撃を受けているのだ。しかし、旧型艦の多かつた日本海軍の駆逐艦・巡洋艦にそれを受けきれぬ耐久力は持ち合わせていなかった。毎戦、駆逐艦や巡洋艦を失い神武、空母だけが帰ってくるということが続いた。この事実は彼女のメンタルに大きな影響を与えた。

@@@@

シアウ島・深海棲艦泊地

「お姉様？起きてくださいませ……。」

ん？こは……

「こは私達の基地ですよ。」

基地……？

「艦娘とかいう敵から身を守るための基地ですわ。」

艦娘って……？

「艦娘はかつての私達の仲間の姿・名前を騙っている敵ですわ。倒さなければならぬ敵。この前は電とか名乗っている輩がいましたわね……。」

電ちゃんの名前を騙っている奴がいるの……？

「ええ。そして崇神、二番目のお姉様を騙っている者もおりましたわ。」

崇神を……許せない。

「ですが彼女達を倒せば、本当の彼女達が現れるのです。そう、彼女達は囚われの姫。お姉様はそこから助け出す王子様といったところでしょうか。」

……そう。……ところであなたは？

「私はお姉様も知らされていない、神武級三番艦、応神ですわ。」

……そう。

「応神、行こう。皆を助けに。」

「はい、神武お姉様。」

白い髪をたなびかせ、その姉妹は動き出す。片方は黄金のオーラ、もう一方は虹色のオーラを纏いながら。

ばわー。

馬力：①仕事率の単位。「丸太などを巻き上げる装置につないだ馬の仕事率に由来」
 A：仏馬力。735。5W（ \parallel 75kgの物体を1秒間に1m上げる仕事率）。

B：英馬力。745。7W（ \parallel 550ポンドの物体を1秒間に1ft上げる仕事率）。

②「仕事をする」精力。活動力。「―が有る／―をかける」
 ③荷馬車。「―屋」

@@@@@@

タウイタウイ泊地・食堂前

「おらあ！誰かかかってこいやあ!!」

机の前に座って叫ぶ最上。机の横には『勝つたら間宮さんここで最上がおごります。一回百円（作者注：現代の価値と同じとしてください。）』と書いてある紙が張ってある。そして周囲には倒れ伏す艦娘達。

「な、なけなしの百円があ．．．!」

「手が、手があ!!」

行われているのは、そう、腕相撲だ。

〈時間経過〉

艦娘達の山が増えた頃、一航戦・二航戦の四人が通りかかった。

「あ、腕相撲。．．．あれやってみませんか?」

「勝手にしなさい。」

「面白そうですよ?」

「そう。」

「勝ったら間宮さんのところでおごつて貰えるのね．．．、アイス食べたいなあ．．．。」

「やりましょう。鎧袖一触です。」

「チヨロっ!!」

チャリンツ!!

「赤城さんのためにも勝たせてもらおうわ。」

「僕金欠だからさ、負けるわけにはいかなんだよね。」

二人が互いの手を握り合いひじを机につけると、どこからともなく猫を連れた少女

(以降猫娘とする。)が現れ、両者の手を包み込む。
『れでいー……(ぎ)ー!!』

猫娘が手を離れた瞬間に勝負は決した。

「加賀さん、よっわ!」

「!?これは!?……ふはははは!!奴は我ら四天王の中でも最弱の存在!!」

「加賀つたら使えないわね。もういいわ、私がいく。巡洋艦に負けるなんて、ね。」

「あ、赤城さん……!!……二航戦後で絞める(ボソツ)」

「あは、あはははは……飛龍(蒼龍)のせいよ!」

赤城対最上の結果。

最上の勝ち。

「そ、そんな……ありえない。」

「慢心、ここに極まれり……。」

「くっ・・・このまま最上に好き放題させるって言うの!?!」
「誰か、誰か奴に勝てる娘は!?!」

魔王のように高笑いする最上と嘆き悲しむ艦娘達。そこに現れたのは・・・。
「・・・皆、何やってんの?」

「何かの勝負ですか?」

神武と翔鶴だった。

「よっしゃこれで勝つる!!」

「最上なんて一捻りだ!!」

「げっ・・・やば・・・。」

かくかくしかじか

「腕相撲ですか・・・。」

「まったく、何やってんだか・・・。」

「お願ひします、神武さん！」

「私達の仇、討ってください!!」

「こないで〜こないで〜」

「え〜めんどい。翔鶴、任せた。あ、これ私の分ね。」

チャリンツチャリンツ!

「そ、そんな・・・翔鶴さんが・・・!?!」

「正規空母四人が既に負けているのに・・・。」

「だめだ・・・もう終わりだ・・・。」

「よっしゃ勝てるぞ!!」

@@@@

「では、私と神武の分ということで・・・頑張りますね?」

「はっはっは!! 154226馬力の真髓を見せてやろうじゃないかあ!」

『れでいー・・・(ー)!!』

猫娘の合図で始まる。

「.....(ニ)ニ」

「ふぬぬぬぬ・・・!!」

若干最上が優勢で、徐々に傾きつつある。やっぱり駄目かと皆が諦め始めたその時。

「翔鶴ー。さっさと終わらせて間宮のところに行こうよ。」

「もう神武つたら。でもそれもそうですね。」

バチンツ!!

「ぐあ!!ま、負けた・・・!?!」

あっさりと翔鶴が押し返し、そのまま勝負がついた。

「私はアイスをお願いしますね?」↑160000馬力

「じゃあ私もアイスで。さ、最上、おごってもらおうよ。」

「・・・・・・。」↑真っ白に燃え尽きた最上。

固まった観客の中、最上を引きずって神武と翔鶴が悠々と去っていった。

突入。

崇神、北上、大井、金剛、比叡、山城、扶桑、赤城、加賀、蒼龍、飛龍、翔鶴、愛宕、高雄、矢矧、伊19、島風、電、暁、雷、響の突入部隊は日向の後部甲板にいた。

現在、日向上の突入部隊と本体を顕した伊勢、日向、榛名、霧島、それから突入部隊輸送隊の護衛に加古、古鷹、青葉、衣笠、五十鈴、由良が並走して、シアウ島へと向かっている。セレベス海盆を一直線に通過して向かえば700km程なのだが、やや危険と考え一度キアンバを経由することとなった。この経路によって距離は倍近くになったが、キアンバで一度補給を受けているので問題は無い。

「・・・赤城、偵察機を飛ばして？」

「わかりました。」

現在位置はサンギへ島の東。シアウ島は東に湾があるため東から接近することとなる。

「では私達は作戦通りここで待機している。」

「ありがとね。」

突入部隊輸送隊がタフナに向かったのを確認すると、金剛が声をあげる。

．．．確か、倒さないと助けられないんだっけ？

「ええ．．．まずはアウトレンジで砲撃を食らわせてあげましょう。それでも近づいてきたら、お姉様は一度ここに戻ってきていただけますか？」

うん．．．わかった。

「おそらく崇神お姉様の名前を騙る者が来ると思いますので、神武お姉様にお任せします。」

．．．応神は？

「私は他の艦娘を解放してきますわ。私は未成艦で戦闘経験はないですが、あの程度蹴散らしてやります。」

．．．そう。頑張ってね？

「はいっ!!」

@@@@

砲撃をやめ、応神と約束した場所に戻って待機していると、足音が聞こえてきた。現れたのは崇神そっくりな艦娘。ソレはいきなり撃ってきた。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

「神武、おとなしく撃たれて？」

「お断り、するね！」

崇神の姿と声を真似て私を騙そうとする艦娘。でも私は騙されない。

「・・・小沢提督も待つてるよ。」

「!?その名前を出すなあ!!」

何かがはじけたような気がした。

@@@@

その頃外では。

「沈みなさい!!!」

「こいつ、大したことないネ〜!!」

「うどの大木、なのです。」

フラ神姫の攻撃を軽々と避けながら艦娘達が雑魚を倒していた。

「当たりなさいよっ（泣）!!」

フラ神姫からは涙があふれ、タウイタウイ泊地にやってきたときの威圧感は消え去っていた。・・・俗に言うカリスマ☆ブレイクである。しかし、何故こうも当たらないのかということ。

「実戦経験0のやつに負けるわけにはいかないネ!!」

・・・応神も自覚していたように、未成艦ゆえに戦闘経験がまったくないのからだ。ど

れだけ性能が良かろうと操るものが駄目ではどうしようもない。世の中の普遍的真理である。

@@@@

崇神と戦艦神姫（虹）の闘いも佳境に入っていた。お互い満身創痍になり、肩で息をしている。崇神の性能のほうが良いのだが、深海棲艦化するとスタミナが増えるらしく闘いは互角となっていた。

「・・・今あるのが最後の一発。」

「残念ながら私もだよ。何？これでけりつけようってわけ？のった!!」

お互いに、早撃ちするかのごとく砲身を相手の顔面に向けて撃つ。

「実はもう一発あったのさあ!!」

崇神の砲弾を避けた戦艦神姫（虹）が、崇神に更に砲弾を撃つ。

「・・・やると思った。」

「なん・・・だと・・・!?!」

更に撃たれた戦艦神姫（虹）の砲弾を避けた崇神が、隠していた砲弾を戦艦神姫（虹）に撃つ。思いもよらぬ攻撃に戦艦神姫（虹）は倒れ伏す。そして光ったかと思うと、神武が気を失った状態で現れた。そして崇神が神武を抱きとめる。

「・・・おかえり。」

@ @ @ @ @ @

外へ出た崇神（with神武）が感じたのは、むせるほどの硝煙の匂い。海には大量の深海棲艦が沈みかけていた。

「Oh！崇神！無事だったネ！．．．助けられたみたいね。」

「．．．うん。その娘が？」

「ええ。フラ神姫を倒したら現れたの。」

金剛は一人の少女を抱えていた。少女は神武や崇神に瓜二つな見た目をしていて、一部以外。

「．．．ご愁傷様です。」

「．．．ツプ！い、言わないでよ！我慢してたんだから！アハハハハハハ！！」

その少女には、そう——おっぱいが無いのだ。恐らく未成年艦であるからだろう。しかし、これから戦艦として生きていくにはつらいに違いない。だが、そんなことも露知らず只幸せそうな顔で少女．．．応神は寝ていた。

「．．．かえろう。」

「そうね。．．．皆サーン！！帰りますヨ！！Follow me！！」

演習。

ソビエツキー・ソユーズ級・・・全長271.5m、全幅38.92m、満載時排水量6412t、最大速度28kn、主砲50口径40.6cm三連装砲のソ連製戦艦。一番艦「ソビエツキー・ソユーズ」は1943年、二番艦「ソビエツカヤ・ウクライナ」は1944年、三番艦「ソビエツカヤ・ベロルーシヤ」と四番艦「ソビエツカヤ・ロシア」は1945年に竣工している。1960年頃に冷戦の激化に伴いミサイル発射艦へと全艦改装された。

1963年、「ソビエツカヤ・ベロルーシヤ」と「ソビエツカヤ・ウクライナ」が日本の戦艦「神武」によって沈められる。「神武」に搭載されていた電磁波砲の影響による、ミサイル発射塔内での誤爆や56cm砲弾にも数発耐えたが、しかし沈められた。

1964年「ソビエツカヤ・ロシア」が日本の駆逐艦六隻による集中雷撃により轟沈。「ソビエツキー・ソユーズ」も同年、「神武」に中破直前まで追い込むというこれまでにない被害を与えながらも轟沈した。

@ @ @ @ @ @

深海棲艦に通常兵器は効かない、倒せるのは艦娘のみ。国際的な一般常識だ。これに

は様々な理由があるが今は割愛させていただきます。

この艦娘、得るためには二つの方法がある。一つは深海棲艦を倒すこと。もう一つは深海棲艦と同時期に現れた妖精さんに造ってもらうことである。だが、この妖精さん、20世紀前半の艦船しか造ってくれないのだ。また、倒された深海棲艦から出現するのも同時期のものばかり。これが意味するのはかつての列強国しか深海棲艦に対する手段を持ち得ないということ、だ。

この事から旧列強国とその他の国により会議が開かれ、旧列強の各々の守備範囲を決めることとなった。

東南アジアは日本、オセアニアは日米合同、南米及びアラスカ以东は米国、アフリカ及びインド辺りまでの西アジアをヨーロッパ諸国。そして東アジアは——
——ロシアだ。

中国海南省海南島。そこにあるロシア海軍海南泊地にある艦娘姉妹が着任した。

「やったあ!!これで勝てます!タウイタウイのハーレム提督に勝てます!!」

@ @ @ @ @ @ @ @

タウイタウイ泊地

「日露合同演習?」

「ああ、割と近くにロシアの基地があるんだが、そこから合同演習のお誘いが来たんだ。といっても毎年どちらからともなく誘うんだが。ちなみにあそこはハワイと同じく同じ世界だぞ。」

「へえ。あ、これが詳細？」

要約

『久しぶりですゼロ。一年前は負けましたが、今年は勝ちます。首を洗って待つてなさい。今年の制限は戦艦4、重巡2、軽巡3、駆逐5、空母2までとします。エリーヌ』

「いつもこんな感じなの？」

「いいや、例年は総排水量で制限していた。だが、向こうも制限されたくないような艦が来たんだろうな。・・・十中八九この戦艦4だと思うが。」

「ふうーん。で、このエリーヌってのが向こうの提督？」

「ああ、そうだぞ。ブロンドの美人さんなんだが如何せん胸がないのがな・・・残念だ。」

「それ、本人に言ったら駄目だからね？」

「はっはっは!!もう遅い!!」

@ @ @ @ @ @ @ @

演習当日

「じゃあ点呼取ります。あ、旗艦は私ね。じゃあ崇神！」

「・・・はい。」

「金剛さん！」

「いるヨー！」

「比叡!!」

「はい！」

「あたごん！」

「は〜い。」

「か、高雄!!」

「はい!!」

「北上さん!!・・・今更だけど軽巡枠で出れるの？」

「はい。・・・魚雷をたくさん積んだだけの軽巡だから大丈夫・・・たぶん。」

「大井さん！」

「はいっ！」

「やはぎん！」

「はい！」

「第六駆逐隊！」

「「「は〜い！」」」

「ぜかまし！」

「おうっ！」

「翔鶴！瑞鶴！」

「はいっ！」

「おつきーん？点呼終わったよー!?」

「よし。今回も互いの紹介などは抜きにしてまず出会ったら即戦闘だ。終わったたら風呂に入って向こうと一緒に飯だから奮闘しろよ？何か質問は？」

「あの・・・提督？それは食べ放題ですか？」

「そうだ。」

何故だろう・・・翔鶴と赤城さんが重なって見える・・・。

@@@@

海南島沖・西沙諸島

ブーン・・・!!

「ロシアの国旗を身につけている艦娘を発見しました！11時の方向、距離およそ3km！」

「・・・ん。こっちの探信儀でも発見。・・・艦種不明7人。」

「7人？お互い16人までだから・・・分けたのかな。」

向こうが制限してきたんだし、16人未滿つてことはないはず。

「とりあえずその7人を皆で倒そうか。」

「分けないの？」

「分散させないほうがいいかな、と……つて高速移動体敵艦より発射!? 崇神! パルス弾
! 6 . . . 5 . . . 4 . . . 3 . . . 2 . . . 翔鶴避けて!」

「え? きゃあ!!」

ドオオオオオオンン!!!

向こうさんの2人から発射された噴進弾。私と崇神の電磁バルス弾によつてほとんどが誤爆した。けれど爆発しなかった一発が翔鶴に向かい、翔鶴が避けたにもかかわらず爆発した。いや、避けようとしたら爆発した、かな?

「翔鶴姉!! 大丈夫!?!」

「ええ、何とか。小破ですんだわ。 . . . なんで私が . . . 。」

速度はおよそマツハ9、避ける前に爆発したから近接信管あり、爆発の大きさに . . .
「ステイクスだ。だったらあの2人は . . . 。」

『向こうも制限されたくないような艦が来たんだろうな。 . . . 十中八九この戦艦4だと
思うが』

ステイクス・・・制限されたくない!!大きい・・・戦艦4・・・ロシア!!ソ連・・・

・・・なんかすごい心当たりがあるんだけど。

「皆、私も向こうさんの正体、わかったかも。翔鶴、第六駆逐隊、愛宕に高雄は交戦したはずだけど・・・ソ連の戦艦といえよ?」

はっと思いついた娘達の表情が険しくなる。

「・・・神武。教えて?」

「・・・ソビエツキー・ソユーズ級だと思う。1950年以前竣工で、噴進弾装備に改装された戦艦4姉妹はあいつらだけだったはず。」

先ほど名前を挙げた娘達以外からは皆中国組(W・W・IIIで対中国方面に出撃していた)だから知らないのかちんぷんかんぷんといった感じだ。

「・・・とりあえず戦艦つぼいのと戦おうと思わないで。南方棲戦姫とは比べ物にならないよ。崇神はひたすらパルス弾と電磁波砲撃つてて。他の娘は探信儀とか使えなくなるから各自目測で回避及び砲雷撃!」

@@@@

神武たちから5時の方向2km

「あれ?レーダーがおかしいよ?」

「もう、駄目なのです……。」

電ちゃん、大破。そして暁、雷、大井、矢矧、比叡と大破しないまでも次々に被弾していく。

完璧に前後で挟まれている形だ。……ああ、もう!!

「崇神!! 皆を守りながらこのまま向かって殲滅!」

「……神武!?! 何を!?!」

「私は後ろを片付ける!!」

単身を翻して後方に向かうと、銀髪の戦艦っぽい姉妹とその他5人。心なしか皆怯えているような気がする。

「また会ったね、ソユーズ、ロシア。」

「ここで会ったが百年目だ。今度こそ勝たせてもらう。」

「……7対1で勝てると思ってるよ……の?」

「嘸んでるし、声と足が震えてるよ?」

「……うるさい。」

戦闘開始

@ @ @ @ @ @ @ @ @ @

「……まったく神武は……」

「みぎや!？」

「……いつもいつも……」

「むぎや!？」

「……人の気も知らないで……」

「は、はにゃ〜!？」

「ねえ、大井つち……」

「何?北上さん。」

「あたし達必要なかったよね?」

「ハイパーズは台詞があるだけまだましなのです。アレを見るのです!」

『大丈夫デースよ比叡!例え出番も台詞もなくアルペジオでは金剛型の中で一人だけ存在すら知られていなくても、比叡のことはちゃんとお姉ちゃんはわかってマース!!』

『……』

『あれ?ヒエー?』

「……」

「……あなたで最後。」

「うわーん!!モンスターの妹はやっぱりモンスターだったー!!!そげぶっ!!」

@@@@

ソビエツキー・ソユーズ、ソビエツカヤ・ロシアと神武の戦いも決着が付いていた。

「またお前を倒せなかったか……」

「……悔しい。」

「勝ったけどこの被害じゃなあ……」

神武中破。ちなみに軽巡及び駆逐艦の末路とは。

回想開始

「食らえ!!」

「駆逐盾!!」

「もぎゃ!!?」

「……斉射!!」

「軽巡盾!!」

「ふあっ!!」

回想終了

前々からだがこの戦艦、なかなか外道である。

@ @ @ @ @ @ @ @

戦闘終了後の食事は海南泊地で行われた。

「ソ連艦娘がいつぱい・・・!!」

「あの、ジロー?」

「・・・なんだ、エリーヌか。」

「なんだとはなんですか、なんだとは・・・。あの娘達がいって負けるとは思いませんでした。彼女達はいったい何者ですか?」

「ん? ああ、エリーヌはこの世界のことしか知らなかったな。彼女達・・・神武型は世界最恐の戦艦と言われててな、ソビエツカヤ・ロシア以外は神武に沈められているぞ。」

「来年からはあの娘達は禁止で。」

「おいおい、そりやないだろ。」

「だめつたらだめです!!」

「やつほー、ウクライナにベロルーシヤ。お久しぶりー!!」

「………(ガクガクブルブル)」

「あまり妹達を怖がらせないでくれ。」

「ソユーズは怖くないの？」

「怖い……が、いつかお前には勝つからな。妹達ほどじゃないさ。」

「ふうーん。まあ、いつでも相手になるよ。……そういえばウクライナにベロルーシヤ、崇神と応神……あ、私の妹ね、が会いたいつて言つてたけど、どうする？」

「い、いえ、結構です!!」

@@@@

ちなみにこの食事会。毎年負けたほろろが支払うことになっていて。

「な、なんですかこの額は……」

!!!!!!??

えっちいのはよくないとおもいます。

同人誌・・・一・主義・傾向・趣味などを同じくする人たちが共同で編集発行するもの。

二・最近ではエロ本の代名詞。もちろんえっちくもないのもありますよ？

@@@@

神武という艦娘は基本的には何事にも寛容だ。駆逐艦娘がこっそり口級を飼っていても見て見ぬ振りをし、妹が自分のストーキングをしても咎めない。小沢司令官が艦娘のさらしや下履き、その他下着をクンカクンカファンファンハスーハスーハーしてもスルー。しかしそんな彼女にもやはり個人的に嫌なものがいくつかある。

自分が出てくる同人誌だ。

といっても小沢司令官×神武（逆も可）は許せるらしい。しかし名も知らぬ司令官×神武や翔鶴×神武などといったものは嫌なのどうか。アウトレンジ・不意討ち・会話中断攻撃上等としているが意外にも純粹なのである（むしろ純粹だからこそ勝てば官軍という精神なのかもしれない）。

そういうわけで神武が登場する18禁同人誌は貴重でプレミアなものなのである。何

しろ他基地にはいない上に、描けるのはタウイタウイの秋雲だけ。しかもその秋雲は神武にブラックリスト指定されているため、なかなか描けない。コミケでは用意した200部が数分で完売する。タウイタウイにいるため本土に来ることはほとんどない神武だが実は人気があるのだ。その理由は……

ウオーシツプ娘。

小沢司令官が資材を得るために組織したアイドルグループである。その歌唱力、一糸乱れぬ踊り、目を引く容姿で小さなお友達から大きなお友達にまで親しまれている。しかしこのアイドルグループ、CD、もしくはDVDしか発売しないため個人個人の情報が神秘に包まれている。しかも彼女達は軍艦でありその情報を探りにいくのは国家機密に手を出すのと同義。故に只与えられるのを待つしかないのだ。そこに同人誌という媒体で情報が出てくればどうなるか。……そういうことである。更にウオーシツプ娘。の他のメンバーは横須賀や呉、佐世保に行けば見ることができるといつても中身は違うが、バトルシツプの二人はタウイタウイにしかないために、希少価値がついているのだ。

さて、長々となぜこんな話をしたのかというところ……。

「ま っ て よ あ き ぐ も ち ゃ ん」

「待ったら殺されるう!!」

神武と秋雲の追いかっこが勃発しているからだ。

@@@@@

事の始まりは翔鶴の部屋。秋雲は同人誌にする際には被写体の許可を取っている（当たり前のことです）。ちなみに神武に関しては小沢司令官が出している。そして今回のコミケに出すものは翔鶴×神武ものだったので、小沢司令官に見本をみせた後翔鶴の部屋を訪れたのだ。

「翔鶴ー？この前言つてた同人誌なんだけどきー見本できたからちよつと見てー？」

「ちよつ・・・今は・・・！」

何とも運の悪いことには翔鶴のところには遊びにきていた神武がいたのだ。しかし神武、同人誌というだけではまったく怒らない。自分が出なければ問題ないのだ。幸いなことに秋雲は翔鶴×神武ものの他に瑞鶴×小沢（瑞鶴に関しては姉の翔鶴が許可を出しました。）や、烈風×流星などを持っていたのでそちらを見せることにした。

「（また後で見せにくるわー）」

「（ええ。待つてます。）」

「うわ、これえっちい・・・恥ずかしい・・・。」

「あなた、提督とそれ以上のことやってるでしょうが。」

どうにかこの場はなんとかあった。そう油断していたからだろうか、一旦ここから離れようとしたその時、足がもつれ秋雲は転んでしまった。バサツと同人誌が散乱する。

「いったたたた……。」

「秋雲大丈夫？……ん？これは？」

『とある鶴な姉とZ級な姉く世界最強も布団の中では……』

バツ！

「な、なんでもないよ……？」

とつさに神武からひつたくるがもう遅い。

「あ き ぐ も ち ゃ ん ？」

「逃げるが勝ち！」

そんな感じで追いかけてこが始まったのだ。しかし、圧倒的に速度が上の神武が何故捕まえられないのだろうか。……もちろん、邪魔をする者がいるからだ。

「ここは通しませ、きやあ!？」 大破！

ある者は「この同人誌の売り上げの一部はボーキサイトを買う資金になっているんだが」と囁かれたり。

「止まって神武！」

「しようかく。あなたもきょうはんでしょ？あとで・・・ふふふ。」

ある者は同人誌の売り上げのいくらかを貰う予定だったり。

「待て神武！」

「どいておっさん！そいつにおしおきできない！」

ある者は秋雲のファンだったりと、邪魔する者が多数いるのだ。

こうして秋雲が様々の人の助けを借りて、生命の危機を乗り越え発売した同人誌は、最終的にオークションなどで万単位の値段が付けられるという。

#####

未成艦娘・・・その基地の歴史における未成艦が艦娘と化したもの（例えばとある基地では天城型巡洋戦艦四姉妹がいるが完成しているので未成艦娘ではない）。横須賀の天城やラバウルの紀伊、タウイタウイの応神など、また国外ではハバロフスクのソビエツキー・ソユーズ級やカリフォルニアのケンタッキーなどがある。未成ゆえに戦闘経験がなく育てるのに時間を要する。また、体も幼かったり何かしら残念だ。しかし強力な艦娘が多いためきつと役に立ってくれるだろう。

@@@@@

「さあ、私達といっしょに活動しましょう？スリムクラブに入って！」

「ちなみにどなたが・・・？」

「私こと夕張、RJ、瑞鶴……」

「憐憫を誘う面子ですわね……。すみませんがお断りさせて頂きますわ。ナイチチクラブでしたかしら？入ると負けな気がしますの。」

「何がナイチチクラブよ!?あなただつてないじゃない！ぺったんこ！絶壁！まな板！フラット装甲！」

「……ブーメランですわよ？」

「……うわーん!!」

「まったく……。貧乳は希少価値でステータスだというのに。」

#####

名前……軍艦の名称には一定の規則がある。例えば戦艦の場合、日本を表す言葉が旧国名となっていた。扶桑（中国の言葉で日本の異称）や山城（京都南部の旧国名）が
いい例だろう。

@ @ @ @ @ @ @ @

『……でも私とか崇神の名前って歴代の天皇陛下の御名だよね？』

「そうだよ。先の大戦が終わった後に、君の名前をどうするか、という会議があつてね。せっかくだから名称の規定を変えようということになったんだ。」

『ほうほう。それで?』

「その会議は御前会議だったんだけど、今上陛下が歴代の御名を冠することを許可して下さったんだ。この大日本帝国を守護してもらえるようになってね。」

『へえー。寛大だねえ。』

「ちなみに君に『神武』とちつけると決めしたのは陛下だから、陛下が君の名付け親だよ?」
『ふあっ?!』

#####

姉妹・・・女のきょうだい。あねともうと。姉妹丼はロマン。

@@@@

とある日のこと。

「・・・神武。」

「なに?」

「・・・私を『お姉ちゃん』って言うてみて?」

「・・・。・・・は?」

「・・・いいから早く。」

「お、お姉ちゃん?」

ぶしやああああ!!

「崇神!?! 何でこんなに鼻血が!?!」

「・・・我が生涯に、一片の悔いなし!!」

「崇神ーっ!?!」

「・・・だ、大丈夫。」

丁度そこを応神が通りかかる。

「お姉様方、何をされているのですか?」

「・・・応神。神武に抱きついてみて。」

「え? えっえ?」

「・・・こう、ぎゅーつと。」

「こうですか?」

ぎゅー!!

「・・・はあ、はあ、はあ、はあ、し、姉妹丼・・・!」

「・・・っ!」

だっ!

ぐわっ!

何かを察して応神を抱え走り出す神武。捕まえ損ない、しかし追いかける崇神。

「あの? 神武お姉様? 何故私を抱えられて走り出したのですか? 崇神お姉様が追いかけて

「てきているのは？」

「今一状況を理解していない応神。」

「長女十三女対次女の貞操を賭けた戦いが今始まるーっ!？」

ケツコンカツコカリ。

婚姻・・・結婚すること。夫婦となること。一对の男女の継続的な性的結合を基礎とした社会的経済的結合で、その間に生まれた子供が嫡出子として認められる関係。民法上は、戸籍法に従って届け出た場合に成立する。

@ @ @ @ @ @

朝起きると、おっさんが工廠でござござやっていた。

「何やってんの？」

「ん？装備類を整理しているんだ。使っていないものは解体しようと思ってな。」

「ふうーん。」

昼食を食べて執務室に戻ると、今度は余所の提督とチャットで罵りあいながらシミュレーションをしていた。

『おまえの覚悟を見せてみろーっ!!』

「捻り潰してくれるー！」

覗きこんだ感じだと海軍本部から支給される、戦略シミュレーションだったけど・・・

あそこまで燃える要素ってあったっけ？

夕方。突然の出撃命令が出た。オリョール海を制圧してこいつっていうもの。

『神武、本艦隊は見つかったか？』

「ううん、まだ・・・あ、発見したよ。」

『そうか・・・。よし、暁の水平線に勝利を刻みつけてやれ!!』

「・・・うん。」

・・・なんか今日はいつにもまして熱いなあ。

夕方七時。太陽が半分程沈んだ時、敵艦の掃討が終わった。

司令官室の支給ベッド（一人用）の中。

「おっさん、今日は何だったの？様子がおかしかったけど。」

「・・・そ、そうか？」

完全に狼狽えている。・・・怪しい。

「・・・今は秘密だ。時がきたら話す。」

「時って？」

「お前の練度が最高に達した時だ。」

なにそれ。

「・・・私、まだ70にもなっていないんだけど。」↑67

「わかってるさ。だが、これははぐらかしているわけではないよ。」

「・・・そつか。ならいいや。」

99になった時にびっくりするのはまたいつかの話。

#####

長門・・・①旧国名。今の山口県の西部・北部。古くは穴門（あなと）。長州。

②山口県北西部の市。青海島や温泉などがあり、観光地。人口4万1千。

③日本海軍の戦艦。基準排水量3万9千トン、40センチメートル砲8

門。1920年竣工、長く連合艦隊の旗艦を勤めた。同型艦に「陸奥（むつ）」がある。

（広辞苑第六版）

@@@@@@

「私が戦艦長門だ、よろしく頼むぞ。敵戦艦との殴り合いなら任せておけ。」

ながもんがあらわれた！

大和達が来ないかと思って建造してみただけど・・・。

「どうしようおっさん！ながもんがきた！」

「落ち着け、まずは駆逐艦娘を避難させるんだ！」

「非常に不名誉な会話がされている気がするのだが……?」
さつと目をそらす。

「まあいいさ。ところで陸奥のやつはいるのか?」

「むつ? 69年生まれだから妖精は造つてくれないと思うんだけど。というか商船だから戦えないし。」

「ん?」

「へ?」

「……長門、陸奥はいない。それから神武、長門が言っている陸奥とは彼女の姉妹艦のことだよ。」

「え? おばあちゃんに姉妹艦いたの!？」

「……ああ、ただ言いづらいんだが……」

「それから先は私が説明しよう。あいつは沈んだんだ……。」
え?

「でも、おっさんが前に大東亜戦争で沈んだ戦艦はいないって言ってたよ?」

「あいつは戦いの中で沈んだのではなく……その、謎の爆沈を遂げたんだ……。」

……へ?

「謎の爆沈?」

「ああ。第三砲塔がいきなり爆発。それから誘爆して沈んだらしい。」
「・・・。」

パンパンツ!!

おっさんがいきなり手を叩いてこのしんみりした空気を変えた。

「さあ、長門が来たんだから歓迎会をしよう。神武、間宮と伊良湖に何か食べものを用意してもらってくれ。ついでに駆逐艦の避難も任せた。」

「待て、何故避難させる!?!」

「おばあちゃん、酔っ払ったら絶対絡むでしょ?」

「大丈夫だ、私のモットーはYes 駆逐! NO! お触りだからな!!」

「アウツツ!!!」

黒き稲妻。

闇汁・・・冬などに、各自思い思いに持ち寄った食物を、灯を消した中で鍋で煮て食べる遊び。また、その煮た物。闇鍋。闇の夜汁。(広辞苑第六版)

@@@@

今日の職務を終えて、夕飯を食べに行こうとすると暁ちゃんに呼び止められた。

「あの・・・神武? その、怒らないでね?」

何かに脅えているような、そんな青ざめた顔で暁ちゃんにそんなことを言われた。

「何を言ってる・・・」

ガツンツ!

後頭部に痛みが走り、同時に意識も薄れていく。そんな中で見たのは錨を振り抜いた体勢でニコニコ笑っている電ちゃんだった。

@@@@

意識が回復すると首から下を縛られてさらに椅子に固定されていた。というか何故亀甲縛り・・・。そして口にはガムテープ。周りには同じ状況になった長門・比叡・青葉・瑞鶴がいた。それから自由の身な第六駆逐隊。

「皆怒ってるわね……。特に神武と瑞鶴の殺気で倒れそう……。」

「まったく……。電のあれはどうかならないのかな……。」

「……そろそろ説明しない？私、もう気絶しそう……。いえ、した方が楽なのかしら？」

「大丈夫なのですよ、暁ちゃん。失神しても叩き起こすのです。」

「ひいつ!？」

一触即発だったその場の空気が一瞬で消え、今度は憐れむ空気が変わる。……うまいね、電ちゃん。というかガムテープはずしてくれないかな……。

「これから皆さんには闇鍋を食べてもらうのです!」

っ!?

「食材は皆さんの姉妹が持ってくるのです!」

「長門のは島風が持つてくるよ。」

「皆は食べるだけよ。」

その食べるのがいやなんですけど!?

「ちなみに人選には理由があるのです。神武さんは『いつも心配かけて浚われたり無鉄砲に突っ込んでいったりと大変。一度痛い目にあってみて。』とのコメントです。」

崇神っ!?

「瑞鶴さんは『まったく、いつも提督の邪魔して。これで懲りなさい。』、青葉さんは『尖閣のことを忘れたとは言わさない！古鷹の仇！』とお手紙が来てます。闇鍋のことを金剛さんに話したら比叡さんに食べさせると言っていましたです。」

・・・。

「どうかしましたか？ながもんさん？響ちゃん、テープ取ってあげて下さいです。」

「わかった。」

ビリッ！

一気にはぎ取ったからかおばあちゃんは痛そうな顔をしている。

「・・・それで何故私まで？恨みをかった覚えはないのだが。」

あ、それは私も気になる。

「えつとお・・・」

「その・・・」

「うー・・・」

歯切れ悪いというか微妙な顔している三人。そしていい笑顔（目にハイライトなし）で電ちゃんが言い放つ。

「ノリなのです！」

呆然としたおばあちゃんにまたテープが付けられた。

@@@@@

「それでは食材の登場なのです！．．．その前に。」

後ろからいきなり目隠しをされた。

「闇鍋が終わるまで皆さんにはアイマスクを付けてもらうのです！」

「ちなみに食べさせるのは潮ちゃんです。」

「ひゃあ!? ごめんなさい潮です．．．あ、あの．．．痛くないようにしますから、ね？」
待て、ナニをするつもりだ。

「では、姉妹の皆さん、食材を投入してくださいなのです。」

ドボン、ドボン、ジュー!! キイアアア!! ニュアアア!! グルガアアア!!!

何!? 何入れたらこんな音になるの!?

「今の出汁の色は．．．うわあ．．．ネイビーグレーなのです。」

聞きたくなかった!!

「ではながもんさんから順番に食べさせていくのです! テープをはずしてあげてくださいなのです。」

ピリッ!!

「ま、待て落ち着け! 早まるな!」

「ええい。往生際が悪いのです。潮ちゃん、やっってくださいなのです。」

「あ、あの、ごめんなさい!!」

「むごっ!!」

.....一瞬の沈黙。

ガタツ!

「あれ?ながもんさん?起きてくださいなのです。」

ペチンペチンペチペチバチンバチンバチバチバチバチ
!!!!!!

「往復ビンタしても起きないのです。」

「電・・・長門は私が運んでくるさ。」

「任せたのです。」

・・・響、逃亡。

@@@@

「さて最後は神武さんなのです。皆居なくなつたので残り全部食べてくださいね?」

っ!?

「ふごごご!!?もごごごご!!!」

「あつ・・・ガムテープをとってあげますね?」

ビリッ!!

痛いっ!!!

.....。

「・・・かくごはできてるといふことだね？」

「キレてる！あれ絶対キレてるわ！どうするのよ、電ア!!」

「ふふ。・・・神武さん・・・。」

「なあに？」

「私達、その、本当はこんなことしたくないんです・・・でもやれつて脅されて仕方なくやってるのです・・・。」

「だれに？」

「その・・・伊勢さん・・・です。」

ふうん。

@@@@

ぞくつ!!

「どうした、伊勢。」

「いや、今寒気が・・・。」

「そういえば第六駆逐隊のやつらに、何か吹き込んでいただろう。何だったんだ？」

「ん？ああ、ちよつとね？」

@@@@

「さて、一つ目逝くのですよ。」

「んぐ!?!」

口の中にもものを突っ込まれるのはかなりつらい。入ってきたのは太くて長くて、でも柔らかい感触。匂いはくさやにチヨコ、その他混ざった感じ。味は最悪。甘いような辛いような、でも苦いような。・・・たぶん味と匂いは出汁のものだから・・・。

「太・・・巻・・・き・・・?」

「・・・正解なのです。次逝きましよう!」

「むぎゆつ!?!」

一発目からきつかったけれど、また危ないのがきた。今度はぶよつとした感触で・・・うん、なんだろう、うまく言い表せない。というか失神しそう・・・。

「これ何?」

「ハチノコなのです!」

「ハチノコ!?!」

・・・このあと滅茶苦茶食わされまくった。

@ @ @ @ @ @ @ @ @ @

翌日

解説？

アルティメット北上様・・・侵蝕魚雷を満載、片舷20門、全40門の魚雷発射管を誇る、重雷装艦へと改装されたアルティメット北上さまだよ。その威力は圧倒的と言われていたけれど、活躍する機会が微妙になかったんだよね。ちえつ。

@@@@

「・・・っていう夢見たんだけど、なれない？」

「一発で十分だ、一発で。」

#####

神武改三・・・1980年に改装された。56cm三連装砲に改良型41cm電磁波砲、12.7cm高角砲、30mmバルカン砲の他、艦対艦・艦対空・対潜などの各種ミサイルを満載している。これといって戦いがあつたわけではないのでその真価は発揮されていないが、某国の大統領は語る。「核を使うしか倒す手段はない。問題はどうかやっつて核を当てるかだ。」

@@@@@

「おっさん、おっさん、私達って改三までいけるんだよ？」

「改三?」

「うん。おっさんが死んだ後に一回改装して、噴進弾大量装備したんだよ。」

「ちなみに条件は?」

「レベル90になつたら。」↑現在74

「・・・先は長いな」

「そうだねえ・・・。」

#####

解説：よくわかるように物事を分析して説明すること。また、その説明。「時事」

「一者」（広辞苑第六版）

@@@@@

「ネタがないから、大放出するよー!!ちなみにこれ一回目だからね!」

小沢治郎・・・タウイタウイ史の小沢治三郎の生まれ変わり。25歳。精神年齢11歳。身長170cmと小柄。女が大好き。イケメンかと言われれば普通と答えるような顔立ち。実は海軍学校を飛び級主席で卒業している。まあ、そうでなければ25歳で一基地の司令官なんてやらせてもらえないけど。

神武……一番最初の名前は神無月武、♂……だったのだが、何の因果か気が付いたら戦艦になっていた。17+49……となるのだが、戦艦になった際にやや幼児退行したのもう少し若い。実は長門に次ぐ老艦。解体まで49年間。日本を護り抜いた。身長は160cm程。体重は装備と服を取れば40kgちよつと。ないすばでー。最近妹が増えました。

崇神……神武の妹さん。実際には双子、の方が正しい。神武そっくりだがどこか表情が堅い。中身は変態……？姉の躰がなつてないからか。

応神……未成艦娘。本当は三つ子となるはずであった。見た目は神武そっくりだが小さい。140cmぐらい。体重も《軍事機密》。ですわ口調だが、幼い。神武達のことを知っていたのは、解体されてからも幽霊化して近くにいたから。最近姉（二番目）から視線を感じている。

深海棲艦……この話一番の被害者。PTSDを患っているもの多数。ちなみに船や飛行機を食べるだけで、生物（なまもの）は食べない。木造船も襲わない。戦闘をあまりしないともう恨みとかどうでもいいや、と艦娘になりやすい。オイルをまいて、糸に鋼材をつけて垂らすと釣れる。アルミをつけると又級、稀にヲ級が釣れる。深海棲艦を

飼育することは法律で禁止されています！

秋雲・・・同人作家な駆逐艦。夕雲型ではなく陽炎型。運がいい。頻繁に身近な戦艦乙に追いかけてられているためか、夕級相手でも怯まない。同人誌ばかり描いているように思われているが、普通の絵も描ける。子供達で流行った軍艦めんこに描いてある絵は大体秋雲に乗艦した絵師が描いた。最近、神武型三つ子の揃った絵を描こうとして泊地周辺を浸水させた。

翔鶴・・・幸・不幸空母の不幸のほう。しかし、よく被弾しても第三次世界大戦を生き残ったことを考えるとやっぱり幸運？かわいい。作者がお嫁さんにした娘その2。瑞鶴と離ればなれになってからは神武を妹と思うようになった。姉属性持ち。気弱そうに見えて、赤城以上の大食、さらっと妹の肖像権を売る、神武型に次ぐ怪力となかなか強か。

第六駆逐隊・・・暁・響・雷・電のロリ×4。神武のお供。しかし、何故連合艦隊旗艦の護衛が第六なのか。それはともかく、別名はぶらずまちゃんと呼める隊。黒い電ぶらずまがこの泊地では頻繁に現れるため、専ら苦労三姉妹とも。

アイオワ級六姉妹・・・アイオワ・ニュージャーシー・ミズーリ・ウィスコンシン・イリノイ・ケンタッキーの米国艦娘。ハワイ在住。長女・次女・三女は内心日本艦が怖い。五女・六女は共同出撃をしているので仲良し。四女？どこにいったのかね・・・。五女はある戦艦Zにぶつかって艦首が折れたためか、ややおとなしくなった（金剛から（金剛十榛名）÷2になった感じ）。ハワイの主力。余談だが作者がイリノイという艦が実在したのを知ったのは、イリノイがタウイタウイに訪れる話を書いている最中。

ソビエツキー・ソユーズ級四姉妹・・・ソ連の戦艦。名称は長いので本編参照。身長は皆170ぐらい、体重は「シベリア送りにされたいのか?」。銀髪碧眼（オツドアイじゃないよ!）なグラマラスさん。ちなみにハバロフスクのこの姉妹は未成艦なので口りっ娘。主な戦果は四女がテルピッツさんを沈めたことだろうか。テルピッツさんとは英国の戦艦フッドさんを沈めた独逸の戦艦ビスマルクさんの妹である。四女以外は同じ戦艦に沈められている。長女はしっかりした武人タイプ。次女・三女はお調子者ただしトラウマ持ち。四女は無口。

長門・・・ながもん。ろりこん。対魔艦。タウイタウイで一番新規。1920年竣工、

1970年解体。保存運動があったものの解体となった。ちなみに大和や神武の解体時にも保存運動は起きていた。解体まで50年とおばあちゃん艦。年齢としては一番長い（神武49金剛47）。

艦隊コレクション・・・角河ゲームズが発売している恋愛戦略ゲーム。18禁。実在する艦娘達を攻略できる。各基地編があり、声も各基地で録音されている。日常パートは普通の恋愛ゲームと大して変わらないが、戦略・戦闘パートが恐ろしくシビア。燃料・弾薬・鋼材・ボーキサイトとあり適切な資源管理を行わないとゲームオーバーとなることも。戦闘の結果次第では好感度が上下する。難易度としてはタウイタウイ泊地が一番簡単で横須賀が一番難しいと言われている。初心者はタウイタウイ編から始めるといいだろう。横須賀編は資材総量が圧倒的に少なかったり、一騎当千な艦娘（他基地編と比べてであり、うまくやれば無双できる）がいなかったりとシビアな上、攻略対象たる艦娘一人一人のストーリーが重い（姉妹で一人だけ生き残ったとか、機関部浸水の誤報で仲間を沈めてしまったとか、核の光に焼かれた・・・など）ため、初心者にはきつい。

ジੰム・・・霧の超々戦艦級。『失われし勅命』を探すわけでもなく、ただうろろしている。だがでかいので、とても邪魔である。報酬しだいでは味方になってくれる。

「またたまつたら出すよ!!」

大好評につき同人誌ネタ、再び。

ラノベ・漫画などでよくある主人公（♂）が可愛い女の子に囲まれてハーレムを作りあげ、時には強引に迫られたりその他色々（朝起きたら布団の中に全裸で潜りこんでいた等）されたりすることに違和感を感じることはない・・・こともないが、世間では一般的に受け入れられてある。しかし考えてみてほしい。もし、彼が彼女でヒロイン達が♂だったら？犯罪である。押し倒すなど論外だ。

@ @ @ @ @ @

ここはタウイタウイ泊地。艦男と提督が深海棲艦を倒すためにある基地だ。

「おつちゃん、おつちゃん！やらないか？」

「やりません。職務中です。つかおつちゃんゆるいな。」

このおつちゃんと呼ばれた人は小沢提督。25歳の女性である。身長は150cmと小さいが、その体格に見合わぬ豊かな果実を持っている。

「あ、こら、やめひいん!？」

「いいじゃんかよー。最近溜まってるんだ。」

この提督の果実に手を出しているのは戦艦・神武。180cm程の黒髪のイケメン

だ。爆発しろ！

「・・・もう、いい加減にひやつ!?」

「またまたーこつちのほうは嫌とは言っていないみたいだぜ?」

「そ、そんなこと・・・!」

「そろそろ布団に行こうか。それともここでスる? 電辺りが来るかもなー!」

「だ、だめよ! あ、いや! やめて!」

@@@@

「・・・つていうのを描きあげただけど・・・、どう?」

「うわ、えつちい・・・おっさんはなんて?」

「神武に任せるつてさー!」

「んー、まあいいんじゃない?」

『女提督小沢の陵辱日誌』一冊税込630円。春からは648円。

#####

天井・・・一、てんぷらどんぶりの略。

二、同じネタの繰り返し。

@@@@

「・・・で、翔鶴。私なんでベッドに縛られているの?」

「神武が逃げ出さないようにするためよ？」

「何!? 私が逃げ出すようなことするの!?!」

「大丈夫よ神武。あなたを私の妹にするだけだから。」

「妹って・・・瑞鶴がいるにやあ!?!ど、どこ触って・・・!?!」

「瑞鶴ったら最近私を構ってくれないの。」

「あ、やめ、んあ!?!」

「狭いから別の布団で寝ようよ、とか言い出すし。」

「それは言葉どおつ、りい!?!」

「なんか反抗期だから、この際神武を妹にするわ。」

「もうやめてよお・・・」

@@@@

「・・・これがこの前のね？」

「そう。いやあ、危なかったよ・・・。ここに来る前に神武に会いそうになってさ。」

「・・・」

「どしたの、翔鶴? リクエスト通りにしたはずだけど。」

「・・・うしろ・・・」

「後ろがなんだって？」

「後ろに、神武が・・・！」

「やだなあ、また神武が来るなんて」

「わたしがどうしたって？」

「そんな、どつき・・・り・・・？」

「また あ つ た ね あ き ぐ も ち ゃ ん」

「アイエエエエエ!? ナンデ!? ジンムナンデ!」

ドタドタドタドタ・・・

「・・・ふう。秋雲がいなくてときにあれを読んだら、私が危なかったわね・・・」

「あ、しようかく? りくえすととやらのはなしはあとできかせてもらおうからね。こんやはねかさないよ。」

「・・・(絶望)」

#####

水着・・・水泳する時に着るもの。水泳着。海水着。「ーショー」

《かぞえ方》一枚

(新明解国語辞典)

@ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @

「暑い……暑いよお……。」

タウイタウイ泊地の場所は皆さんご存知だろう。東経120度北緯……5度。赤道のすぐ側にあるため、とても暑い。執務室は神武の装備に、医務室は崇神の装備にコンセントを挿してエアコンが全力稼働しているが、その他の部屋は窓全開。各自の装備に扇風機をつけて回すにも数が圧倒的に足らず。しかも扇風機からくるのは生暖かい風。艦娘達は限界だった。

だが、そこに救世主が現れた。

「皆、服を脱げ！」

涼しい執務室で仕事を終わらせてきた小沢提督だ。発言と共に各種砲弾や魚雷、艦載機が飛んでくるが、横で控えていた神武が全て防ぐ。

「……おっさん、他の言い方があるでしょ？」

「……そうだな。皆、これに着替えてくれ！」

小沢提督が持ち出したのは各種水着。ビキニ、紐、ワンピース、ふんどし+さらし……など選り取りみどりにある。

「これらを着て、海で泳ごう！今日は仕事はなしだ！」

@@@@

「……ところで小沢っち。何で皆、こんなにサイズがぴったりなの？」

「そりゃあ、下着みたり体みたりしたらわかるだろう?」

「全機爆走!・・・あ、装備!」

「ふはははは・・・どうだっ!」

バキッ!

「まあ、殴ることはできるけどね。」

@@@@

「Hey提督!オイル塗ってくださいサーイ!」

「いや、お前等焼けないだろ?」

「Shut up!! 気分デース!そんなだからエリーヌにもピンタされるのデース

!」

「そ、そんなことないし!」

「大体乙女の柔肌に触れるchanceなのですヨ!?男なら即座に了承してあらぬところまで触ってしまいいヤンウフンとするものデース!」

「乙女m9!!(w^)」

「FUOK!!!!」

@@@@

「・・・お前、潜れんのか?」

「失礼ですわね!? ちゃんと潜れますよ! 見ててください!」

アプアプ。

ゴポゴポ。

「潜ったというよりは沈んだって感じだったが・・・」

『誰か助けてー!?!』

@@@@

夕方。

「何故だ!? これだけの人数がいて何故誰もポロリしないんだ!?!」

「私を見る?」

「そんな堂々と見せられたって嬉しくないんだよ! いや、それはそれでいいけれども! ふとした瞬間取れてしまう水着! プルンと露わになる果実! 羞恥で赤く染まる頬! そういうのが見たいんだっ!」

ズルツ!

「・・・え?」

「おっさんがポロリしたわえ・・・冷えて縮んでる。」

この後滅茶苦茶砲撃されまくった。

護衛任務伊。

アドミラル・グラフ・シユペー……独逸の、いわゆる『ポケット戦艦』の中の一つ。しかし巡洋艦。

@@@@

「今度の首脳サミットは日本で開かれることになった。我が基地はヨーロッパ方面の首脳達をインド沖から横須賀当たりまで護衛することとなった。何か質問は？」

「何で日本？リスク高過ぎでしょ。」

「ダーツで決めたらしい。」

「……馬鹿なの？」

「……コホン。で神武、お前は旗艦だからインド洋までの護衛から引き継ぐことになる。というわけで顔会わせだ。」

「ビスマルクだ。よろしく頼む。」

「アドミラル・グラフ・シユペーです。シユペーって呼んでね？」

「いや、なんでここにいるのさ!？」

#####

ワ級……深海棲艦の一種で輸送・補給の役割を担っている様子。通常時は武装を持っていないようだが、赤いオーラを放っている時、つまりエリートなワ級は攻撃してくる。

@@@@@@@

タウイタウイ泊地

全艦娘に召集がかかった。まあいつも通り敵さんからなにかあったんだろうね。

「今日集まってもらったのは、珍しく海軍本部から命令書が来たからだ。作戦種は……

『ろ号』だ。」

ろ号と聞いた瞬間に皆の顔の緊張がやわらいだ。

「この中の何人かは知っているはずだが、今度日本で首脳サミットが開かれる。これはそのための準備だ。」

「ここで北上さんから手があがる。

「なんだね、北上?」

「それってその内『あ号』とか『い号』が出るってこと?」

再び皆の顔が引き締まる。あ号やい号は割と疲れる上に危険も多い。報酬さえなければお断りしたい類（軍なので逆らえないが）の作戦だ。

「いや、あ号とい号は他基地に出されている。うちは各国首脳の護衛任務も兼ねているために、負担軽減ということでもろ号なんだ。」

「ん。りよーかい。」

「他に質問はあるか？」

「はい。」

「なんだ？電。」

「出撃予定海域を知りたいのです。」

「バシー島沖、東部オリョール海、サブ島沖といった当たりだな。サブ島沖は恐らく夜戦がメインになるであろうから、主に巡洋艦・駆逐艦に出してもらうことになるだろう。他に質問は？・・・ないようだな。それでは各自この記入帳を持ってくれ。撃沈させた数をそこに書いて一週間後に私に提出だ。それでは記入帳を受け取った者から解散！・・・ああ、矢矧と第六駆逐隊の四人はついてきてくれ。それから神武は伊良湖と執務室にきてくれ。」

@ @ @ @ @ @ @ @

伊良湖を連れて執務室に行くと、さっきの呼ばれたメンバーがきていた。

「お、来たか。さてここにいるメンバーは先日も話したとおり護衛艦をやることになる。・・・ああ、伊良湖は違うからな？というわけで、これからしばらくは予行演習をしてもらおう。伊良湖を護衛対象代わりにして七人一組で出撃を繰り返してもらおう。伊良湖に被弾させるなよ？」

「本体出して？」

「もちろん。」

「・・・予行演習中に本体が駄目になったらどうするのさ？」

「大丈夫だ。」

「デデン!!」

おっさんが出したのは、高速修復剤。いわゆるバケツ。風呂に入ったときにこれを被ると一瞬で本体まで完治するらしい。ただし、お風呂に入る時しか使えないという謎があるけど。

「倉庫がいつぱいになるくらい貯まってるからな。いくらでも怪我しても問題ないぞ。」

「馬車馬のごとく働かせるといふことなのですね？」

「護衛任務が終わったら特別休暇があるが？しかも希望すれば本土で遊べるぞ？」

「ちよつとやる気が出てきたわ。」

「では明日から始める。今日はゆっくり寝ておけ。」

「「「「「はい!!」」」」」」

護衛任務・呂。

タウイタウイ泊地・執務室

「さて、昨日も話した通り今日から予行演習をする！……のだが、まずこの者を紹介しよう。中佐、来たまえ。」

昨日の面子で執務室に呼び出され、中に入るとおっさんともう一人。身長は高めで眼光は鋭い。髪は自然な感じだが目、耳、うなじが出るようにしつかり切られている。体格は細身。

「はっ！」

「こいつは南郷忠一郎中佐。次に基地が出来た際に司令官となる男だ。その研修でしばらくうちで預かることとなった。本当は昨日紹介するはずだったんだが、彼の乗った輸送船が襲撃にあつてな、来るのが遅れたみたいだ。」

ほうほう。

「なんでこの時期？」

「この護衛任務やらなんやらで忙しい時期に……。というか横須賀とかでやりなよ……。護衛任務などそうそう見れるものではないからな。他基地はあ号、い号で面倒を見切

れないと断つたらしい。」

「で、おっさんは断れなかつたと。」

「いえ、自分が小沢少将殿に頼みこんだのであります。」

「そうそう。いきなりやってきてな、もちろん面会の約束はしていたが、土下座までされてはなあ……。」

「土下座までしてくるところかねえ……。」

ふつうは本土の横須賀とか呉とかそういうところに行きたがらない？

「ご存じないのですか？タウイタウイ泊地は今かなりの人気があるのですよ。」

「……コホン。で、だ。神武。」

「なに？」

「君にこの南郷君を乗せてやってくれ。」

は？

「え、やだよ。」

「いや、君の指揮をするわけではない。本当に乗って見学するだけだ。」

「……まあ、いいけど。」

@@@@

タウイタウイ泊地湾内

ヘリコプタが彼女に近づけば近づく程、その大きさがはつきりとわかってくる。そして着地。南郷中佐がヘリコプタから降りて最初に目にしたのは、あまりにも巨大な砲塔と長大な砲身。56cm三連装砲の第四砲塔だ。それからそびえ立つ艦橋や、ミサイルハッチ、よくわからない砲のようなものなど、再び言葉を失ってしまった。そこに神武がフツと現れる。

「なにしてんのさ、ごうち」

「ご、ごうちでありますか？」

「なん、ごうち、ゆういちろう、だからごうちね。」

「それはちよつと・・・」

「私がそう呼ぶと決めたの。・・・じゃ艦橋に行くからこれに乗ってついてきて。」

神武がサツと手を振ると現れたのは一台の自転車。

「自転車・・・でありますか？」

「そう。別に走ってもいいけど、ここから艦橋まで結構距離あるよ？というか早く行きたいからそれ乗って。」

@ @ @ @ @ @

何度か通路を曲がりながらも彼女について行くと、エレベーターの前へ。

ウーーーーーン・・・

エレベーターでしばし上昇するとようやく艦橋にたどり着いた。

「どこに座ってもいいよ。あ、でもそこそこそこはだめ。」

彼女が指さしたのは一番高いところにある絢爛豪華な椅子とそこから一段下がったところにある椅子。

「その豪華なのは皇族専用で、そっちはおっさん用だから。」

「こ、皇族用!?!」

「そ。御召艦だったから。といつても原戦になるまでは、燃料消費の関係でそんなに動かされてなかったけどね。」

「っ!?この艦は原子力機関で動いているのでありますか!?!」

「・・・もしかして私についてなんにも聞いてない?」

「はっ!詳しいことは貴女に聞くように、と。」

「・・・はあ。」

面倒そうな顔をした神武はスカートの中に手を突っ込み、もぞもぞ探ったかと思うと紙の束を取り出した。ちなみにこの間、南郷中佐は目を反らしたままである。

「はい、これ。性能やら何やら色々書いてあるから読んで。私が本体をしまつたら消えるから、読み終わつたらその辺に置いておいて。」

神武から紙を受け取った南郷中佐は、一番無難な通信席に座ってそれを読み始める。

「言わなくてもわかってると思うけど口外厳禁だからね？情報漏洩の際は一生臭い飯だと思って。」

「はっ!!」

@ @ @ @ @ @ @ @

「ごうちが表情をころころ変えながら私の個人情報を読んでいると、やはぎんが跳んできた。」

「神武、行くわよ。」

「ん。じゃ、予定通り輪形陣で。抜錨！」

ガクン！

私が一瞬揺れる。そして水をかき分け進んでいく。

湾を出ると即座に輪形に並ぶ。もちろん伊良湖が真ん中だ。

「それじゃ打ち合わせ通り、第六駆逐隊は対潜警戒を厳とせよ！つてね。一応こつちでもソナーで索敵してるけど、対潜ミサイルはないから任せた。どんどん爆雷投下しちゃって。」

「わかってるわ！」

「わかっているさ。」

「任せなさい！」

「はいなのです!」

「矢矧は敵水上戦力との主に戦闘。流れ弾は私が防ぐから。伊良湖は戦闘が始まったら私が盾になる位置に入ること。わかった?」

「安心して。流れ弾も撃たせないわ。」

「昔から護られることには慣れてるから大丈夫よ。．．．またおはぎ作ったから食べなさいよね!今度こそ最高つて言わせてみせるんだからね!」

「伊良湖はわかつてないよ．．．あなたは確かに上達している。けれど、おっさんも上達しているんだよ．．．!」

「なん．．．だと．．．!?!」

この後無事に演習を終了しました。

@@@@

「なんなんだ、彼女は．．．。」

初めてみた時、好みだと思った。

何度か近づこうとするも、少将に阻まれ。いない隙を狙っても姉妹に邪魔される。

俺は電ちゃんをprprしたいだけなのにつ!!

挙げ句の果てに彼女．．．神武に付けられることに。

せめてっ……他の駆逐艦娘ならっ!!何であの牛乳女の側にいなきやいけないんだっ!!

乗せるのやだ?俺だつて電ちゃんに乗りたかったよ!そんなでもつて『そんなとこ触っちゃだめです……』とか言わせてみたかったよっ!!

しかし俺は諦めない。海軍学校もドベで入ったが努力と根性で首席卒業したんだ。諦めなければどうにかなる!とりあえず彼女を出し抜かなければ。己を知り敵を知らば百戦危うからずと言うし、彼女について知ることにしよう。

そう思っていた時期もありました。

性能表などを見せてもらったり泊地内で聞き回った結果。

何この無理ゲー。

元々戦つて勝てるとは思っていなかったが、何かしら弱点があると思つていた。しかし聞けば聞く程、穴が無くなつていく。彼女を題材にした同人誌が弱点だと聞いたが、激怒されるのでは危険過ぎる。

なんとかならないかな……。

「Hii!何かお困りネー?」

金剛さんに話しかけられた。駆逐艦娘には話しかけられないのに何故年増にばか

り・・・

ジャキツ

「失礼なこと考えテルー？」

「はっはっは、そんなことないですよ、美しいお嬢さん。」

「アラ、嬉しいワ・・・ん？これは？貴方神武について調べてるの？」

「おはぎ・・・でありますか？」

「あの娘はおはぎがとつても好きだから、あげるととつても機嫌が良くなるわ。おいしければおいしい程、ネ。あの娘に頼み事とかあればおはぎを持って行くことデース！提督のよりおいしければ、場合によっては何でも言うことを聞いてくれるカモネー！」

今ここにタウイタウイ泊地三人目となるおはぎ修行者が誕生した。

しかし彼は気づいていない。小沢や神武は電の黒いところを見せないようにしているだけだと。

そして大きな誤解を招いている事に。

「青葉、見ちゃいました！」

護衛任務・波

タウイタウイ泊地・執務室

おっさんが机の上に広げられた地図のある点を指す。

「さて、もう一度確認するぞ。まずシンガポールのこの港でビスマルク率いる独逸護衛艦隊と合流し、用心を乗せた船の護衛を引き継ぐ。時間はわかってるな？」

「午後二時だよね？現地時間で。」

「そうだ、ここから海南省、台湾と経由したら」

おっさんの指がサーツとすべる。

「一気に横須賀まで行く。道中、プリンス・オブ・ウェールズを旗艦とする英吉利艦隊や中国沿岸防衛隊の露西亜艦隊、それから周辺の日本艦隊が大暴れしているから、強力な深海棲艦の出現はほぼないとみてもいいだろう。だが油断は禁物だ。合言葉は!!」

「……慢心、ダメ、ゼツタイ!!」

「よし。……南郷君。」

「はっ!!」

「私がいけない間ここを頼む。緊急時には君に判断を任せる。もし本当に危ない事態の時

にはまずブルネイに連絡しろ。あそこが一番近い。」

「わかりました！少将がご帰還なさるまでこの基地と艦娘たちを守り通します!!」

「ごうちがびしつと綺麗な敬礼をする。」

「ははっ、頼もしいな。」

@@@@@

当日・シンガポール

その港には多数の艦船があつた。その中の軍艦には独逸籍を示す旗があり中でも一際目を引くのは巨大な戦艦。独逸の誇るビスマルク級戦艦一番艦ビスマルクだ。そこへ旭日旗を掲げた六隻の軍艦が入港する。同型艦だろうか、四隻はほぼ同じ大きさ、同じ形状をしている。その隣には二回りほど大きな艦が一隻、そして・・・先のビスマルクの長さにして約二倍ほどの艦。タウイタウイ泊地所属、駆逐艦暁・響・雷・電、二等巡洋艦矢矧、戦艦神武だ。

「投錨!!」

港にいる人々が呆気にとられる中、錨が投げ落とされる。しかし、そこへ金髪の女性が現れ言葉を投げかけた。

「皆さーん！本体を収納してください!!」

その言葉が終わるとともに港にあつた軍艦たちが一瞬で消え去った。しかし考えて

みてほしい。日独合わせ、総排水量40万t近くになるものが一瞬にして消え去ったらどうなるのか。瞬時に海面が低下。そして湾外から水が波として大量に押し寄せ、湾内は一時的な高潮となった。

@ @ @ @ @ @

「まったく君という人はいつもいつも……」

「ごめんなさい！ごめんなさい！」

先ほど私たちに指示を出したのはシャルロットさん。仏蘭西大統領……の秘書さんだ。幸いにして特に被害はなかったものの、やっぱり危険だったということでお説教の最中。

私達艦娘は現在待機中。暁sは独逸の駆逐艦娘と戯れている。ボーツと海を眺めているとビスマルクが来た。

「先日ぶりだな、神武。」

「そうだねー。……道中、どんな感じだった？」

ビスマルクの顔がいきなり真剣なものへと変わった。

「……何かあったの？」

「ああ。誠に不甲斐無いが……客船が墜ちた。」

「は？」

あの独逸艦隊が何もできなかったってこと？

「・・・フラヨでもいたの？」

「いいや、機雷があつたみたいなのだ。シユピーゲル・・・ああ、うちの提督だが、彼の予測だと恐らく中国のものだろうということだ。それも深海棲艦出現当時の、いろいろ対処法を模索していた時のものだろうと。」

ああ、回収し忘れてることか。

「んじゃ、中国に責任を求めるの？」

「いいや、そのつもりはどの国も無いようだ。まずまず証拠がないし、あつたとしてもこの人類がまとまらなければいけない時にすることではない、とな。ただ、仄めかして若干有利にすることはあるかもしれんとは言っていたが。」

ふうん。

「それで恐らくオザワから君に話が来ると思うが・・・要人を君に乗せることとなるだろう。」

「ええー？」

「そういうな。船から彼らが脱出した際に私に乗り込んだのだが、実に礼儀正しいものだったよ。一国の代表として、というより根っこから良い人格者であるとわかるものだった。」

「いや、そうじゃなくてね．．．その．．．せっかくおっさんと二人きりだと思っていたのに．．．．」

「私がなんだったって?」

「ひよわ?!」

後ろにおっさんがいたことに気付かなかったみたい。

「ははは、神武、君にも可愛らしいところがあるじゃないか。悪魔デビル・バトル・シツプの戦艦なんて似合わないな。．．．オザワ、大切にするんだぞ。それから例のことには軽く触れておいたかな。では。」

「．．．? まあいい。神武、ビスマルクからある程度聞いているようだが――

@ @ @ @ @ @ @ @

午後三時半

私の本体に各国の首相達やお付きの人が乗る。艦橋や皇族専用室、機関室や火薬庫とかには入らないようになって言っているからビスマルクの言う通りなら大丈夫なはずだけど．．．。ビスマルク達独逸艦隊は先ほど出港した。露払いをしてくれるらしい。本当にいい人。

第一砲塔の真ん中の砲身の上で黄昏ていると、一人の男性が来た。

「君が……この艦の精神かね?」

「……そうだけど?」

「そうか……。私はラインハルト・シュピーゲル。今回の護衛艦隊の司令官だ。一目君に会って謝っておこうと思つてな。」

……謝る?」

「ビスマルクから聞いたよ。オザワと二人きりだったのを邪魔されて怒っているようだ、つてね。」

ああ、そのことね。

「いいよ。貴方達のせいじゃないんでしょ。」

「そういつてもらえると助かる。だが……」

……うわ、この人引きずるタイプかー。

「日本では謝罪をするときには菓子折りとか持つていくんだよ。」

「む?」

「ちなみに私はおはぎが大好きだったり。」

「……ははっ、そうか。次訪れる際にはおはぎを持つていこう!ではな!」

そう言うのと去つて行つた。そういえばビスマルクが彼のことを話すときは顔が柔らかかつたけど、やはり彼も艦娘に好かれるタイプなのかねえ……。

そのまま考え事をしていると時間が来たようで。

「神武ー!!どこだー!?!」

おっさんの呼ぶ声がするので、艦橋のおっさんのところへ跳ぶ。

「もう時間?」

「ああ。抜錨だ。」

「ん。抜錨!!」

約50tの錨を引き上げ、機関部を動かす。

「出港!!まずは海南省だ!!」

実
は
応
神
は
戦
艦
な
の
に
ロ
リ
な
ん
で
す
。

1944年12月6日

今日も建造の人が私に話しかけてきました。

「今日も元気そうだな。これ、いつもの艦長さんからのベッコウ飴だ。」

『うれしいわ!』

「それでよう・・・明日その艦長さんが来るんだつてよ。」

『まあ、本当に!? やつと私の艦長に会えるのですね・・・』

「おう。ようやく仕事が片づいたんだとか。明日の朝に来るらしいぞ。」

『精一杯おめかししないと、ですわね。』

「おいおい、その身体でどうやって」

ぼんっ!

『似合います?』

「そーいやそーいいうやつらだったな・・・。ああ、似合うぜ。ただ十二単はやり過ぎじゃ

ねえか?」

『大丈夫ですわ、戦闘に出るわけではありませんもの。』

@@@@

12月7日午前9:00

現れたのは素敵な殿方。夜の闇を思わせる黒い髪と鋭利な目。背は高く、細く見えませんがきつと脱いだらすごいのでしようね……って私ったら何を考えて……!?

「貴女が？」

『ええ。そういう貴方が？』

「そうですよ。つははは……」

『うふふふ……』

初めて目を合わせたその時に私は感じましたの。ああ、私にはこの人しかいないと。そして、この方を乗せお姉様達と共に戦うのだと。

しかしそれは叶いませんでした。

運命の午後1時35分。私はあの方と共に食事をとった後いろいろなことを話していました。建造の人のことや鼈甲飴のこと、未だ目覚めていないお姉様達のこと。一つも嫌な顔をせずに快く聞いて下さりました。しかし、楽しい時間は突如終わりを告げたのです。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……

揺れが私達を襲いました。揺れ事態は大したことはなかったのですが、あの方は『私』に頭をぶつけてしまい気を失ってしまいました。

『起きて下さいまし!』

呼びかけるものの、声はあの方には届きません。私達は所詮この世ならざる身。声を発してもあの方の鼓膜を震わせることはできず、肩を叩こうとしてもあの方に触れることすらできません。

仕方ないので私の近くにいた作業員に声をかけるも、不運なことに私が見える方がいませんでした。

『少し待ってて下さいね?』

ドックの外であの方の部下と建造計画について話している建造の人を呼びに行きます。

建造の人はドックからかなら離れた建物の中にいました。建造の人にあの方が倒れていることを伝えると、建造の人と共にあの方の部下が来ることになりました。すぐに向かおうとすると、体の一部に激痛を感じました。

『うぐああああ?!』

「おいどうした!?!ってあれは・・・!?!」

激痛に苛まれながらも『私』の方を見ると黒煙を上げて燃え上がっていました。

『早く・・・あの方を・・・!!』

それを言うとは私は氣を失つてしまいました。

氣が付いて知らされたのはあの方や、建造の人が亡くなったこと。そして・・・私が解体されるということ。

『いやよっ!』

『もう、やめて・・・』

『ワタクシノカラダガ・・・』

どうしてこんな理不尽な目に会わなければならないのか。その憎悪に私は包まれてながら解体されました。

そして本物の幽霊というものになりました。神武お姉様や崇神お姉様にとりついて一緒に行動しました。けれどこの体は既にお姉様達とも違うもの。話しかけても誰にも聞こえず、前なら触れあえるはずだったお姉様とも触れあえない。孤独は私を蝕んでいきました。

孤独の行き着く先は精神的な死。体は解体され、精神も死ぬ。そんな私でしたが、多用するようですが氣が付いたら、今度は暗闇の中にいました。冷たい・・・闇の中。そして何故か・・・肉体がありました。

この闇の中、どれだけの時が経ったのでしょうか。1ミリ秒かもしれないし数十年かもしれない。所詮、時など比較するもので孤独な私には必要ないものなのですから。とにかくある時、ふと私は跳んでみました。ふわーと浮かび上がってしばらくするとだんだんと明るくなってきました。そして・・・

バシヤア!!

この時私は初めて今まで水の中にいたのだと知りました。それも、私が活躍はずだった、けれど一度も入ることのなかった海。

そして日の光の元で自らの体を見ると・・・なんか真っ白になってました。

@@@@

「という感じで深海棲艦になりました。」

「そういう経緯が・・・」

今現在、金剛さんのところで応神とお話中だ。例の如く金剛さんとお菓子（今日はクッキーと紅茶）を作ったのんびりしていたら、応神が金剛さんを訪ねてきた。席をはずそうかとも考えたのだけど、私にも聞いてほしいと応神に引き留められたのだ。

「その・・・ずっと私の近くにいたの?」

「そうですね。」

「ごめんね、気づいてあげられなくて。．．．そもそも知らなかったけど。」

「いいのですよ。神武お姉様や崇神お姉様の色々な姿を、えっと．．．そう、崇神お姉様曰く脳内保存？してますし。」

「崇神エ．．．。」

@@@@@

金剛は応神と戦った時のことを思い出していた。

金剛はタウイタウイ泊地でも歴戦の存在だ。故に深海棲艦のことをよく知っている。好奇心が旺盛なり級や、食欲全開なヲ級、怒りを宿したル級に悲しみを宿したタ級もいた。そんな中金剛が戦艦神姫に見いだしたのは．．．

淋しさ。

彼女の目にはそれがあつた。そして神武奪還作戦中にも

『私からお姉様をとらないで！やつと会えた私のお姉様なのよ！』

そんなことを言っていた。

(まったく、本当に手間のかかる姉妹ね．．．)

方や強すぎるがために孤独となり方や時の不運のために孤独となった。

(神武の時には崇神や小沢がいたからよかつただけだ。それにしても見た目だけでなく本当に姉妹なのね。でも．．．)

ふと、金剛は応神を見る。何か言われたのか神武に抱きつくその顔は笑顔で。淋しきは映ってなどいかなかった。

(応神はもう大丈夫ね。けど長女がこれで次女があれ・・・別の面で心配になってきたわ・・・。)

護衛任務・仁

南シナ海の洋上を突き進む一つの艦隊。そう、日本艦隊だ。色々あつて予定を変更。海南島・台湾を経由せずに南シナ海を真っ直ぐ突つきり、バシー海峡を通過してそのまま横須賀に行くことへ。奇しくも、客船がなくなつたことでいわゆる「足手まとい」がいなくなり、わざわざ沿岸部を沿うように航行したり頻繁に補給する必要がなくなつたのだ（実のところ補給はそこまで必要なわけではなく、船体に深海棲艦がかじりついていないか検査するためだったり）。

「後でエリーヌに謝らないとなあ……。」

「私もいつしよに謝るよ。」

「……お前はウクライナとベロルーシヤをからかいたただけだろ？」

「あ、ばれた？」

@@@@

ところ変わって食堂。

丁度昼食の時間ということもあり、客人達も食事をとつていた。

「おいしいな。」

「ええ。戦艦に乗っているとは思えないくらい。」

「しかも大きいから揺れも少なく、部屋は質素ながらも便利。おまけに深海棲艦をもともしない装甲と砲。うちの国にも一隻欲しいよ。」

「あらやだ、そんなお金ありませんわよ?」

「そうなんだよな……。ちなみにこの艦の娘、ジンムと話したんだけど妹が二人いるらしい。」

「あら、妹さんが?……そういえばいなくなつたと思つたら、ナンパしていたのね。」

「あ、いや違うんだ、……」

そんな他愛もない話が繰り広げられているのを尻目にある双子の兄妹がこそこそしていた。年は十二、三だろうか、金色の髪にサファイアのような蒼い眼。兄は髪が短く、妹は長い。服は妹はワンピースだが、兄はカッターシャツに半ズボン。髪と服装以外では見分けがつかない。

「なあ、色々探検してみようぜ?」

「やめようよニコル……」

「いいだろ?ちよつとぐらいさ。こんな戦艦、もう乗れないぜ?」

「うっ……」

「ニコラだつて好きだろ？」

「・・・もう、すぐ戻るんだからねっ！」

「おう。」

@ @ @ @ @ @ @ @

神武・艦橋

おっさんと私、それから護衛の五人がここに集まつて緊急会議を開いていた。

「それで？敵艦があらわれたのだったな？」

「うん。といつてもチ級が二隻にハ級が一隻、ロ級が三隻だから簡単に蹴散らせるはずだけど。ね？」

「ええ、そうね。」

「それにしてもよく倒されていかなかったものだ。まあ、油断するなよ？追撃等はするな。要人を送り届けるのが今回の仕事なのだから。」

「わかつてる。・・・ん？」

「この感覚は・・・」

「どうした神武？」

「なんか艦内を移動してる二人組がいるんだよね。重さ的に子供かな？・・・あ、機関室に入ろうとしてる。ちょっと行ってくるね。」

「ああ。艦橋の方が近い場合は連れておいで。」

「ん。」

@@@@@@

「何だ？この部屋。」

「日本語ばかりで全然読めないけど……これって核のマークじゃない？」

「そうだよ。」

「っ!？」

「誰だ!？」

ニコルとニコラは驚愕していた。先ほどまで全く気配がなかった空間にいきなり現れた濃密な気配。子供故に本能が実力差を伝える。

「むしろこっちが聞きたいんだけど……まあいいや。私は神武。あなた達は？」

「……ニコル。ニコル・ジュピエッタ。」

「ニコラ・ジュピエッタです。あの……貴女がこの艦の精霊さんですか？」

「せ、精霊？うーん、あつてるような……。まあいいかな。私はこの艦の意志。君達が機関室に入ろうとしてたから止めに来たの。」

「機関室？なあ姉ちゃん、ちよつと見せてくれよ。」

「ニコルッ!?!核マークがついてるってことは原子力機関だよ!?!危ないよ!！」

「ニコラちゃんはわかってるのかー。えらいえらい。」

神武に頭を撫でられて気持ちよきそうにするニコラ。一方ニコルは駄目と言われ、少しむすつとしている。が、なにか思いついたのかパーッと笑顔になる。

「神武の姉ちゃん！この艦のこと詳しいんだろ？どこか案内して！」

「えー……。うーん、甲板も今は危ないしな……。そうだ、艦橋にくる？というか連れて来いって言われてるし。」

「艦橋に入ってもいいんですか!？」

驚きと喜びに満ちた顔をしたのはニコラの方だ。

「ここからだとか客室より近いからね。……。つと、そうだった。今敵さんが来てるから急いで行くよー！」

「て、敵?!」

「そうー！」

@@@@

「……。で、結局ここに連れてきたのか。」

「ニコル・ジュピエッタです！」

「ニコラ・ジュピエッタです！」

「ははっ、元気がいいな。神武、やつらは今どの辺りに？」

「12時半の方向に40kmってどこかな？今日は探信儀の調子がいいかも。」

「そうか、装填をしておいてくれ。・・・君達、その席に座っていてくれるかい？座つたらベルトで固定するんだ。」

「わかった！」

「わかりました！」

「よし。神武、発射警報を。それから艦内放送を流す。つないでくれ。」

「はい。」

@@@@

ウウウウウウウ!!ウウウウウウウ!!ウウウウウウウ!!

突如艦内に警報が鳴り響く。しかし客人たちは慌てない。ここまでに何度も似たような増強に陥っているからか、誘導があるだろうと待機しているのだ。そしてすぐに小沢少将の放送が入る。

「えー、皆さま、深海棲艦が出現したため今現在戦闘態勢に入りました。先頭終了の放送があるまで各自の部屋へお戻りください。それからジュピエツタ様、お子さんを二名とも艦橋にて保護しておりますので後ほど部屋へ送り届けます。」

次々と客人たちが割り当てられた部屋へと戻っていく。子供を探していたジュピエツタ夫妻もほっと胸をなでおろし、一先ず部屋に戻ろうとしたその時、

ドゴオツオオオオオン!!

巨大な音と共に艦内が少し揺れた。これにはさすがに焦りを感じたのか、客人たちが騒ぎ始める。

「今のは!?!」

「まさか直撃したのか!?!」

ドゴオツオオオオオン!!

ドゴオツオオオオオン!!

しばらくあの巨大な音と揺れが続いた後、しばしの静寂が訪れ、また放送が流れる。

「戦闘が終了いたしました。えー、先ほどの音は主砲斉射によるものです。本艦に被害はないのでご安心ください。」

@@@@

「では神武、その子達を頼む。」

「ん。ほら行くよ。」

ニコルとニコラを艀装の上に乗つけて歩き始める。

「神武の姉ちゃん力持ちなんだな!」

「ん? そう?」

「そうだよ! だってパパも私たち二人だと重いつていうのよ?」

「私はそもそも人間じゃないからねえ……さつき艦橋で主砲撃つのみでたでしょ？あの主砲塔どのくらい重いと思う？」

「5000t!!」

「10000tぐらい?」

「残念。5000t。で、四つあるから20000tだね。二人合わせて君たち80kgもないのに重いなんて思うわけないでしょ?」

「姉ちゃんスゲー……」

「そうでしょ? ……あ、着いた。」

コンコン

「お子さんをお連れしまし——」

バタンツ!!

「ニコル!ニコラ!!」

全部言い終わる前に中から母親が現れたので艤装の上から二人を下ろす。二人を抱きしめてしばらく。落ち着いたのかこちらへ向く。

「本当にありがとうございます。貴女がこの艦の?」

「そうですよ。」

「そう……その」

「神武!!」

二人の母親が何かを言う前にいきなり矢矧が現れた。

「ちよつと危ないかもしれない。すぐに来て!」

「わかった。・・・それでは。」

彼女に一礼して、私は艦橋に跳んだ。

デート。

「ごきげんよう。わたくしが重巡熊野ですわ。あら・・・青葉？」

「あは、あはははは・・・。」

@ @ @ @ @ @ @ @

熊野・・・古鷹と同じく青葉被害者、というわけではないが尖閣諸島沖からの撤退の際に、青葉から「ワレ曳航能力ナシ 才先二失礼」と言われていることで有名。しかし熊野が損傷し沖繩へ帰ることになったのは、古鷹（この時沈んだ）と共に青葉（ワレアオバはあまりにも有名）を逃すためだったと考えれば、やっぱり青葉のせい？ 最上型の四番艦。元々は軽巡という名目で造られた。

@ @ @ @ @ @ @ @

「それでは裁判を始めます！ 検察の能代さん、どうぞ。」

「はい。えーその被告人ですが、探信儀が不調であるにも関わらず索敵を怠り敵艦に対し『ワレアオバ』と繰り返し打電、探照灯を照らすなどしました。結果、中国軍から被告人をかばったために古鷹が沈みました。また、同事件で熊野が大破し沖繩に戻るこ

ととなったのですが『ワレ曳航能力ナシ 才先二失礼』との言葉を被告人から受けています。」

「異議あり！でたらめですう！」

「被告人は黙ってください。検察側は以上ですか？」

「はい。」

「それでは弁護人の古鷹さん、どうぞ。」

「はい。えーつと確かに私は沈みましたが、その、青葉ちゃんも頑張っていましたし・・・

あ、後混乱していました！以上です！」

「なるほど・・・」

@@@@

「いやー大変だねえ、青葉も。崇神も同じ方面にいたんでしょ？」

「・・・私はおもに大陸沿岸部の制圧で、彼女達は諸島警備だったから・・・でも青葉がやらかしたという話は聞いた。」

「へえー。・・・おっ決着したみたいだね。」

「被告人・青葉が出てきました！・・・おつとおつ!?青葉暴れています！しかし憲兵が」

「被告は暴れているようですね。しかし軽空母の村を襲うオークすらも瞬殺する憲兵です。心配はないでしょう。それでは来週のお天気です・・・」

#####

プリンス・オブ・ウェールズ・・・英国海軍キング・ジョージ5世級戦艦二番艦。1941年3月竣工。完成直後、北海で独逸戦艦ビスマルクと交戦し被弾。修理を終え11月、巡洋戦艦レパルスとともに英国東洋艦隊に編入。まもなく日本艦隊を追ってシンガポールを出港し、12月10日、日本海軍機の攻撃を受けてマレー半島クアンタン沖でレパルスとともに沈没した。

「日本怖い独逸怖い・・・」

@@@@@@

「我が東洋艦隊の役目は周辺一帯の深海棲艦を掃討し、各国の首脳を無事に日本に送り届けさせ、そして日独の護衛艦隊に活躍させないことだ！」

プリンス・オブ・ウェールズは思う。

（無い胸張って威厳出そうとしているロリっ娘提督マジかわPrPrPrはああはああはああ・・・）

おつと間違えた。レパルスの思考を読んできましたようだ。今度こそ・・・

（すべての人間は生まれながらにして自由でありかつ尊厳と権利とについて平等であるところがあるが本当にそうだろうか尊厳など生まれた地域環境で異なるものであるし権利も生まれた国によって異なるではないかいやこれは実は目標としていてだけで現実とは

違うということか今は無理でもそんな世界にしたいそういうことかどこかの日本艦だつて沈んだ敵も助けてあげたいのですできればとかいつていたしやはり自分達にできることから少しづつやれはということかあれ私は何を考えているんだわからなくなつてきたぞというか今は提督がその小さなおくちを頑張つてしゃべっているんじゃないか変なことは考えちや駄目だ話を聞かなければしかし変なこととは何だこの思考の渦こそが哲学といえるのではないのか哲学の役割は人々が当たり前とみなしていることについて根本にさかのぼり全体的な視野から見つめなおすことにあるのだし今ここで私が哲学をするのは逆にこの艦隊の問題点を探り出すことにつながるのではないだろうかいやしかし・・・)

キング・ジョージ5世の思考を読んでしまったようだ。だがこの場にいる艦娘は三人であるからもうプリンス・オブ・ウェールズの思考にたどり着けるはずだ。

(おしごとおわつたらーおかしがいーつぱいたべたいないとくさんやるのもたいへんだよー)

え？

「・・・私が簡単に思考を読ませるとでも?」

っ!? ナレーション逃げます!

「うふふふふ、逃しません。」

#####

デート・・・日付。時日。

苑第六版)

@ @ @ @ @ @ @ @

「翔鶴う・・・」

「はいはい。こことかどうかしら?」

「おー、ここをこうするのは?」

「それはやめておいた方が・・・だって今はあれがあるから・・・。」

「あ、そっか。やっぱ翔鶴に聞いてよかった。」

苦節48年・・・とうとうこの日が来たのですね・・・

「翔鶴?何してるの?」

神武が提督とデートしたい、だなんて!

@ @ @ @ @ @ @ @

早朝、日が出る前におっさんの部屋に行く。

ガチャガチャガチャガチャ...バキッ!

「あ、壊れた。古かったんだね。」

部屋の中に息を止めて入り、窓をあける。おっさんはまだ寝てる。

「さっすが対猛獣用麻酔ガスを5本使っただけの威力はあるねー」

寝ているおっさんを担いで、海に向かう。途中で寝ぼけた金剛さんに遭遇した。

「Good morning, ZINMU. You got up early…」

「おはようございます、今からおっさんと出かけてくるからー!」

「Hum… Have a nice day…」

@@@@

港につくとそのまま海面を滑って湾外に出て、本体を召喚する。

ザッパーンツツ!!

今日は海中から出現した。出すところを間違えたみたい。

そのまま自分に乗ると甲板の上にくっつきおっさんを寝かせる。その時ふと翔鶴の

言葉を思い出す。

『疲れて眠そうだったら膝枕をしてあげなさい。』

なるほど、膝枕してあげればいいのか…。

おっさんの頭を正座した私の太股の上に乗せる。

『日差しには気をつけるのよ? 提督は人間なのだから。』

いけないいけない。サツと手を振ってパラソルを私達の頭が日陰になるように展開する。

今日の目的地はトゥバタハ岩礁海中公園。伊号潜水艦達が綺麗なところだと前から言っていたので、翔鶴に相談。すると艦載機を飛ばして様子を見てくれたのだけど、水上からでも十分楽しめそうと教えてくれた。この公園で遊んで、私が作ってきたお弁当を食べて、夕日を眺めてから帰る予定だ。

@ @ @ @ @ @ @ @

ちよつと強めの風の中、八時間。正午になってそろそろ着くというときにおっさんが動いた。そしてスカートをめくると頭を中に突っ込んだ。

「ひゃあ!?!」

「・・・へ?」

目が覚めたみたいですがすぐに頭を出したおっさんと目が合う。

「・・・」

な、なんか気まずい。

「その・・・だな。おはよう。」

「・・・うん。おはよう。」

@ @ @ @ @ @ @ @

目が覚めるとスカートの中でした。やばい……こんなところ見られたらいくら相手が神武でも憲兵呼ばれる……!!そろそろあの憲兵さんとも顔見知りになつてきたしな……。

ん？

んんん？

ここ。どこだ!？

上にはパラソルと神武の顔にパラソルの端から見える青空。右を向くと神武のパンツ。……白の紐か。左を見ると……見覚えのある砲塔。

「何で私は甲板にいるんだ……?」

「おっさん。」

なぜか神武の甲板にいることに気付いた私に、神武が真剣な瞳で見つめてくる。

「今日はデートをします。」

は？

@@@@

お、固まった。

おっさんが再起動するまで、ボートの準備をする。もう目的地には近づいているのでそろそろ座礁する危険があるのだ。ということでボートに乗ります。

『いい？ボートを引つ張つていこうなんて考えないのよ？オールを準備して、提督にちやんと漕いでもらうのよ。』

そうだった。オールも用意しないと。

「・・・それで、今どこなんだ？というか仕事・・・。」

「今ね、トウバタハ岩礁海中公園の近く。」

「へ？」

「ちなみに仕事は代わりにやっといいたよ？大淀を叩き起こして全部終わらせたもの。」

@@@@@@

「眠い・・・。」

@@@@@@

「じゃじゃーん!!」

「おお、うまそうだな。お前が作ったのか？」

「うん!!」

何か諦めたような表情をしたかと思えばすぐに笑顔になったので、とりあえずお弁当を広げる。ボートの上で食べるのもありかな・・・と思っただけ、ちよつと危ないのでやめた。

「「ごちそうさまでした！」」

さて、お昼の後は散策タイム。ボートを下ろしておっさんを乗せてから、本体をしま
う。そしてボートに乗り込むとおっさんがオールで漕ぎ始めた。

辺りは海が澄んでいてサンゴ礁が見えるので本当に綺麗。もともとここは保護区域
で綺麗なところだったのだけど、深海棲艦が出現したことでさらに人間が来なくなつて
自然のありのままらしい。

「綺麗だね……。」

「そうだな……。」

@@@@

二人でのんびりしていると、あつという間に時間は過ぎて。夕日が水平線に落ちてい
る。いつだって見た光景なのに今日のは何か違った気がした。

「……帰ろうか。」

その言葉と共に私の手を握る。

「うん。」

握ったおっさんの手は少し汗ばんでいた。

もしもの話。

「俺は未来永劫貴様の艦長だ。つまり貴様が沈まなければ俺は死なない。故に貴様は沈んではならない。分かったな？」

仲間が次々と沈んでいき、心がポロポロになっていく。そんな時、彼に言われたこの言葉。この言葉に私は救われ、彼と共にあろうと決めた。

@ @ @ @ @ @

ズガアアアアアアン!!!

「きやあつ!？」

「満潮!？」

扶桑・山城・最上・時雨・満潮

横須賀史でいう西村艦隊（実際には

もう二隻いるが）はレイテ島に向かっていた。理由は言わずもがなレイテ等周辺に深海棲艦が出現しているとの報告を受けたからである。しかし道中にて敵哨戒部隊に見つかり、これを撃滅したものの、満潮が被弾・大破してしまった。

「司令官、満潮が大破しました！」

『構わん、行け。』

「ですが!!」

『撤退など許さぬ。進軍あるのみだ。足手纏いだというのならおいていけ。敵の目もそちらへ集中するだろう。』

「くっ……!! 貴方は!!」

『提督が行けつて言ってるんだからさつきと行きなよ。しつこいよ?』

「神武……!!」

「もういいわ、時雨。皆、行って。私はここで敵の目を引き付けるわ。それでいいんでしょ?」

『ああ。』

「でも満潮!!」

「こんな泊地に生まれた時点で覚悟はしていたわ。ほら行きなさい。」

「……! すぐに戻ってくるから!!」

苦虫を噛み潰したような顔をしている扶桑・山城・最上に涙を隠そうともしない時雨を見送った満潮は深く呼吸をする。

「さて、駆逐艦の意地を見せてやるわ。」

駆逐艦・満潮は集まった深海棲艦の中へ特攻。同士討ちなどを誘発させ、夜戦まで突入。砲弾・魚雷がなくなり、最後はり級flagshipの発射直前の主砲に手を突つ

込み、内部で爆発・誘爆させて道連れにするという壮絶な最期を遂げた。同士討ち含め戦果はイ級二隻口級五隻二級六隻 \square 級五隻リ級二隻 (elite / flagship含む) というものだった。

@ @ @ @ @ @ @ @

タウイタウイ泊地司令長官小沢次郎少将。彼はいわゆるブラック提督だ。一隻二隻の大破では撤退などせず、囀戦法——捨て艦とも呼ばれる——は当たり前、休む暇など与えない。当然艦娘たちも不満を抱き幾度となく反乱を起こしてきたが、そのたびに鎮められてきた。たった一人の艦娘によって。

その艦娘の名は神武。タウイタウイ氏において最恐で最凶な最強の戦艦。数十もの魚雷をもつともせず、その主砲は戦艦・空母でさえもたやすく撃破する。ついたあだ名は『デビル・バトルシップ悪魔の戦艦』。

最悪なことにその彼女は小沢を妄信している。小沢の言うことはすべて聞き、小沢には向かうものは許さない。僚艦であろうと命令されれば『処分』するし、死ぬと言われれば死ぬのだろう。

規格外の性能と幾多もの敵を屠ってきた戦闘経験、そしてつい先ほどまで味方だったものを容赦なく攻撃できる精神。反乱の主なものは彼女に『処分』され次第に反乱などは起こらなくなっていた。

暗く、ピリピリしていたそんなタウイタウイ泊地。しかし一縷の希望が現れた。

@@@@

小沢と神武が『補充』をしているときに彼女は現れた。

「24分・・・いや24時間か。長い、高速建造だ。」

「うん。」

チンっ!!

「できたよ・・・あ。」

「・・・神武型戦艦二番艦崇神です・・・よろしく・・・あ。」

@@@@

崇神。彼女が現れた時泊地内は更なる絶望感に包まれた。神武の妹。一隻でもかなわないのに二隻になられてはどうしようもない。そういう考えが皆のもとにあった。しかし、ある一つの会話により絶望は希望へと変わる。

@@@@

「・・・神武!!何であんな男に従うの!?!」

「何でつて言われてもね・・・」

「・・・あんな奴に従うことない!!私たちをただの道具としてしか見ていないあんな下」

バシユッ!!

「……え？」

神武の電磁波砲から放たれた砲弾が崇神をかすめ、窓から飛んでいった。

「それいじょうはいくらすじんでもゆるさないよ？」

「……神武……。」

@@@@

この会話を聞いていた艦娘によつて姉妹が決裂したことが泊地内に知れ渡つた。当然自前の探信儀で話を聞いている者がいることに神武は気づいていたが、たとえ妹でも容赦はしないということも伝えたかつたのだろうか、真意は明らかではないが何も行動をこの件に関しては起こさなかつた。このことが泊地を変える大きな転機となる。

崇神を引き入れた艦娘たちが選んだのは連絡船で本土へ泊地の状況を伝えるというもの。数回ほど連絡船の人間に陳情を述べた手紙を渡したことがあるが、そのたびに連絡船は沈没し、手紙を書いた者、あるいはタイプした者が『処分』されているため、諦められている方法だった。もちろん沈めたのは神武なので、今回は連絡船が本土につくまで崇神が神武に張り付くのだ。

@@@@

結果からいうと作戦は成功した。手紙は海軍本部に届けられ、秘密裏に憲兵を派遣・調査が行われた。

「月刊艦娘のものです。取材よろしいですか？（憲兵隊のものです。これから見せる紙に書いてあることに）「はい」なら指を二回、「いいえ」なら一回動かしてください」

「ええ、いいですよ。（トントン）」

「いやー助かります。では早速質問なんですけど、これを見てもらえますか？（この司令官は囲戦法をしていますか？）」

「これは・・・？（トントン）」

「これはですね・・・」

といった調査の結果、小沢少将は本土にて軍法会議にかけられることとなった。

そして運命の日。

「憲兵隊のものです！小沢少将、貴方は軍法会議にかけられることになりました！おとなしく来てください！」

@ @ @ @ @ @ @ @ @ @

タウイタウイ泊地湾出口

「すじん、そこをどいて？」

「・・・駄目、行かせない。」

「これがさいごだよ。そこをどいて？」

「……。」

「……そう。」

泊地最高戦力がぶつかる。しかし状況は明らかに崇神が不利だ。まず、性能の差。神武は改三までなっているが崇神は無改造。装甲の厚さ、速度、武装において神武が上だ。戦闘経験も対ソ連戦線にいた神武と対中国戦線にいた崇神とでは開きがある。そして何よりも崇神にはためらいがある。神武の頭や、胸、腹といった部位を狙えないのだ。いや、狙ってはいるのだろう。しかし、無意識にそらしてしまうのだ。

幾度もぶつかれば崇神はボロボロになっていた。そしてとうとう……

「……あつ」

「さよなら。」

よろめいたところを神武の主砲が撃ち抜く。それと同時に神武から放たれた幾多も対艦ミサイル、対潜ミサイルが後方にて支援していた艦娘たちに向かう。艦娘たちがすべてを迎撃し終えたとき、神武の姿はなかった。

@@@

横須賀鎮守府では今まさに小沢への軍法会議が始められようとしていた。海軍・陸軍

の将校たちが周囲に着席し、真ん中の席に小沢が憲兵とともに座る。

「それではこれより——」

軍法会議が始まる。その時小沢の隣にいた憲兵は彼の呟きを聞いた。

「くるぞで。」

ドゴオオオオオオオオオン!!!!

「な、何事だ!？」

建物の外から爆発音が聞こえる。その音は次第に近づいて・・・

ドゴオオオオオオオオオオオン!!!!

突如会議室の壁に大穴があき砲弾が飛び込んでくる。そして大穴に立つ人影がひとつ。

「ていとく、むかえにきたよ。」

「遅かったな。」

神武だ。入ってきた神武は一瞬で小沢の側に近付くと

グシヤリ

憲兵を二人とも吹き飛ばした。そして小沢の手錠を壊す。

「いゝと。」

「・・・そうだな。」

「待てー！」

立ち去ろうとする二人を一人の将校が止める。山口元帥、横須賀鎮守府の司令官だ。

「この警備をしていた艦娘がいたはずだ!!」

「ああ、あれ?」

外を神武が指差す。そこには倒れふす艦娘たちがいた。

「馬鹿な・・・大和まで・・・!?!」

「たかだかすうじゅっせきでわたしをとめられるとおもったの?」

瓦礫に潰された将校や呆然とする山口元帥を置いて、小沢を抱いた神武が行く。そのまま海まで行くと本体を召喚した。

キュイアアアアアアアアアア

甲高い音とともに海があふれる。彼女は小沢を抱えたまま自身に乗ると

ドゴオオオオオオオオオンン!!!!!!

装備しているありったけの武装を横須賀に行使した。

@ @ @ @ @ @ @ @ @ @

その後の彼らを知るものはいない・・・。

護衛任務・保十。

艦橋に跳ぶと、皆深刻そうな表情をしていた。

「……何があったの？」

「……arkがいた。」

「……え？」

ark級。最近現れた深海棲艦の種類だ。flagshipの上位互換で、一番最初の個体は……私。深海棲艦化していた際に放っていたあの虹色の光、あれがarkの特徴だ。性能は飛躍的に上昇しており、とても危険だ。

「ここから東に100km、そのあたりで虹色光を観測した。発見されなかったために近づいていないため詳細は不明だ。」

東に100km……今沖繩島の南東250kmだから、沖大東島あたりかな。それにして……

「この周辺の警備の娘はどうしたのさ……ここら辺って普天間の管轄でしょ？」

「事前の情報ではarkはいなかったようだし、あれだけ目立つものを見つけられないとは思えない。恐らくつい先ほど現れた個体か……もしくは進化したか、だ。」

「そっか。．．．」

@@@@

これが創作だというのなら私達は深海棲艦に見つかっていたのだろう。そのほうが読者にとっていい展開となるからだ。だがしかし、これは現実である。私達はうまく見つからずにやり過ぎ、横須賀までたどり着いた。

「神武の姉ちゃんありがとなー!!」

「ばいばーい!!」

横須賀で客人たちとお別れをすると、いよいよ．．．

「本土で休暇なのです!!」

「楽しみだ。」

「大和ミュージアムというところについてみたいわ。」

「．．．それは呉よ?」

「一週間あるじゃない!!」

本土での一週間の休暇が始まる。

#####

さけ【酒】（サは接頭語、ケはカ（香）と同源）．．．①米と麴（こうじ）で醸造した、日本特有のアルコール含有飲料。日本酒。「熱爛のー」

と酔う飲料の総称。「ーに酔う」「ーが回る」「ーに溺れる」

② アルコール分を含み、飲む

③ 酒宴。さかもり。「ーの

席」(広辞苑第六版)

@ @ @ @ @ @ @ @

「ねえねえ日向、神武達が酔っ払ったらどうなるか見てみたくない？」

「いや、どうでもいい。」

「うんうん、そうだよねーやつぱり気になるよねー!!ということぞ!!」

「いや、話を聞け。」

「神武達にお酒を飲ませてみよー!!」

「・・・闇鍋の件で追い掛け回されたの忘れているのか・・・?」

@ @ @ @ @ @ @ @

本日の対外演習は私達三姉妹と北上・大井、矢矧で行ってきた。演習相手はブルネイ基地の艦娘。何故か演習の始めから相手はガクブルしていたので、イラツとして思わず開幕で全砲門斉射してしまったらあっさり終わった。やる気ないなら挑んでこないほしい。

「・・・神武、何でそんなに怒ってるの?」

「……怒ってない。」

「……怒ってる。」

「怒ってないってば。しつこいよ?」

「……む。……どう見ても怒ってる。」

「だーかーらー!!」

「あの……お姉様方?」

「応神は黙ってて!!」

「はい……。」シユン

うー!!なんかイライラする……やっぱり崇神の言う通り怒ってるのかな……。そう思った時に現れたのは。

「やー、神武。酒でもグイツとイかない? すつきりするよ?」

伊勢と翔鶴だった。

@@@@

「ささ、駆け出しっぱいグイツと。」

「ん。」

ゴクゴクゴクゴクゴク……

神武の喉を大吟醸が流れていく。

「プハー!!・・・ふう。」

一升瓶の中の酒がすべてなくなり、神武が一息つく。その目はすわっていた。

「・・・あん? おどれら殺んのか!？」

「ええー!？」

「神武お姉さまー!？」

「・・・。」

「やっぱりこうなるのね・・・。」

殺気を放ちだした神武に戸惑う伊勢・応神、そしてやはりとそのまま飲み続ける翔鶴と崇神。この後伊勢は滅茶苦茶絡まりました。応神?・・・年齢が。

「一人だけ素面はつらいですわー!？」

#####

姉妹・・・現実と理想は違います。

@@@@

タウイタウイ泊地名物、神武+応神対象神の追いかけて。不定期に開催されるこれは多くの艦娘に賭けの対象として扱われている。

「・・・ちよつとこの服を着るだけだから。」

「応神に変なもの着せるなあ!!」

「・・・変なものじゃない。ちゃんとしたヴィクトリアンメイド仕様。」

「そういう問題じゃない!!」

「・・・?・・・神武のものあるよ?」

「おこことわり!!」

「・・・提督が見たいって」

「さあさあ早くそのメイド服渡して?ほら、応神もおとなしく。」

「神武お姉さま!?!」

本日の勝敗。

神武（寝返り）・崇神ペアの勝ち。

見事予想し、艦娘達から間宮券を巻き上げたのは翔鶴だった。

「はいはい。」

#####

電・・・特III型駆逐艦四番艦。1932年11月15日竣工。1934年6月29日、

濟州島南方で演習中に「深雪」に衝突、艦首部を喪失し「深雪」は沈没した。軽巡洋艦「那珂」に曳航され、後進で佐世保に帰投、修理は呉で約三ヶ月間かけて行われた。19

34年11月から「暁」「響」「雷」と共に第6駆逐隊を編成し、1940年11月、第1艦隊第1水雷戦隊に編入され太平洋戦争を迎えた。1947年、「神武」が竣工すると

第6駆逐隊は護衛艦隊となり、「響」以外はその生涯を終えるまで「神武」と共にあった。1963年9月8日日本海にてソ連艦隊との交戦中に、ソ連製巡航ミサイル「ステイクス」の直撃を受け轟沈した。

@ @ @ @ @ @

私が初めて彼女を見たのは、1946年呉でのことでした。あまりにも場違いな巨大な艦影。艦長さんと、暁ちゃん達といっしょに「大きいねえー」とびつくりしたものです。

目覚めたての彼女は、男の子みたいでした。戦争後の基地見学などで訪れる国民学校の低学年の子にそっくりだったのです。天龍さんから「教育」のしかたを教えてもらっていて助かりました。

朝鮮戦争、日韓戦争、と様々な戦役で私達は活躍しました。神武さんが私達には手強い相手を容易く沈め、逆に神武さんには対処できない潜水艦などは私達が沈め（さすがに体当たりで浮上中の潜水艦を沈めたときは驚いたのです）、といい組み合わせだったと思っっているのです。今でもそれは変わりません。

国内外問わず神武さんと私達、それから大体一緒にいた翔鶴さん（他にもいましたよ？）とで最強の海軍部隊と言われていました。そのことが慢心になっていたのかもしれない。

第三次世界大戦。中立を保っていた大日本帝国が参戦することとなった戦いで私は沈んだのです。噴進弾が飛んできたと思うと私にぶつかり、爆発しました。今でも忘れていません。別れを告げた時の彼女のあの取り乱しようは。

艦娘として新たな生を受けた私はタウイタウイ泊地所属でした。司令官さん以外はまだ誰もおらず、司令官さんと二人三脚です。なんと司令官さんは神武さんの艦長だった小沢さんで、ちよつとエツチですが優秀な人です。でも時折不安げな顔をしていました。

ある日司令官さんに言われて新入りさんを迎えに建造室に向かうと、そこには・・・
「お目覚めですかーって、はわわわー!!神武さんの主砲は危ないのですよー!!」

「あれ?電ちゃん?ってことはやっぱりここはあの世なの?」

神武さんがこちらに主砲を向けていました。すぐに主砲を下ろし、警戒を解いてくれたのですが・・・すごい違和感を感じたのです。仲の良かった友達がよそよそしくなつたような、そんな感じですよ。目も光がなくなちよつと怖いと思つてしまいま

「電ー、何書いてるの?ご飯食べに行かない?」

「・・・わかつたのです。激辛麻婆豆腐を食べさせてあげるのです!!」

「え!?!暁ちゃん止めて!!」

「・・・響」

「・・・雷」

「・・・翔鶴」

「私には無理よ。おとなしく食べなさい。」

伊19の中破を見て触りたくなるのは男の性。

アイカツ・・・アイドル活動のこと。

@@@@

「・・・島風、これ着てみて。」

「えー、これ動きにくそう・・・。やだっ!!」

ダッ!!ガシッ!!

「はーなーしーてー!!やー!スカート引っ張らないで!!」

「・・・」

数分後

「動きにくい。・・・これ、制服?」

「・・・そう、スターライト学園の制服。」

「すたあらいと学園?本土の学校?」

「・・・アイドルのための学校。この赤いリボンのカチューシャに変えてこれを読んで。」

「わたしの熱いアイドル活動、アイカツ、始まります?」
 「崇神に島風・・・何やってんの?」

#####

挟まれない・・・(可愛い)女の子に挟まれないのは古来からの男の性(どんな意味でとつても可)。

@@@@@

ども、青葉ですう!!加害者だとかいろいろ不名誉なことを言われていますがそんなことではないですよ!!そんなことよりですね、青葉見ちゃいました!!

それはいつも通り泊地周辺の深海棲艦の掃討を行って帰投し、提督に報告をしに行つた時のことです。夜戦開始直後に戦闘は終了し、司令官室についたのは丑三つ時。もう夜も遅いですし、報告書を夜間用ポストに入れようとしたとき!司令官室の中からうめき声が聞こえたのです!!

「ん・・・ああ・・・」

賊だつたりしたらいけないのでスーツとドアの隙間から中をのぞくと・・・

神武さんと提督・・・そして北上さんが夜戦(意味深)をしていたのです!!すつぽんぼん・・・ではなく、二人とも中破の時の服が破れたときの状態で激しくヤツていま

た。もう、こちらが恥ずかしくなるぐらいに。

顔が真っ赤になるのを感じ、ふと目を逸らすと。隅に隠れてビデオカメラを回している大井さんがいました。涎を垂らしているその顔は駆逐艦には見せられません。念を送ると気付いたのか、こちらに向きました。

「大井さん、何やってるんですか!?!」

「(見てわかりませんか? 録画ですよ。)」

「(だから何で録画!?!)」

「(それは：：あとで《放送禁止》にするためよ。：：あ、すごい、あんなことまで：：。)」
大井さんが再び撮影に集中してしまいましたので、私は帰ろうとするとどこからかプロペラ音が。空母の艦載機のようにです。爆弾がつけられていたであろう場所にはまたビデオカメラが。部屋から去っていくようなので追跡します。

@@@@

追跡していくと五航戦の部屋へたどり着きました。中からは瑞鶴さんと思われるいびきが聞こえます。ということはさっきの艦載機は翔鶴さんなのでしょう。襖の外から呼びかけます。

「翔鶴さん、ちよつといいですか?」

「何かしら?」

っ!? 後ろから!?

「ええとですね、いや、こんな夜中に艦載機が飛んでたから何事かなーって思ってますね。」

「それで?」

「気になって付けてみたらここにきたんですよ。」

「そう。・・・では早くお休みしなさい?」

「ええ、休みますね。ところでこの周りの爆撃機はなんですか?」

「あら、私としたことが。誤って発艦したみたいだわ。でも大丈夫よ。誰かさんがこのまま何も言わずにいたら爆弾投下なんてしないはずだから。」

「そ、そうですか・・・あはははは」

「そうよ、うふふふ」

翌朝、とある重巡洋艦が倒れているのを駆逐艦が発見したという。当の重巡洋艦に記憶がないことから、泊地内ではいつそう警戒態勢が取られたとか。

カウンセリング。

「レーベレヒトマースです。」

「マックスシユルツよ。」

この前の護衛任務の際に仲良くなった独逸艦がうちの泊地に派遣されてくることになった。予定ではビスマルクさんも来るはずなんだけど…。

「ビスマルク？彼女は迷子よ。」

えっ!?

#####

ヤンデレ・・・前略) 誰かに対して好意を抱いているが、その強すぎる好意が直接的または間接的な原因となつて精神を蝕み、精神的に病んでしまう状態の進行、或いはなつてしまった状態を指す。中略) 精神的に追い詰められ壊れていく過程やその身を壊すほどに強大すぎる愛と葛藤と独占欲(以下略)(ニコニコ大百科より)

@@@@@@

艦娘の中には持病のシスコンを拗らせてヤンデレへと変化してしまう者もいる。姉

妹艦の言葉以外聞こえないもの、対象に近づくものを排除するもの、特に何か行動を起こすこともなく内側に溜め込むものなど、様々だ。深海棲艦や妖精、艦娘が現れ始めた当初から度々この問題は取り上げられ、ここ数年は各基地の司令長官や、またそれに準ずる者、それから司令の信任を得ている者が、一定期間ごとにカウンセリングを行うこと、というお達しまで出ている。

さて、今回のタウイタウイ泊地にて行われるカウンセリングの対象者が回覧板で各部屋に伝わっていた。

以下の者は指定時刻に来ること。

天龍型二番艦龍田

球磨型四番艦大井

扶桑型二番艦山城

タウイタウイ泊地では別名「ヤンデレ三人衆」と呼ばれている者達である。

@ @ @ @ @ @ @ @

龍田の場合。

今日のカウンセリングは私こと神武とおつきさん、それからごうちの三人がカウンセラーをやる。私がカウンセラーの一人と聞いて皆が驚愕の視線を向けてきたのは少し

不思議だ。

「早速だが龍田、天龍を虐めるのはやめなさい。」

おっと、始まったみたい。

「あら、私も天龍ちゃんも愉しんでいるから問題ないわよ？え〜つと、そう、ういんういんってやつ？」

「・・・天龍の泣き叫ぶ声が聞こえるという苦情がきているのだが。」

「喘いでいるのよ〜」

「身体中に鞭とか火傷とかあざみたいなのが風呂に入る前にあるとか、出撃してないのに怪我しているとか、聞いたよ？」

「天龍ちゃんも悦んでるのよ〜？」

龍田の矯正はかなり難しいことが予想されるので、本国より至急本職のカウンセラーを求む。

@@@@@@

大井の場合。

「私はいたって正常よ。カウンセリングすることなんてないわ。ほう。」

「タンスの上から二番目の引き出しの二重底と見せかけた三重底の下に隠してある北上さんの」

「ごめんなさい、私が悪かったです。」

大井、特に問題無し。

「あたしの下履き帰ってきてないんだけど。」

@@@@

山城の場合。

山城が入ってくると一気に部屋の中がどんよりと濁る、そんな感じがした。むう、仕方ない。

「扶桑さんが山城のためにお菓子を作っているって聞いたんだけどな…」

「さあ始めましょう今すぐに。」

結果。

特に問題無し。ただし要経過観察。

@@@@

三人衆とケリを着けて、その他の軽度の娘達もついでにやっていたら、すっかりおそくなつてしまった。

「いや、大変だったね…。」

ハラリッ。

「ああ、そうだな…。今日は早く寝ようか。ん？神武、何か落としたぞ。」
「ん？ああ、それただのゴミだよ。捨てとくね。」

特殊警戒指定艦娘「神武」のカウンセリングは入念に行うこと。

そう書かれた紙はぐしやぐしやになってゴミ箱へと放り投げられた。

#####

パンチラ：漢のロマン♪

@@@@@@

崇神が秘書艦となった日（神武は所用で1日いない）。崇神は仕事をするために執務室に来ていた。

コンコンッ

『ちよつと待つてくれ…。いいぞ。』

許可が降りたので、部屋の中に入るとどこからともなく風が吹いて崇神のスカートがめくり上がる。

「よし!!成功だ!!」

「・・・まず殴るね。」

ドゴツバキツメギヤツ!!

@ @ @ @ @ @ @ @

「・・・それで、なんで私を実験台にしたの?…神武なら何やつても許してくれるのに。」

小沢は首から反省中と書かれたプラカードを掛けて石畳の上に正座していた。

「何でって・・・昼に見たら、夜楽しめないだろ?神武がせっかく選んできているんだから夜まで待たないとな。」

「・・・もう一回殴るね。」

女の闘い。

色々間違っているタウイタウイ泊地：・某動画サイトにて作られているMAD。職人の手によって作られたこのMADはさまざまな反響を呼んでいる。大体OPは神。本編は爆笑する。横須賀や呉、ブルネイなどもある。

@ @ @ @ @ @

↳ Vitalization

この曲と共に艦娘達の戦闘シーンが流れる。戦闘シーンが終わり、曲も終わるとテロップが流れる。

↳ OPと本編は全く関係ありません。そこるところもよろしく頼むわね

テロップが終わると今度は子供達の声が聞こえる。

『あしがらさんのこんかつだいさくせん!!』

るーんるーんるーん♪こんにちは、私足柄。花の乙女よ。妙高型の中では一番最後に完成したの。つまり若いってことよ。えげれすに行つた時には植えた狼なんて言われたの。失礼よね。いくら武装載せすぎたきらつて動けない程じゃないっつーの。…あ

らやだ、うふふふ。今日は他の女の子を誘って男の子達とお話をするの。合コン？そんな飢えた狼みたいな真似するわけないでしょ？でも大変。今日来る女の子が二人、彼氏が出来ちやつて来れなくなったみたいなの。ちっ!!・・・今日お話を主催する女の子（ネットで知り合ったから顔は知らないの）が代わりに一人連れてくるから私も一人誘うことになっちゃったの。

そこで私が誘ったのは神武ちゃん。いつもオドオドしていて気弱な彼女もこのお話会で友達を作れたらいいなって思つて、声をかけたの。決して誰も来てくれないからじゃないわ。

「それでは行きましょう？神武ちゃん。」

「は、はい。」

ズベツ

「あうっ!!」

「あら、大丈夫？」

こけてしまった神武ちゃんの艷装をささえ……て……ふぬぬぬ……ふう、支えて助け起こす。

「ごめんなさい足柄さん……。」

「いいのよ、神武ちゃん。さ、行きましょ？」

「・・・はい!!」

@@@@

お話会の場所は宴会場。男女合わせて二十人くらいいるのよ?主催する女の子はタ・キュー・フラさん。連れて来た女の子はヲ・キュー・フラちゃんとし・キュー・フラちゃんは。二人ともタちゃんの妹で本当はヲちゃんだけだったんだけど、増えたみたい。今日は来るのがちよつと遅くなったからもう始まつてるみたい。

「こんばんは〜」

「ハ、ハ、こんばんは・・・」

@@@@

なんだ?あの短小ども。そんなに神武がいいのか。何が違つて言うのよ!?やつぱり胸?胸なの?私も結構あるわよ!?!肌だつてすべすべだし、髪の毛も毎日手入れしてるのに。。。身長だつて神武よりちよつと大きいかも知れないけど!!体重は私の方が軽いよ!!

もう、なんかどうでもよくなつてきて周りを見渡すと、ポツンと離れたところにいる女を発見。お仲間みたいね。

「あなたも?・・・!?!」

「ええ・・・!?!」

まさかの深海棲艦タ級だった。お互いに武器を装備して・・・やっぱり外す。「やめましょう…。」

「そうね…。」

「ヲ級とレ級は？」

「あそこよ。」

タ級が指差した方向には男に囲まれたヲ級とレ級。あ、神武も混ざった。

『君たちかわういゝねえ!!』

『僕達と夜戦しないかい?』

『ちよつと触つてもいいかな?』

『あ、あの…困ります…。』

『・・・ヲツ。』

『美味しいものが食べたいな!』

ふう。

「お互いに連れてくる子を間違えたわね。」

「ええ、そうね。」

足柄、合コン成績無勝。そのテロップと共に動画は終わった。

#####

ヤル気スイッチ…神武に搭載されたとてもすごいスイッチ。右の乳首は殺る気、左の乳首は犯る気にさせるぞ!!

@@@@

「といのうのを考えてみたんだがどうだろう。」

「提督が触つても犯る気にしかならないし、他の人が触つても殺る気にしかならないと思うわ。それよりそんなことで呼び出したの？今日も赤城さんの観察の途中だったのだけれど。」

「ああ、その観察の件で赤城から苦情が来ていてな。加賀、お前80時間遠征な。」
「なん…だと…!？」

とある戦艦の独り言。

「搭載してみよっかな…。」

@@@@

遺言？

水結・・・発泡酒。

@@@@

「水結とかジューズですわあ…」

「その割には酔っているな、神武。」

「ながもんうるさーい。そんなんだから小学校で『あ、ながもんだ!!』って言いながら防犯ブザーを鳴らす訓練が行われるんだよ…。」

「ふっ!!」

「ここは居酒屋『鳳翔』。軽空母鳳翔が女将をつとめる居酒屋だ。今日は戦艦娘達の貸し切りで宴会が行われている。」

「ここ？ここがいいんですか？」

「あ、や、だめ、そこは…!!榛名やめて…!!」

「ねえねえ、今どんな気持ち？どんな気持ち？世界のビッグ7が老朽艦に弄られてどんな気持ち？教えて下さいよねえ。」

「らめえ!!爆発しちゃううううう!!」

皆アルコール耐性があるわけではなく、上戸もいれば下戸もいる。

「ひえー、大丈夫デースかー?」

「駄目です、お姉様…。吐きそう…。」

「だからいつも言っているだろう、はしやぎすぎると。」

「日向、それ柱…。」

「あらあら山城♪何しているの?」

「お姉様…。ああ不幸だわ…。」

「つまりおっさんはおっさんなのであって、つまりおっさんなんだよ。」

「いや、すまんが何言っているかわからないのだが。」

「まったく…これだからながもんは。だから『退魔艦ナガト』なんてゲームを作られるんだよ。」

「かはっ!? 神武、何故それを知っている!？」

「おっさんがやってた。」

「小沢ああああああ!!」

@@@@

退魔艦ナガト…エロゲー。長門そっくりの女性がモンスターにニヤンニヤンされるゲーム。シリーズには姫戦艦ビスマルクというものがある。

@@@@

大体一時間後。

「…うわあ。」

所要で遅れてきた崇神が見たものは、まさに惨状。大の字で寝ている榛名に、気分悪そうな比叡の背中をささする金剛。どんよりオーラを放っている、山城、陸奥。ずっとニコニコしながら飲み続ける扶桑。柱に話しかける日向。幸せそうに寝ている神武。そして…

「この面子で酒はもう飲みたくないな…。」

「まったくね…。」

どこか遠い目をしながら酒を飲み続ける長門と伊勢だった。

#####

翔鶴：大日本帝国海軍の航空母艦。開戦後に造られたため、条約に縛られることなく造られ、当時帝国海軍最強の空母だった。一航戦、二航戦と比べれば確かに乗組員の腕はあまりよくないが、それでも皆ゼロファイターとして活躍した。艦内の治安は良く、搭乗していた者は「一つの家族のようだった」と述べている。第二次大戦中には大きな活躍は挙げなかったものの、朝鮮戦争、日韓戦争、第三次世界大戦では同海軍の戦艦神武と共に輝かしい戦功を挙げている。

@@@@

19??年横須賀

「神武ーいるかー?」

『提督?』

「おお、翔鶴か。神武を知らんか?」

『神武なら寝ていますよ?』

この場合の寝ているとは点検中という意味である。精神体である彼女達には睡眠は必要はない。しかし機関部の点検等の際には意図的に眠ることがある。身体をまさぐられるような変な気分になるらしい。

「そうか…おはぎを持ってきたんだがな…。翔鶴、食べるか？」
『いいんですか？』

「ああ。今日はあまり長居できないからな。」

『やった♪神武が絶賛する提督のおはぎ、一度食べてみたかったです。』

おはぎの気が翔鶴の口に吸い込まれていく。一つ分が吸い込まれ終わったと同時に、翔鶴が固まった。

『な、何なんですかこれは!?神武はいつもこんなものを!?な、なんて贅沢な…』
「そこまで言うほどではないよ。」

少し照れている小沢。しかし、すぐに真面目な顔になる。

「翔鶴、君に頼みたいことがある。」

『何ですか？提督。』

「…私ももう永くない。年だ。」

『はい。』

翔鶴も神妙に頷く。小沢の歳は普通なら引退している。現に小沢より歳上は既に海軍にはおらず、歳下も引退を始めている。

「神武は私にどこか依存しているところがある。翔鶴もそれはわかるだろう?」
『ええ。』

翔鶴は思い出す。大戦の後から神武は変わった。親しい者にしかわからないがどこかよそよそしいのだ。感情も薄れているように見える。今までと同じような反応をしているものの、心のそこからというよりはそう演じている、という感じだ。しかし、小沢と話しているときだけは今までと同じ・・・どころか、よりべたべた甘えている。

「私がいなくなった後、どうなるか…それが気がかりだな。崇神にも言っているのだが、翔鶴。どうか神武のことを頼む。お前は私と崇神以外で心を許している数少ない存在だ。」

『提督…?』

「ごほつごほつ…!!くれぐれも神武のことを頼む!!」

『提督!!』

@@@@

「結局、約束は果たせなかったわね…。」

「どうしたの?翔鶴姉。」

「何でもないわ、瑞鶴。」

今度こそ、もう一度約束を果たさないと…。

「まずはお淑やかにさせてみようかしら。」
「いきなり押し掛けてきて何するのさ!？」

谷風が仲間になりたそうにこちらを見ている。

聖杯戦争：聖杯戦争（せいはいせんそう）とは、手品師達が競い合うエクストリームスポーツの一種。始まったのは200年ほど前からで、スポーツとしての歴史は浅い方だが、選手・観客ともに熱狂的な支持者も多く、開催されると血が流れるほどの盛り上がりを見せる。

参加者である手品師達は、マスターとして本大会に参加登録を行う。参加登録が受理されたマスターにはサーヴァントと呼ばれるパートナーが派遣され、タッグを組んで勝利を目指す。なお、マスターとサーヴァントの関係は、手品師という呼称からナポレオンのようなものと認識されがちだが、どちらかというと言川大介花子から夫婦要素を取り除いた関係、と言った方が適切である。また、基本的に出場資格があるのは手品師に限られるが、主催者の独断次第では、ニートや引き籠り、無差別殺人鬼などに資格が与えられることもある。なお、開催地は日本の一都市に限られているが、これに対して国外の選手から抗議の声も上がっている。

基本的に、死んだら負け、生き残った選手が勝ち。極めてシンプルなルールである。無論、エクストリームとはいえスポーツであるため、他者を殺すことが目的の競技では

なく、仔細なルールに従えば、選手自身の意思による棄権も認められているが、棄権した選手を保護する監督役がもれなく黒幕であるため、敗退した選手は、自動的にほぼ死亡する運命にある。自身を勝利に導くためには様々な行為が認められており、マスターの手の使用は勿論、不意打ち、だまし討ち、闇打ち、他選手との同盟、裏切り、洗脳、凌辱、大量破壊兵器の使用、禁則事項ですによる魔力充填等々、ありとあらゆる行為が平然と行われる。(アンサイクロペディアより抜粋)

@ @ @ @ @ @

衛宮士郎は困惑していた。

普段通りの日常を過ごしていたら全身タイツの槍を持った変態によってハート^{心臓}を射抜かれ、なんだ、ただの夢かと帰宅するとまた変態に襲われた。またハート^{心臓}を射抜かれそうになったときに、黒髪の少女が割り込み、変態から士郎を助けたのだ。

だが、士郎が困惑しているのはそんな些細なことではない。

「(こいつ……人の家に入り込んで一体どれだけ食べるつもりだ……!?)」

士郎を助けた少女は自らをバーサーカーと名乗った。そして士郎のことをマスター、

と呼ぶと彼女はこう言った。

『「先ずご飯食べさせてよ。』

そんな会話が あつたのは 一時間前の話。だ というのに 士郎は 未だ料理を 作り続けている。

「おかわりー!!」

「あいよ!! (どうする? 食材があと少ししかない: : いや、あれを使えば何とかなる!!)」

士郎は寸胴鍋の火を止め、精神集中状態に入る。衛宮邸の空気が変わる。魔力が、動く。

「・・・士郎?」

バーサーカーは訝しげな顔をするが、警戒はしていない。それもそうだろう。この集まっている魔力からは人を害そうという気は感じられず、むしろ喜ばせたい、というものだからだ。

《《無 限 の 料 亭》》
アンリミテッド・クッキング・ワークス

地脈から吸い上げた魔力を使用して作られた固有結界。バーサーカーのいる辺りは一面の暈と卓袱台、士郎のいる辺りは調理台と調理器具、そして具材のオンパレードと

なっていた。

「いくぞバーサーカー、腹の余裕は大丈夫か？」

「まったくもって問題ないよ。」

こうして二人の聖杯戦争は始まった。

@@@@

間桐慎二の必死のお願いに頷き、間桐桜に緊縛プレイを強いられていたライダーことメデューサを助け出し、ついでに間桐桜にも「爺ちゃんも虫もただの幻覚。難見沢みたいなもんだ。」と説得（説得が終わった瞬間に遠坂凜とそっくりになったのは余談）。流れ作業でメディアと葛木をくつつけ脱落させ、帰宅すると待ち構えていた義理の姉イリヤと幼馴染アルトリアが聖杯戦争の参加者だと驚愕するも、じゃんけんで決着をつけ、見事に勝利し（以下略）

そしてとうとうエキストラの参加者ギルガメッシュとその相方ことマーボー神父との戦闘が始まり……

「土郎、いい!？」

「いつでもいける!!」

「よしきた!! 真名解放『デビル・バトルシツプ悪魔の戦艦』」

キュイイイイアアアアアアアアアアア
!!!!!!!

「全武装発射ア!!!」

「ちよ、おま、ア——ツ!!??」

@@@@

「・・・という夢を見たネ!!」

「いくらお姉さまでもこれは・・・」

「紅茶の飲みすぎっばい?」

#####

prototype (noun) (for/of sth) the first
design of sth from which other are co
pied or developed

modern bicycle
? the prototype of the m

(By Oxford Advanced L
earner's Dictionary seventh edition)

@ @ @ @ @ @ @ @

天津風は島風のプロトタイプだ。見た目もどことなく似ているし、島風と同じく連装砲ちやんががいる。そんな天津風は島風にとって・・・

「天津風!!」

「あら、島風じゃない。元気にしてた?」

「うん!!」

島風にとって母のような存在だ。

@ @ @ @ @ @ @ @

「しかし天津風の下着はえろいよなあ・・・」

「崇神姉様と翔鶴さんに言いつけますわよ?」

#

明石・・・連合艦隊唯一の工作艦。最新の独逸製工作機械を大量に搭載、海軍工廠より設備が良かったとか。当然米軍からは最重要攻撃目標とされていた。タウイタウイ史では他にも工作艦はいる。作者の友人によると「アイテム屋娘と声違うくね?」

@ @ @ @ @ @ @ @

「久しぶりね、神武。」

「うん、久しぶり。これからお世話になるね。」

私は明石達にたびたびお世話になっていた。砲というものは撃つたびに歪む。いくら丈夫に造ろうと数十、数百と撃てば歪んでしまう。私は、どうか私達は普段から予備の砲身を積んで歪むたびに変えていたけど、砲塔はどうしようも出来ない。そこで私達はこの明石と二代目明石、三原、桃取達工作艦に修理してもらっていたのだ。

「神武・・・変わった？」

「え？そう？」

「ええ。何かに怖がつてるような・・・どこか悪いの？修理しようか？」

「そんなことないけど・・・じゃあ、一応見てもらおうかな？」

「よし、では提督は出てってくださいね。」

「「え？」」

「え？じゃないですよ。悪いところないか見るんだから、身ぐるみ剥ぐにきまつてるでしょう？」

「なんだか寒気が・・・」

「@@@@@」

『「じゃわっ!?!ど、どこ触ってえん?!」』

『まだまだ触診続けますよー』

「ねえ提督。止めなくていいの？」

「お前は止めないのか？金剛。」

「止めないわよ。私まで被害に遭うじゃない・・・」

「そうか。俺もだ。寝て起きたらサイボーグになってたとか嫌だからな・・・」

姉妹喧嘩。

とある日のこと。タウイタウイ泊地は静まり返っていた。聞こえるのは波のさざめく音だけ。そして・・・

「・・・神武・・・お願いだから・・・ここに・・・いて・・・」
「やだよ。わたしもおっさんのところにいくの。」

互いに砲を突き付けにらみ合う神武と崇神。

「(やつべーまじやつべー!!つべー!!やつべーよ、なんでこの二人が闘うことになってんだよ、ありえねーよ、つかまじやつべーよ!!泊地が崩壊のシナリオが500通りシミュレートできちまったよ、やつべー!!!よりもよつて私が秘書艦の時に喧嘩してんじやねーよまじやめろよF●CK!!!)」

「(金剛姉さまの顔がすごいこぼれ!!)」

「(神武と崇神の戦闘・・・ね。さて、どうなることやら。)」

「きやるーん」

「矢矧はドヤ顔で阿賀野姉は蕩け顔・・・はどうでもいいとして、だれかこれ、止めないのかしら。」

二人の周りにはたくさん艦客が静かな面持ちで二人を注目している。なぜこのように事態になったのだろうか・・・

@@@@

少し前のこと・・・司令官室

「大本営から呼び出されてな、応神を横須賀に見せに行くことになった。」

私と崇神は司令官室に呼び出されていた。なんでも応神は未成艦かつ、深海棲艦時の記憶がはつきり残っているので大本営に連れて来いということになったのだとか。後は強力な艦だから・・・とかいろいろ。

「それで、だ。二人のうち、どつちかでいいんだが後からこつちに来てくれ。新しい装備などを大量にいただけようだな、応神に載せた場合護衛がいるやもしれん・・・時間があれば観光もできるぞ。」

観光か・・・。横浜、また行きたいなあ・・・。

「ついてくる面子は適当に見繕っておいてくれ。それでは私はもう行く。任せたぞ。」
まあ、私が行くべきだよな。

@@@@@@

「どういうことかな？」

「……だから……私が行くって……」

「ふうーん？」

Hey! 金剛デース!! 修羅場絶賛発生中デース!!……この喋り方やつぱり面倒だわ。
提督のところに行くということとで修羅場が発生中よ。普段なら崇神はお留守番して神
武が提督に会いに行くのだけれど……

「……あのイベントは……外せない……」

崇神の好きなアイドルグループの生ライブが横須賀であるようで、珍しく崇神が行く
と言っているわけ。私が秘書艦やつてる時に面倒なこととしてくれなきやいいんだけ
ど……。

@@@@@@

バシユツツ!!!

神武の電磁波砲から発射され戦は始まった。神武と崇神が互いに主砲を撃ち、避ける
基本として段々と距離が縮まっていく。

「・・・行けっ!!」 782 / 800

「っ!」 764 / 800

二人の距離が縮まりに縮まり、近接戦闘に入るかというときにいきなり崇神が左に飛び退く。そして神武の後ろから二発の噴進弾が飛んでくる。崇神の戦闘ヘリコプタ『天雷』からの対艦噴進弾だ。

ドガアアアアアンツツツ
!!!!!!

神武の周囲が爆発し、水蒸気が立ち昇る。

「・・・やった?」 782 / 800

「ぎんねん、うしろだよ。」 698 / 800

噴進弾が直撃するかというときに迎撃が間に合ったのだ。崇神の背後に立った神武は足払いを崇神にかけ、転倒させる。そして・・・

「わるい!」は・・・ドンドンしなきやね?」

ドガドガアアアアアンツツツ!!

そして・・・

「燃料7000に鋼材9000!?修理だけでどれだけ持っていくのデースか!？」

「大丈夫よ、神武さんも崇神のこと嫌ってるわけじゃないって〜」

「ほら、阿賀野姉だってこういつてるんだし・・・」

「えぐつえぐつ、だって・・・」

数日後、小沢に神武と崇神、金剛が怒られたり、ライブ限定グッズを神武が崇神に渡して仲直りしたりするのだが、それはまた別の話。